第２章

「武術的身体表現」を有するムラ行事について

第２章 「武術的身体表現」を有するムラ行事について

第１節　地域の生活文化に根差した武術的身体表現の歴史的事例

はじめに

本節は地域の生活文化に根差した武術的身体表現の歴史的事例を、近代の諸史料中に求めていくものである。他の節が現時点での民俗学的な調査に基づく内容となっているのに対し、本節のみは過去の出来事を同時代史料によって見ていく、という事になる。地域の生活文化として見ていく行事の性質としては他節との整合・親和を求め、いわゆる地域行事における棒術ないし棒踊をその対象とする。

しかし文字史料によって得られる情報には実際のところ制限も多い。地域が曖昧な場合をはじめ、演じられた棒術・棒踊がどのようなものであったかなど、具体的な情報に欠けているものが多々ある。

近代史料における事例採集は特に新聞記事がそのほとんどを占めることになるが、元記事自体がそもそも「棒術」または「棒踊」の字句を伴っていない場合もある。例えば単に「六尺棒」を振るったというような、棒の記述はあるもののそれを棒術または棒踊であると特に言及しない記事もある。そのほかにも武具としての棒の存在は確認されるものの、どのような芸能や演目だったのか皆目見当がつかないものも中にはある。それらの事例もここでは広く取り上げることとした。

それにしてもこの行事の場で供される棒術は、およそ次の三種に大別されるのではないだろうか。まず一つに純粋な武技としての棒術。二つに武技としての棒術を基盤としながらも、意図的に娯楽性を加味した棒術（客体満足度の高まりを期待した芸能方向への改編）。三つには客体満足度を重視し、あらたに創作された棒術である。これから紹介していく事例が、この三種の棒術のうちいずれに該当するものなのかという判定は、多くの事例においておそらく不能であろう。

以上のような限界を抱えつつも、とにかく採集できた歴史的事例（1906 年を下限とする）をまとめていきたいと思う。

なお事例採集にあたり閲した主な資史料は以下の通りである。

新聞　『琉球新報』（1906 年以前）

雑誌　『琉球教育』1 ～ 116 号（本邦書籍復刻版第 1 ～ 12 巻、1980 年）

　　『沖縄教育』1,2,6 ～ 13 号（不二出版復刻版第 1 巻、2009 年）

県史　『沖縄県史料　近代 3　尾崎三良岩村通俊　沖縄関係史料』（1980 年）

　　『沖縄県史　第 12 巻資料編 2』（1989 年）

　　『沖縄県史　第 13 巻資料編 3』（1989 年）

　　『沖縄県史　第 14 巻資料編 4』（1989 年）

その他　山縣有朋「南航日記」（1886 年）

　　笹森儀助『南島探験』（平凡社東洋文庫版、1983 年）

　　「斎藤用之助日記」（『第 11 代島尻郡長　齊藤用之助資料』1999 年所収）

採集事例とその類型

閲した同時代史料によって得られた事例は 43 件で、結果として新聞記事（全て『琉球新報』）に事例採集が 36 件を数えそのほとんどを占めた。残る 7 件の内訳は 6 件が雑誌『琉球教育』、1 件が山縣有朋「南航日記」となる。

これら採集事例は一覧表にまとめ、本節末尾で別表「近代史料にみえる武術的身体表現（棒術）の歴史的事例一覧」として掲げている。得られた武術的身体表現（棒術）のキーワードとしては、単なる「棒」のほか、

「棒踊」、「棒遣」・「棒使」・「棒つかひ」、「棒較へ」、「六尺棒」、「棒仕合」、「棒振」、「沖縄棒」、「棒合せ」、「棒打」があった。わずかにその演武風景（実際には「演舞」の場合もあろうが、本稿では以下「演武」を用いる）を伝える記事もあるが、例えば演武は二人一組で行われたという人数程度の情報しかなく、そのほとんどが事象として「棒踊」があったという記述に過ぎない。これは本節のはじめにで示した文字史料の限界でもある。

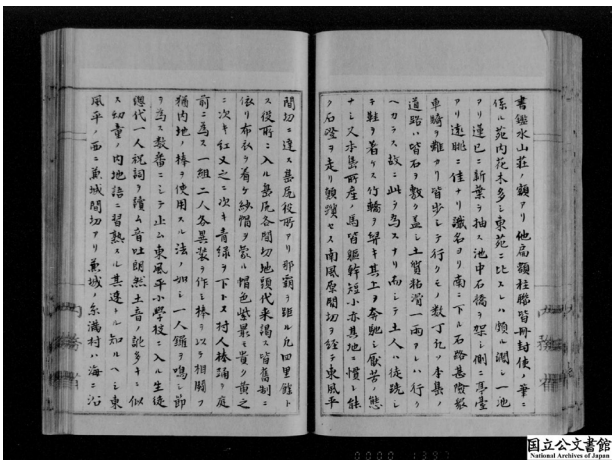


写真2-1-1　山縣有朋「南航日記」（国立公文書館所蔵）
左頁四行目から五行目にかけて
「村人棒踊ヲ庭前ニ為ス一組二人各異装ヲ作シ棒ヲ以テ相戦フ」
とある。

それはそれとして試みに採集事例を性質ごとに分類・整理し、次のような類型とその内訳を得た。

①祭祀行事…6 件　　②学校行事…8 件
③戦争行事…18 件　　④皇室行事…4 件
⑤接待行事…3 件　　⑥その他…4 件

以上のうち地域で古くから継続的に行われてきたであろうものは①祭祀行事のみで、特に②学校行事や③戦争行事、④皇室行事は、沖縄県設置後の近代化あるいは日本化の流れの中で形成されてきたものだと言えよう。

類型ごとの事例概観

それぞれの類型ごとに事例を概観してみよう。

①祭祀行事は、ムラ行事とも言い換えることができる。八月十五夜や、葬送儀礼で用いる龕の修繕祝いなどで「棒踊」が披露されている。それぞれ別表（表2－1－1）の事例番号で示せば八月十五夜は事例 9 と事例 15、龕の修繕祝いに該当するのは事例 14 である。少々変わった事例には、感染症であるコレラの退治を祈祷したものがある（事例 21）。

②学校行事は各種学校が主体となった行事である（会場が各種学校だとしても、他の団体等が主体となっている場合はここに分類していない）。確認できた 8 件のうち 7 件が開校式や新校舎落成式での棒術披露（事例 4、5、6、16、19、20、23）で、運動会における事例を見つけることはできなかった（管見の限り、運動会での棒術披露は 1908 年の沖縄県師範学校における事例が初出）。

③戦争行事は調査対象となった 1879 ～ 1906 年の間に、日清戦争（1894 ～ 96 年）と日露戦争（1904 ～ 05 年）があった事から比較して多く、18 件の事例が見られた。祝捷会における棒術披露は 8 件（事例 2、13、26、28、29 ～ 32）、次いで凱旋軍人歓迎会が 4 件（事例 37 ～ 40）、招魂祭が 3 件（事例 35、36、43）と続く。

④皇室行事の 4 件は、全て天長節に係るものである（事例 3、10、27、34）。

⑤接待行事は要人・賓客の接遇行為である。当時の内務大臣・山縣有朋の来県（事例 1）、明治天皇の侍従・北条氏恭の来県（事例 17）、皇族・北白川宮妃富子の来県（事例 18）の 3 件が認められた。

⑥その他の 4 件にも触れておくと官公署開庁式が 2 件（事例 12、33）、道路開通式が 1 件（事例 24）、物産品評会並展覧会での披露が 1 件（事例 42）あった。

おわりに

本節は同時代史料中に、地域の生活文化に根差した武術的身体表現（棒術）を求めたものである。得られたほぼ全ての事例が他者の鑑賞を前提とするする、いわば芸能系武術という事になった。つまり演武大会や武術試合といった芸能色を帯びていない、まさに武術然とした事例、あるいは実戦的事例は1件も認めることができなかった。

これが採集できた事例の少なさに拠るものなのか、あるいは他の要因に拠るものなのかについては、さらなる事例採集と分析とが必要となるだろう。

しかしながら本調査に拠って、さまざまな行事の中に武術的身体表現（棒術）が息づいていること明らかとなった。併せてそれが県内全域において共通してみられるということも、表2－1－1（近代史料にみえる武術的身体表現（棒術）の歴史的事例一覧）によって確認できる。

これらのことから、棒術は確かに地域の生活文化に根差したものである、と断ずることが出来よう。

別表（表2－1－1）　近代史料にみえる武術的身体表現（棒術）の歴史的事例一覧

本表について

本表は近代沖縄における武術的身体表現のうち、特に棒術についての事例を同時代史料に求めてまとめたものである。調査期間等の制約から 1879（明治 12）～ 1906（明治 39）年までの事例採集（全 43 件）となっている。

凡例

・得られた事例は年月日順に排列したうえで、それぞれ通し番号を付した。

・年月日欄には事象の生じた日を記した。但し採集事例が後日の予定を報じるものである場合は、その予告記事の掲載年月日を記した。またその場合は事項欄の冒頭に「【予告記事】」と明記した。

・地域欄には事象の生じた当時の地域・自治体名等を記した。但し一部の地域・自治体名については、直後の括弧内に現行の自治体名等を記した。

・事項欄には原典における武術的身体表現（棒術）がどう記されているのかを、鉤括弧でくくってこれを記した。

・類型欄には採集事例を以下の性質に分類し、それぞれに割り当てた類型番号を記した。

類型番号　①……祭祀行事（呪禱行為も含めた）

類型番号　②……学校行事（開校式、落成式、御真影奉戴式等）

類型番号　③……戦争行事（祝捷会、餞別会、歓迎会等）

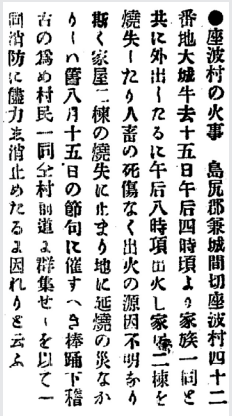
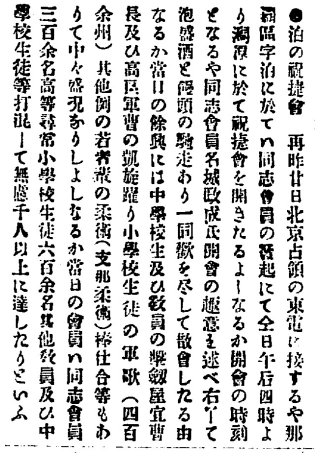
類型番号　④……皇室行事（天長節）

類型番号　⑤……接待行事（要人・賓客の接遇）

類型番号　⑥……その他

表2－1－1 近代史料にみえる武術的身体表現（棒術）の歴史的事例一覧

番号	年月日	地　域	事　　項	典　　拠	類型
1	1886. 3. 4	東風平（八重瀬）	島尻役所（東風平間切番所内）を訪れた山縣有朋に「棒踊」を披露	山縣有朋「南航日記」	⑤
2	1895. 5. 7	名護	【予告記事】名護市中を会場に計画中の祝捷会（日清戦争）での「棒踊」	『琉球新報』（明治 28 年 5 月 7 日付）	③
3	1896.11. 3	中城	中城尋常小学校で催された天長節行事で「棒」が披露	『琉球教育』12 号（明治 30 年 1 月 16 日発行）	④
4	1897. 3.21	真和志	真和志尋常小学校の開校式で「棒遣」が披露	『琉球教育』16 号（明治 30 年 5 月 27 日発行）	②
5	1898. 4.21	大宜味	喜如嘉尋常小学校の開校式で「棒踊」が披露	『琉球教育』30 号（明治 31 年 8 月 20 日発行）	②
6	1898. 4.24	本部	謝花尋常小学校の開校式で「棒踊」が披露	『琉球教育』30 号（明治 31 年 8 月 20 日発行）	②

番号	年月日	地　域	事　　項	典　　拠	類型
7	1899. 8.19	首里	【予告記事】首里赤田で催される予定の弥勒踊で「棒較へ」	『琉球新報』 （明治 32 年 8 月 19 日付）	①
8	1899. 9.15	糸満	座波村でおきた火災を「棒踊」練習中の村民が消火する  ●座波村の火事　島尻郡兼城間切座波村四十二番地大城牛去十五日午后四時頃より家族一同と共に外出したるに午后八時頃出火し家屋二棟を燒失したり人畜の死傷なく出火の源因不明なり斯く家屋二棟の燒失に止まり地に延燒の災なかりしは舊八月十五日の節句に催すへき棒踊下稽古の爲め村民一同全村前道に群集せしを以て一同消防に盡力し消止めたるに因れりと云ふ 記事見出「座波村の火事」（明治32年9月27日付『琉球新報』所載） 左端三行目に「旧八月十五日の節句に催すへき棒踊下稽古の為村民一同全村前道に群集せしを以て一同消防に尽力し消止めた」との記述がある。 たまたま棒踊の稽古で集まっていた人々が、火事を消し止めたことを報じている。	『琉球新報』 （明治 32 年 9 月 27 日付）	①
9	1899. 9.19	具志頭 （八重瀬）	具志頭村と玻名城村の十五夜行事で「棒」「棒踊」が披露	『琉球新報』 （明治 32 年 9 月 21 日付）	①
10	1899.11. 3	名護	大兼久馬場で催された天長節行事で「六尺棒」が披露	『琉球新報』 （明治 32 年 11 月 13 日付）	④
11	1899.11.11	北谷 （嘉手納）	野国尋常小学校で催された北谷間切新兵餞別会で「棒」が披露	『琉球新報』 （明治 32 年 11 月 25 日付）	③
12	1900. 1. 1	石垣島	八重山区裁判所の開庁式で「棒踊」が披露	『琉球新報』 （明治 33 年 2 月 5 日付）	⑥
13	1900. 8.20	泊	潟原で催された義和団の乱鎮圧（北京陥落）祝捷会で「棒仕合」が披露  ●泊の祝捷會　再昨廿日北京占領の東電に接するや那覇區字泊に於ては同志會員の發起にて全日午后四時より潟原に於て祝捷會を開きたるよなるか開會の時刻となるや同志會員名城敗成氏開會の趣意を述べ右了て泡盛酒と饅頭の驟走あり一同歡を尽して散會したる由なるか當日の餘興には中學校生及び教員の擊劍屋宜曹長及び高良軍曹の凱旋躍り小學校生徒の軍歌（四百余州）其他例の若者衆の柔術（支那柔術）棒仕合等もありて中々盛況ありしよしなるか當日の會員は同志會員三百余名高等尋常小學校生徒六百余名其他教員及び中學校生徒等打混ーて無慮千人以上に達したりといふ 記事見出「泊の祝捷会」（明治33年8月23日付『琉球新報』所載） 左端四行目に「若者衆の柔術（支那柔術）棒仕合等もありて」との記述がある。 記事中の「柔術（支那柔術）」は、当時における空手の表記・表現の一つで、本記事はこの祝捷会において、徒手の空手と武具操作術（棒術）が行われたことを報じている。	『琉球新報』 （明治 33 年 8 月 23 日付）	③

番号	年月日	地　域	事　　項	典　　拠	類型
14	1900. 9. 6	大里（南城）	大里間切南風原村の龕の修繕祝賀会で「棒踊」が披露	『琉球新報』（明治 33 年 9 月 11 日付）	①
15	1900. 9. 7	具志頭（八重瀬）	【予告記事】具志頭村と玻名城村の十五夜行事での「棒」	『琉球新報』（明治 33 年 9 月 7 日付）	①
16	1900.10.25	粟国島	粟国尋常小学校の落成式で「棒踊」が披露	『琉球新報』（明治 33 年 11 月 9 日付）	②
17	1901. 5.30	石垣島	八重山島庁で同地へ巡礼に来た北条氏恭侍従に「棒踊」を披露	『琉球新報』（明治 34 年 6 月 25 日付）	⑤
18	1901.11. 7	佐敷（南城）	来沖（中城湾）した北白川宮富子の奉迎にさいし「棒踊」を披露	『琉球新報』（明治 34 年 11 月 9 日付）	⑤
19	1901.11.15	大里（南城）	大里尋常小学校の落成式及び御真影奉戴式で「棒踊」が披露	『琉球新報』（明治 34 年 11 月 17 日付）	②
20	1902. 2.27	本部	本部尋常高等小学校の新校舎開校式で「棒踊」が披露	『琉球新報』（明治 35 年 3 月 3 日付）	②
21	1902.10.16	小禄	垣花にあった監獄署の前でコレラ退治祈祷の一環で「棒踊」が披露	『琉球新報』（明治 35 年 10 月 17 日付）	①
22	1902.12.27	宮古島	下地尋常小学校の御真影奉戴式で「棒振」が披露	『琉球新報』（明治 36 年 1 月 19 日付）	②
23	1903. 4.17	名護	国頭郡各間切島組合立農学校の開校式で「棒踊」が披露	『琉球新報』（明治 36 年 4 月 19 日付）	②
24	1904. 1.24	佐敷（南城）	佐敷街道（那覇と馬天を結ぶ）の開通式で「棒踊」が披露	『琉球新報』（明治 37 年 1 月 25 日付）	⑥
25	1904. 3.20	那覇	【予告記事】奥武山公園で催される「軍人家族救護剣舞会」での「沖縄棒」	『琉球新報』（明治 37 年 3 月 20 日付）	③
26	1904. 9. 8	仲里（久米島）	久米島高等小学校で催された日露戦争祝捷会で「棒踊」が披露	『琉球新報』（明治 37 年 9 月 25 日付）	③
27	1904.11. 3	国頭地区	国頭地区の学校（不明）で催された天長節行事で「棒踊」が披露	『琉球新報』（明治 37 年 11 月 13 日付）	④
28	1905. 1. 3	小禄	小禄尋常高等小学校における日露戦争祝捷会で「棒つかひ」が披露	『琉球新報』（明治 38 年 1 月 5 日付）	③
29	1905. 1. 4	恩納	恩納村字御殿崎で催された日露戦争祝捷会で「棒踊」が披露	『琉球新報』（明治 38 年 1 月 9 日付）	③
30	1905. 1. 4	平安座島	平安座尋常小学校で催された日露戦争祝捷会で「棒」が披露	『琉球新報』（明治 38 年 1 月 15 日付）	③
31	1905. 1. 5	国頭	辺土名海岸で催された日露戦争祝捷会で「棒合せ」が披露	『琉球新報』（明治 38 年 1 月 11 日付）	③
32	1905. 1. 5	大宜味	大宜味高等小学校で催された日露戦争祝捷会で「棒踊」が披露	『琉球新報』（明治 38 年 1 月 21 日付）	③
33	1905. 6.22	石垣島	八重山島庁の開庁式で「棒踊」が披露	『琉球新報』（明治 38 年 7 月 19 日付）	⑥

番号	年月日	地　域	事　　項	典　　拠	類型
34	1905.11. 3	石垣島	八重山島高等小学校で催された天長節で「棒打」が披露	『琉球教育』114 号（明治 39 年 1 月 20 日発行）	④
35	1906. 4.10	那覇	【予告記事】招魂祭協議会（翌 5 月挙行予定の招魂祭を議論）での「棒踊」採用	『琉球新報』（明治 39 年 4 月 10 日付）	③
36	1906. 5.16	羽地（名護）	羽地尋常高等小学校で催された招魂祭で「棒使」が披露	『琉球新報』（明治 39 年 5 月 24 日付）	③
37	1906. 6.16	浦添	浦添尋常小学校で催された凱旋軍人歓迎会で「棒踊」が披露	『琉球新報』（明治 39 年 6 月 19 日付）	③
38	1906. 7. 1	玉城（南城）	上江洲口馬場で催された凱旋軍人歓迎会で「棒踊」が披露	『琉球新報』（明治 39 年 7 月 3 日付）	③
39	1906. 7. 4	佐敷（南城）	佐敷尋常高等小学校で催された凱旋軍人歓迎会で「棒踊」が披露	『琉球新報』（明治 39 年 7 月 7 日付）	③
40	1906. 7. 5	知念（南城）	知念尋常高等小学校で催された凱旋軍人歓迎会で「棒踊」が披露	『琉球新報』（明治 39 年 7 月 7 日付）	③
41	1906. 9.26	東風平（八重瀬）	東風平馬場で催された凱旋軍人歓迎会で「棒踊」が披露	『琉球新報』（明治 39 年 10 月 2 日付）	③
42	1906.10. 8	美里（沖縄）	美里尋常高等小学校で催された物産品評会並展覧会で「棒踊」が披露	『琉球新報』（明治 39 年 10 月 9 日付）	⑥
43	1906.11.11	真壁（糸満）	真壁間切役場前馬場で催された招魂祭で「棒踊」が披露	『琉球新報』（明治 39 年 11 月 15 日付）	③

著：仲村　顕

第２節　行事別の特徴

１　豊年祭

沖縄本島から宮古・八重山の島々では、旧盆の後や旧八月十五夜、旧九月九日などの折に、地域の御嶽などの神々にその年の五穀豊穣や村人の健康や幸せを感謝し、来たる年の五穀豊穣、子孫繁栄、健康祈願などの予祝・祈願を行い、御嶽の境内や神アサギ前の庭、あるいは遊び庭や公民館前広場で獅子舞や棒術などを演じる。そして広場内に作られた仮設舞台（普通バンクと呼ばれる）で長者の大主や若衆踊り、二才踊り、女踊、雑踊、組踊、芝居など各種の芸能を演ずるのである。これを豊年祭と呼ぶことが多いが、呼び方には地域差がある。

沖縄本島北部ではムラウドゥイ（村踊り）、本島中部ではムラアシビ（村遊び）・マールアシビ（廻遊び）、本島南部ではジュウグヤアシビ（十五夜遊び）などと呼ばれる地域が多い。ここでは北部、中部、南部、宮古・八重山という地域ごとにその特徴と武術的身体動作を含む芸能との関わりを概観してみたい。

（１）　沖縄本島北部

本島北部の名護市近辺では、豊年祭のことを一般にムラウドゥイ（村踊り）と呼ばれる地域が多いが、そのほかにもハチグワチウドゥイ（八月踊り）、ムラシバイ（村芝居）などと呼ばれる地域もある。旧八月十五夜や旧九月九日を中心として、メージクミ（前仕込み）、スクミ（仕込み）、ソーニチ（正日）、ワカリ（別れ）などの日程に分かれて数日間行われることが多い。

本部町では豊年祭と呼ばれて旧８月に行われている。宜野座村では旧８月 15 日に十五夜あそび、または豊年祭と呼ばれている。金武町では旧８月 15 日に行われ、豊年祭または観月会と呼ばれている。

ア　名護市

名護市全域で、ムラウドゥイ（村踊り）に道ジュネーの後や舞台芸能の前後にボー（棒術）が行われる地区が多い。ボー（棒術）は、ボーホー（棒方）とも呼ばれる。その芸態はスーマチ（総巻、潮巻、数巻などと表記）ボー（棒）とクミボー（組棒）に大別できる。スーマチ棒は何十人もの集団で渦巻きなどの隊形を作るような集団的演武の性格を持つ。一方のクミボーは二人または三人一組で行う演武で、ほとんどの地域では主に六尺棒を使用するが、その他に三尺棒、槍、カマンタ（釜蓋）、サイなどの武具を使用する地域もある。

イ　本部町

並里区では4年に一度、旧八月に行われる豊年祭において「満名棒」（三人棒）が演じられ、村の無形民俗文化財にも指定されている。また槍と矛の組手「ゴーリティンベー」も復活して演じられている。

瀬底区では、旧８月 11 日後の日曜日に、豊年祭が行われる。拝所での祈願後、道ジュネーと綱引きを行い、その後公民館前広場にて舞踊と棒術（一人棒と組棒）が行われる。

ウ　宜野座村

宜野座区では旧８月 15 日頃、十五夜アシビが行われる。拝所での祈願後、道ジュネ―では獅子舞、舞踊「かぎやで風」、スーマチ棒および棒、舞踊「スーリ東」が演じられる。その後仮設舞台にて、組踊と歌劇、京太郎他数多くの舞踊が演じられる。

松田区では旧８月 15 日頃、十五夜アシビが行われる。拝所での祈願後、道ジュネ―では舞踊「かぎやで風」とスーマチ棒および棒が演じられる。その後平松毛での仮設舞台にて、組踊や京太郎、数多くの舞踊が演じられる。

漢名区では、隔年の旧８月 15 日に豊年祭が行われる。拝所での祈願の後、道ジュネーにて旗頭のガー

エー（競い合い）を行い、その後アシビナーに作られた舞台にて数々の舞踊が演じられる。

エ　金武町

伊芸区では、旧8月 15 日に観月祭が行われる。拝所での祈願の後、広場にてエイサーが演じられる。その後舞台にて、獅子舞、フェーヌシマ（南の島、棒踊り）などが演じられる。戦後数十年は旧8月 13、15、16 日と村芝居を行ない、組踊や長者の大主が演じられていた。

屋嘉区では、隔年で豊年まつりが行われ、公民館の舞台で数々の舞踊が演じられる。

金武区では、旧8月 15 日に奉納祭（観月祭）が行われる。拝所での祈願の後、道ジュネーにて獅子舞とミルクが演じられる。その後金武公会堂前の舞台にてなぎなたや数々の舞踊が演じられる。

字並里区では、旧8月 15 日ジュウゴヤムラアスビ（十五夜村遊び）が行われる。拝所での祈願に続き広場での獅子舞の後、大松下の舞台にて、長者の大主やなぎなた、数々の舞踊が演じられる。

（2）　沖縄本島中部

読谷村では、豊年祭はムラアシビと呼ばれ、旧7月 16 日、旧八月十五夜、旧9月などの機会に行われたが、現在では旧八月十五夜を観月会と称して行われる地域が多い。宜野湾市や西原町では数年に一度豊年祭が行われることから、マールアシビ（廻る遊び）と呼ばれる地区が多い。また宜野湾市、浦添市あたりでは十五夜獅子舞として獅子舞を中心に演じる地域もある。

ア　うるま市

田場区では、豊年祭はジューグヤ（十五夜）と呼ばれ、その中で棒が演じられる。

イ　読谷村

長浜区では、もともと旧八月十五夜に観月会として催されていたが、現在では敬老会、生年合同祝などで棒が演じられる。

座喜味区では、9月に行われる敬老会と 12 月総合共進会で棒が演武される。

宇座区では旧8月 15 日観月会と、旧7月 16 日のウークイでのエイサーのつなぎに演武される。

波平区では、旧7月 16 日と八月十五夜アシビ（観月会）にハンジャボー（波平棒）が演じられる。

ウ　嘉手納町

野里区では、旧八月の村芝居で野里棒が行われていた。現在は嘉手納町野里共進会により団体が主催している行事のほか、町内外で行われる芸能祭などで披露する。また旧7月 17 日には、旗スガシ祈願として野里共進会施設にて「かぎやで風」とエイサーが演じられる。

屋良区では、旧8月 15 日に、八月十五夜として道ジュネーでの獅子舞や屋良のあやぐが演じられる。

エ　北谷町

下勢戸区では、生年祝いのカジマヤー（一般的には旧9月7日）でボー（棒術）が演じられる。字北谷ではフェーヌシマ（南の島）が、12 年に1回（寅年）、旧6月 15 日に行われる北谷大綱引きの道ジュネー、スネーの演目として演じられる。

砂辺区では、旧8月 17 日にジューグヤアシビ（十五夜遊び）が行われ、獅子屋での祈願後、道ジュネーでの獅子舞および舞台上にて長者の大主に続いて民謡や舞踊が演じられる。

伊礼区では、旧8月 15 日にクランモー（蔵森）広場にてシーシモーラシ（獅子舞）が行われる。

オ　沖縄市

諸見里区では、旧7月 16 日に旗スガシーとして、拝所での祈願と獅子舞とエイサーによる道ジュネーを行い、公民館舞台にて古典音楽や舞踊が演じられる。

池原区では、旧8月 15 日に、八月十五夜として広場でウスデークと舞踊が演じられる。

カ　宜野湾市

大謝名区では、旧8月 15 日に秋まつり（十五夜獅子舞）が行われる。拝所での祈願の後、公民館前広場にて獅子舞、棒術や民舞、民謡などが演じられる。

キ　浦添市

勢理客区では、旧8月 15 日に十五夜祭が行われる。午前の拝所での祈願の後、公民館内で獅子舞、舞長者の大主、舞踊などが演じられる。

中西区では、旧8月 15 日に十五夜獅子舞が行われる。拝所での祈願の後、公民館庭の舞台にて獅子舞が演じられる。かつては道ジュネーも行われていた。

前田区では、旧六月に綱引き（綱引き後に棒使い、昼間）と村芝居（夕方から夜）が隔年で行われていたが、近年村芝居は行われていない。戦前は旧8月1日から一日越しに踊りと棒を行った。10 日にメーアシビー（前遊び）、13 日、15 日、17 日がショウニチ（正日：本番）、18 日にアトアシビー（後遊び）があった。現在は綱引きの際に棒が行われている。

ク　西原町

棚原区では、12 年に一度のマールアシビ（廻遊び）が行われ、舞台上で数々の芸能が演じられる。字小波津では、7年に一度の七年マールムラアシビ（村遊び）が行われる。戦前までは、旧8月 13 日、14 日、15 日の三日間行われていた。集落内の道ジュネ―の後、小波津集落センター広場の仮設舞台で棒術や組踊をはじめ数々の芸能が演じられる。

幸地区では 12 年に一度（酉年）に十五夜アシビが行われる。道ジュネーや広場での獅子舞や舞台上で長者の大主のほか数々の芝居や舞踊が演じられる。

小波津区では、6年に一度（辰、戌）の旧8月 15 日後の週末に七年マール村遊びが行われる。当日は配所での祈願の後、集落内の道ジュネーにおいて獅子舞、舞踊、棒術（一人棒、組棒）が演じられる。その後集落センター前広場に設置された舞台にて、獅子舞、棒術、舞踊、組踊、歌劇などが演じられる。戦前には村遊びは旧暦8月 13 日、14 日、15 日の3日間行われていた。

（3）　沖縄本島南部

本島南部において豊年祭は、南風原町、豊見城市ではジューグヤー（十五夜）と呼ばれる地域が多い。糸満市では共通した呼称はないが、綱引きや獅子舞、ウシデークなどの芸能が旧8月 15 日頃に行われる事例が多い。八重瀬町では、八月十五夜アシビ、豊年祭と呼ばれる他に旧8月に龕甲祭として行われる地区がある。南城市では旧7月 16 日にヌーバレーと呼ばれる行事が分布している。

ア　南風原町

宮平区では、9月下旬に宮平十五夜まつりが行われる。敬老会の後、公民館の舞台にて古典音楽、獅子舞（六尺棒あり）に続いて数々の舞踊が演じられる。

本部区では、9月下旬に敬老会（十五夜あしび）が行われる。拝所での祈願の後、公民館の舞台にて舞方棒、獅子舞が演じられ、その後舞踊が演じられる。

喜屋武区では、旧8月 15 日近くの土曜・日曜にジューグヤ（十五夜）を行う。公民館での祈願の後、公民館舞台で獅子舞、舞方（棒を使用した舞踊）、長者の大主、組踊などを演じる。

照屋区では、旧8月 15 日頃に十五夜遊びを行う。公民館の舞台にて、民謡、古典音楽、舞踊などが演じられる。

神里区では、9月中旬に敬老会に合わせて十五夜遊びが行われる。ムートゥヤー（元屋）においてシーサーケーラシ（獅子舞）と言って獅子が祈願をする。公民館の舞台にて、舞方棒と獅子舞が演じられる。かつては長者の大主や組踊も伝承されていた。

イ 豊見城市

保栄茂区では、6年に一度（卯年・酉年）旧8月 15 日・16 日にジューグヤー（十五夜）が行われる。拝所での祈願の後、道ジュネーにて舞踊と棒術が演じられる。その後広場にてタンカー（組）棒、マチボー（巻棒　棒の集団演武）、綱引きが行われる。この後馬場の中央舞台に移動して、長者の大主、数々の舞踊や長刀、棒、笠踊などが演じられる。

翁長区では、数年に一度、旧8月 15 日に豊年祭が行われる。拝所での祈願の後、道ジュネーの中で舞踊と棒術、旗頭のガーエー（競い合い）が演じられる。その後馬場に設置された舞台にて、唐手（空手）や棒、数々の舞踊が演じられる。

ウ 糸満市

与座区では、旧8月 15 日に朝の拝所での祈願の後、夕方広場にてウシデークが踊られる。

国吉区では、旧9月9日にティラムヌメー（クングワチクニチ）が行われる。字内拝所での祈願の後、舞踊「かぎやで風」、「花風」が演じられる。

真栄里区では、旧8月 16 日近くの日曜日に大綱引きが行われる。正午頃のメーミチ（中央広場）における綱引きの後、獅子舞や棒術が演じられる。夕方、メーミチにて再び棒と子供踊り、エイサーが演じられ、その後メーミチ脇の舞台にて古典音楽や数々の舞踊が演じられる。

真栄平区では、隔年の旧8月 15 日頃に、十五夜行事が行われる。拝所での祈願の後、広場にてエイサーが演じられ、その後公民館の舞台にて舞踊が演じられる。

名城区では、旧8月 15 日・16 日にジューグヤー（十五夜）行事の一環としてウシデークが演じられる。拝所での祈願の後、広場においてウシデークが踊られる。15 日は「大殿内」庭とトマンザ（公民館前）、16 日は神アシャギ前庭とトマンザで踊られる。

米須区では、旧8月 15 日にジューグヤー（十五夜）が行われる。拝所での祈願の後、獅子舞とウシデークによる道ジュネーが行われる。

エ 南城市

当間区では9月 30 日に十五夜行事が行われる。拝所での祈願の後、道ジュネーで獅子舞が演じられる。その後、公民館にて棒術と獅子舞が演じられる。

大城区では、旧7月 16 日後の週末に豊年祭が行われる。また5年毎にシタク綱引きと組踊を交互に開催する。拝所での祈願の後、道ジュネーを行う。その後、広場にて綱引きを2回行い、続いて子供綱、子供棒、獅子舞が演じられる。その後、広場舞台で民謡やエイサーが演じられる。

糸数区では、旧8月 15 日後の週末に十五夜、敬老会、アカナースージが行われる（シーシンヌウーエーとも言われる）。拝所での祈願の後、公民館の舞台にて、掃除サーブー（狂言）、舞方、獅子舞、数々の舞踊が演じられる。

知名区では、旧7月 16 日にヌーバレー行事が行われる。拝所での祈願の後、道ジュネーにおいて各所

で舞踊「クーダーカー」、「今帰仁ヌー」、「稲しり節」、そして棒術が演じられる。続いてアシビナーの舞台に移動し、長者の大主に始まり、棒術や数々の舞踊が演じられる。

安座間区では、旧7月 16 日にヌーバレー行事が行われる。拝所での祈願の後、道ジュネーにて舞踊「稲しり節」、「今帰仁ヌー」が演じられる。公民館の舞台にて民謡や舞踊が演じられる。

玉城区では、旧8月 15 日に十五夜が行われる。拝所での祈願の後、公民館前庭と神屋にて獅子舞が演じられる

オ　八重瀬町

友寄区では、旧8月 15 日後の日曜日に、八月十五夜が行われる。拝所での祈願の後、道ジュネーで獅子舞と棒巻・棒術が演じられる。その後、公民館に作られた舞台にて、長者の大主や棒術、舞踊が演じられる。

小城区・当銘区では、数年に一度、旧8月 10 日に龕甲祭が両区合同で行われる。これが豊年祭として旗頭を先頭に獅子舞、棒術（団体棒、組棒）、舞踊を奉納し、公民館（馬場）に作られた舞台にて舞方棒、長者の大主、舞踊や組踊が演じられる。

志多伯区では、数年に一度、旧8月 15 日に志多伯獅子加那志豊年祭が行われる。午前中の拝所での祈願の後、道ジュネーでは獅子舞、舞踊、棒術が演じられる。翌日夕方の後遊びでは、馬場に作られた舞台にて舞方棒、長者の大主他、数々の舞踊や喜劇、組踊、古武道が演じられる。

具志頭区では、旧8月 15 日に大綱引きと八月十五夜アシビが行われる。拝所での祈願の後、道ジュネーにおいて「スーリ東」などの舞踊と舞方棒が演じられる。その後、公民館横に設置された舞台にて、古典音楽や舞踊が演じられる。

玻名城区では、旧8月 15 日に豊年祭が行われる。夕方の拝所での祈願の後、道ジュネーにおいて舞踊と棒術が演じられる。その後公民館広場に作られた舞台にて、「かぎやで風」、長者の大主、獅子舞が演じられる。

安里区では、旧8月 15 日に十五夜綱引きが行われる。拝所での祈願の後、道ジュネーにおいて組棒、ブリ棒、棒巻、ガーエーが演じられる。その後、綱引きが行われる。その後公民館前に作られた舞台にて、小学生、青年会による舞踊が演じられる。

（4）　宮古・八重山

宮古・八重山地区においては、豊年祭や種子取祭、結願祭、節祭といった祭りにおいて、武術的身体表現をともなう棒術等の演武が多く披露される（詳細は第2章第3節4宮古地区、5八重山地区を参照のこと）。

ア　宮古島市

宮古島市において、新里では旧暦6月（日を撰ぶ）に豊年祭、野原では旧暦8月 15 日にマストゥリャー、来間では旧暦 9 月（8 月の場合もある）の初辰日から未日までの四日間行われる ヤーマスィ゜ウガンにおいて棒術が演じられる。

イ　多良間村

多良間村では、毎年旧暦の8月8～ 10 日の3日間にわたって八月踊りが塩川、仲筋の両集落にて行われる。1日目の午前は仲筋の正日で、塩川字民を招待し八月お願の祈り後、民俗踊りや古典踊り、組踊り、忠臣仲宗根玄雅公等が演じられる。午後には午前部と同じく民俗踊りや古典踊り、組踊り「忠孝婦人（村原組）」が演じられる。

2日目午前は塩川の正日で、仲筋字民を招待して民俗踊りや古典踊り、組踊り「忠臣公文組（忠臣身替）」が演じられる。午後には民俗踊りや古典踊り、組踊り「多田名組」が演じられる。3日目はワカレと称し、仲筋、塩川の両字に分かれて1日目、2日目に演じられた踊りが演じられる。

ウ　石垣市

石垣市では、登野城、新川、石垣、大浜で豊年祭が行われる。

石垣市四箇の豊年祭は旧暦6月頃に、新川、石垣、大川、登野城の四つの字が合同で二日間にわたって行なわれる。 一日目のオンプールは各々の御嶽にて行なわれる。二日目の「ムラプール」では、新川の真乙姥御嶽（まいつばうたき）に四箇の字が集結し、神事や奉納芸能が演じられる。

白保では旧暦6月にプーリン（豊年祭）が三日間にわたって行われる。1日目をバンプトゥギ（願い解き）、2日目をブープーリン（大きい豊年祭）、3日目をエンヌユーニンゲー（来たる世の願い）と呼んでいる。1日目、2日目は集落内四ヶ所のオン（御嶽）にて神女たちによる祈願が行われる。3日目は午前中に各オンでの祈願を行う。夕方、カツァリバオン（飾場御嶽）に集合してイビに礼拝する。昔はこの後に巻き踊りが演じられていた。その後、カツァリバオン前で旗頭奉納に続いて豊年祭祈願の祝典が始まる。その後ミルク（弥勒）を先頭に仮装行列「イネの一生」が行われる。行列後、五穀の種を授けるブヤーメーアッパーメーという儀礼が行われる。その後4つのオンの人々は東西二組に分かれて綱引きを行う。

川平では旧暦8月頃に結願祭が行われる。太鼓や獅子舞、棒術を境内で行う前半と、舞踊や狂言を舞台上で披露する後半の二部構成で行われる。前半は神が鎮座する「ウブ」の前に出演者全員で拝礼した後、年配女性らが歌う「与那覇節」に乗せて弥勒神が登場する。境内を1周する総踊りが行われる。座を清める「座見舞い」の後、本舞で太鼓や棒、獅子舞などが奉納される。棒では刀棒や六尺棒、三人棒、エーク棒、鎌棒、カニパ棒などが演じられる。後半は初番に始まり、御前風、川平鶴亀節、瓦屋節、かしかきなどの舞踊が舞台で披露される。

エ　竹富町

竹富町の各島では、種子取祭、結願祭、豊年祭、ムシャーマ、節祭など多様な祭が行われている。

竹富島では、毎年、旧暦9月の庚寅、辛卯の2日間を中心に種子取祭が行われ、40 余りの伝統芸能が神々に奉納される。昭和 52（1977）年に国の重要無形民俗文化財に指定されている。

小浜島の結願祭は、旧暦8月の戊亥（スクミ）から始まり、翌日の己子（ショーニチ）には御嶽に作られた舞台にて数多くの芸能が神に奉納される。結願祭を含む小浜島の芸能は平成 19（2017）年に文化庁から国の重要無形民俗文化財に指定されている。

黒島の豊年祭は、新暦7月最終日曜日の開催を基本として行われる。ハーリー（爬竜船競漕」の他、様々な芸能が、神に奉納される。

西表島（祖納・干立）の節祭は毎年旧暦の 10 月前後の己亥に行われ、祭り2日目には芸能や船漕などの様々な催しものが披露される。平成3（1991）年には「西表の節祭」として国の重要無形民俗文化財に指定されている。

波照間島では、旧暦7月 14 日に先祖供養、豊作・安全祈願のためにムシャーマが行われる。広場と舞台では仮装行列の他、太鼓、棒、狂言、舞踊など多彩な芸能が奉納される。

オ　与那国町

与那国では旧暦 10 月の庚申の日から 25 日間がカンヌティ（神の月）と呼ばれる。この期間がムラマチリである。島の集落としては東（祖納）、嶋中（祖納）、西（祖納）、比川、久部良の5箇所ある。ムラマチリにおいては、（1）クマブラマチリ（久部良）、（2）ウラマチリ（東）、（3）ンディマチリ（比川）、（4）ンマナガマチリ（嶋中）、（5）ンダンマチリ（西）と各集落順に祭が行われる。各々のマチリの終わりには、参加者全員でドゥンタ（巻踊り）が踊られる。また各々のマチリにおいて、は舞踊が奉納される。また集落のマチリに合わせて、特定のキナイ（家）において行われるマチリがあり、そこではマタと呼ばれる神器（頭か座、弓矢、太刀、長刀、槍、ハカリ、算盤など）が保持されており、それらを使った舞が行われる。

著：久万田　晋

2　盆行事及び関連行事

（1）　北部地区

北部地区で盆行事において武術的身体表現をともなう棒術等の演武が行われる事例はあまりない。北部の多くの村落では旧暦八月の十五夜前後に行われる豊年祭の中で披露されており、むしろ十五夜行事との結びつきが強く、他にはシヌグ・ウンジャミなどの行事で散見される程度である。

今回の調査において、北部では名護市久志の盆行事（七月ウドゥイ・ムラ踊り）において棒術等の演技があるのが唯一の事例である。旧 7 月 13 日のスクミ（踊庭）、旧 7 月 16 日のソーニチ、旧 7 月 17 日のワカリアイのそれぞれにおいてスーマキー（総巻）と、棒の演技として二人棒（タイボー）、三人棒（ミッチャイボー）が行われる。なお、ムラ踊りの演目の中には、戦後に伊良波尹吉の指導による「メーカタ」とよばれる空手を舞踊化したものがある。これは舞台の清め締めくくりとしてプログラムの最後を飾るものとされている。なお、2005 年以降、盆行事はムラ踊り、エイサー、やぐら踊りの順番に行われるが、ボウ（棒）はユーニゲー（世願い）の意味をもつとされ、その性格付けから毎年行われるという。

久志では北部の他の地域と違って、８月十五夜でのムラ踊りがなく、盆の行事のムラ踊りの中で棒術が行われている点が特色といえよう。

（2）　中部地区

次に中部地区では西原町小波津、うるま市具志川字田場、読谷村の宇座と波平の4つの村落では盆行事に棒術等が披露される。

写真2-2-1 「サイと棒」の演武〔西原町小波津〕

写真2-2-2 うるま市具志川田場から習った「ウェーク・トゥジャの型」〔うるま市勝連南風原〕

小波津の棒術等は旧6月の「綱引き（チナヒチ）」、旧 7 月の「盆踊り」、旧8月十五夜の「獅子ヌ御願」、旧1月2日ハチウクシー、それに卯年と酉年に行われる「七年まーる村遊び」（卯年、酉年）に披露される。

旧 7 月の「盆踊り」は 15 日（ウークイ）後の日曜日に行われる。盆踊りは、昭和 37 年頃にエイサーから盆踊りに変わって、地域行事として実施されるようになり、踊りの合間に伝統芸能（棒、獅子舞）の演舞が披露され、現在まで行われている。盆踊りでの棒の演武は、無病息災、五穀豊穣、子孫繁栄を祈願し、踊りの合間に披露される。また、小波津の獅子舞の演目には棒手（ボーディー）があり、前踊りとしてウフクン（一人棒）の演舞を行うが、空手の型を取り入れた「クファチディ（小波津手）」の獅子舞があるところは留意される。

このように、一つの村落において複数の行事において棒術等を披露する事例は中部や南部地区では行事の組み合わせの違いはあるものの、いくつかの村落で確認できる。

うるま市具志川の田場では旧盆と豊年祭（十五夜）、新年会、夏祭りなどにおいて棒術の型の演武が行われる。田場公民館内ホール 露払いで棒の手（独演型、棒対棒）演武、ティンベーの手（ティンベー対槍）、ナギナタの手（薙刀対槍）、エンクの手（櫂対トゥザー）、獅子舞の順で構成されている。トゥザーは三叉銛のこと。棒の手（独演型）はクーサンクーのような演武線になっている。

また、読谷村の宇座区では盆行事（シチグァチエイサー）、ジューグヤー（旧歴 8 月 15 日　ハチグァチジューグヤーアシビー。観月会ともいう）の3回、棒術が披露される。旧暦7月 16 日ウークイには、エイサー演舞のつなぎに棒術が行われる。宇座では、戦前は邪気払い・豊年祈願・健康祈願が主で、青年たちが旧7月 16 日の盆踊りと、旧8月 15 日の観月会の二回にわたって「アシビ」を行った。十五夜アシビーで演武していたが、戦後、旧盆ではエイサー演舞のつなぎの間として、また十五夜では組踊や上いロ説・囃しなどの部落芸能の一つとして行われるようになった。棒術は、火棒（ヒーボウ）・牛若（ウシワカ）の2種類は前棒（三尺）、後棒（六尺）の組み合わせで、後割（クシワイ）・踊り棒（ウドゥイ棒）の2種類は六尺棒の組み合わせである。これら4種類の棒術を2組が順で繰り返す。この他にクラシン（暗闇）棒（前後共六尺棒）、エーク（櫂）棒（前後共サバニを漕ぐ櫂）、スーマチ（潮巻）などがあったが、現在は途絶えている。

同じ読谷村の波平では盆行事（旧暦7月 16 日）と八月十五夜あしびの観月会に、五穀豊穣・健康長寿・子孫繁栄を祈願し、ハンジャ棒（波平棒）14 種の組棒（組手）がエイサーと合わせて披露される。ハンジャ棒は2人・三尺棒（3種）、2人・六尺棒（3種）、2人・三尺六尺（8種）の組み合わせである。

これら読谷村宇座と波平の盆行事は、今回の調査ではいずれも旧盆 16 日として報告されているが、後述する「ハタスガシー」行事が同じ旧盆直後の 16 日に行われており、それぞれ名称は異なるものの、実質的には同一の行事としての性格をもつと考えられそうである。

（3） 南部地区

南部地区では八重瀬町志多伯と玻名城では盆行事の中で棒術等がみられる。志多伯の棒術は、旧暦6月 15 日のウマチー綱引き、旧暦7月 15 日の七月綱、旧暦8月十五夜（ジュウグヤ）の獅子加那志豊年祭（シーシガナシホウネンサイ：15 日・16 日）、さらに字敬老会に披露される。棒術は、主に六尺棒、ティンベー、サイ、トゥンファー、エーク、ヌンティーなど古武道具を使用した、個人または団体演武による「型」、2人または3人による組棒の演武となっている。

豊年祭の道ズネーや馬場にて、豊年祭 舞台の広場で巻棒が行われ、夕方からの舞台では獅子舞の前に座清めと演じられる舞方（かぎやで風にのせた棒の舞）や武の舞（組棒や型の演武を琉球音楽と融合した演出構成）が演武される。綱引きでは、主に子どもたちと志多伯獅子舞棒術保存会会員による棒術演武が行われる。綱引きは、旧6月 15 日（ウマチー綱引き）、旧7月 15 日（七月綱）の年に2回行われ、そのなかで棒術やエイサーが1回目の綱引きの後に披露される。豊年祭がない年の9月には敬老会が開催され、その中でも 複製獅子による獅子舞演舞と棒術が披露される。

同じく八重瀬町玻名城では旧暦 7 月 16 日のシーサーウークイでは獅子舞と棒術が登場する。シーサーウークイの「道ズネー出発の際に六尺棒を使用し、獅子と対峙してワクヤー棒の演武がある。「玻名城のお宮」で棒と子どもたちによる踊りが奉納される。舞方棒、ワクヤー棒、体操棒、アブシヌティー、チキンヌティーの型が伝えられている、すべて一人棒である。道ズネー出発に際し、演武するのがワクヤー棒と呼ばれている。 7 月 16 日のシーサーウークイは無念仏をあの世へ送り帰す儀式ともいわれていて、獅子舞と棒が払いの手段として位置づけられていることがよくわかる事例である。

（4） 宮古・八重山地区

宮古地区において、調査では盆行事の中で棒術等が行われるという事例は確認できていない。棒術は旧暦6月や旧暦8月十五夜の豊年祭のマストゥリャー、多良間の八月おどり、旧暦9月（もしくは8月）のヤーマスィ゜ブナカの行事など披露されている。

一方、八重山地区では、石垣市登野城と真栄里、それに竹富町波照間において盆行事の一環で棒術等がみられる。

登野城では旧暦7月の盆行事においてシィーシィマチィリィ（獅子祭）が行われる。庭の上座に牡・牝の獅

子と弥勒仏を飾り置き、獅子舞をする家の家長が「七月に獅子と弥勒仏の祭を仕上げるのは、村中を守護して下されて悪疫が流行しても島の風下へ追いやって村中へ風邪など罹らして下さらんように」などと村人の健康を願う祝詞をする。その後、一同で「無蔵念仏」を合唱し、次に「弥勒節」を歌い、獅子舞に移る。太鼓の合図で南ヌ島棒（一名「カンター棒」）が演じられて幕が開く。次に獅子使いが現れ、獅子が登場するという流れである。〔石垣市史編集委員会、2007 年、243 ～ 244 頁〕同市の真栄里でも旧盆の獅子舞に一番棒として披露されるという。登野城の事例からわかるように、ムラを悪疫などから払いのけるために獅子舞と棒が演じられており、真栄里での意味づけの聴取はなされていないが、同様の趣旨であった可能性が高い。

波照間島ではムシャーマにおいて棒術等が披露される。ムシャーマ旧盆中の7月 14 日に行われる豊年予祝祭の祭りで、村人総出による島の大祭でもある。14 日の午前は「ミチサネ」と称される仮装行列が西組・東組・前組に分かれて行われる。その際に各組のボー・テーク（棒・太鼓）のシンカによる演武がおこなわれる。棒は獅子とともに行列の中では各組ともに最後のとりを務める。仮装行列の終了後、公民館の中庭の桟敷前で、西組・東組・前組の三つの組によるテークと棒の演舞が行われ、最後にニンブチャー（念仏踊り）で終わる。午後には中庭の桟敷に設置された舞台で各種芸能が披露されるが、その中でも「シーシン棒」が演目としてある。その後再びミチサネとして帰りの仮装行列が行われる。各組はそれぞれの会館もしくは所定の場所に戻るとそこで太鼓と棒が演舞されて、すべての祭事が終了となる〔詳細は第5章第5節（5）参照〕。

写真2-2-3　ムシャーマのシーシンボー〔波照間島〕

ムシャーマはその昔、豊年祈願をするプーリンのエンヌユーニゲー（来年の豊作祈願行事）の仮装行列としてあったものが、プーリンに行われていた綱引きにともなう双方の喧嘩沙汰にともない、島の役人（目差役もしくは首里大屋子）の命令で綱引きは廃止され、プーリンは御嶽での豊作を祈願する神行事が中心となり、仮装行列はソーリンの行事の中に組み入れられ合併された経緯がある。このように王国時代に盆行事に組み込まれ変更されたことがわかる。

以上のように、石垣市登野城と真栄里では盆行事において獅子舞とのセットで棒が演じられていることがわかる。ただもう一つの事例である波照間島のムシャーマは、綱引き問題に絡んで盆行事に組み込まれたという特殊な経緯と事情があるため、本来はプーリンの豊年祭において棒術等が披露されていたものであるが、ムシャーマの祭事の中ではそれぞれ儀礼の節目節目である最初と最後に棒術が演じられており、清めや払いとしての意味づけが如実に現れていることが指摘できる。

3　ハタスガシー・ヌーバレー・イタシキバラ行事

盆行事は通常旧暦 7 月 13 日から 15 日もしくは 16 日までであるが、この旧盆直後に悪霊や無縁仏などを払うための行事がある。地域により名称は異なるが、ハタスガシー・ヌーバレー・イタシキバラなどの祭事が行われ、その際に棒術等が披露されることがある。

（1）　ハタスガシー

ハタスガシーは沖縄本島中部で盆行事の直後に行われる五穀豊穣を願ったり、災厄や悪霊を払う行事とされている。名称は、旗をなびかせて集落内を練り歩いて浄め、旗の下でムラアシビ（村遊び）をすることからきたと言われ、スガシーには風を通す、風に当てるという意味がある。今回の悉皆調査において、ハタスガシーにともなって棒術が行われている事例は北中城村の大城・荻道が唯一で、他の地域でもかつては棒術や獅子舞などをともなった行事は行われていた。

北中城村の大城と荻道では両自治会の合同で「ハタ（旗）スガシー」という行事がある。旗スガシーは旧

盆の直後の旧暦7月 17 日、住民の無病息災を願って実施されるものとされている。旗スガシーは、荻道自治会と大城自治会において旗頭を各々組み立て、拝所を拝んだ後、両集落の境界である兄弟広場（チョーデーヒロバ）に集い、両集落代表により、兄弟棒（チョーデーボー）の演武が行われる。棒の内容としては一人棒（個人形）と二人棒の約束組棒を披露する。以前はけんか棒と呼ばれるほど、真剣に対決し、アザができる程であったと聞いている。2010 年頃からは地域の空手家から指導を受けて練習をおこなっており、現在では型と約束棒となっている。戦前から戦後の一時期までは、ハタスガシー終了後に村芝居が行われていた。この行事は住民の無病息災を願って隣接する大城と荻道の合同で行われているが、北中城村の他地域にはこうした事例はみられないが、他市町村ではハタスガシーは行われていた。〔北中城村教育委員会、2021 年、330 ～ 331 頁〕

調査票には反映されていないが、読谷村でも 16 日は盆踊りとしてエイサーを行うところが多く、この日は「ハタスガシー」ともいい、旗頭や優勝旗を出して風にあて干す日とされている。その日は一日中、外に出して立てた。渡慶次ではかつて旗頭を先頭にして、アサギで棒踊りを三組奉納して、字の繁栄を祈願した。瀬名波でも旗頭を先頭に道ジュネーをした。長浜では旧家を廻って祈願したといい、字によっては獅子舞をしたり、宇座や喜名ではこの日に村芝居をしたという。喜名ではこの村芝居の中で劇や組踊とともに棒術が披露された。〔読谷村史編集委員会、1995 年、132 ～ 133 頁〕この日には既述のように宇座や波平でも棒術が披露された。読谷村ではかつてこのハタスガシーには獅子舞をする村もあったといい、棒術とも合わせて悪霊や厄災を払う意味合いがあったことがうかがえる。

このような点は同様に沖縄市でも確認でき、安慶田では獅子を先頭に道ジュネーを行い、トゥヌモー（殿毛）の広場で棒術や空手を披露し、その後仲宗根・胡屋の獅子舞が演じられた。安慶田ではウークイの翌々日（7月 17 日）のこの行事を「ヌーバレー」とも呼んでいる点は注目される。長老たちが神屋と御嶽に祈願を行い、ムラ内を払い清めるための行事とされている。この他にも棒術は伴わないものの、ハタスガシーは上地、諸見里などでも行われ、諸見里では獅子舞が披露された。〔沖縄市総務部市史編集『沖縄市史　第三巻資料編2 民俗編－冊子編－』沖縄市役所、2015 年、128 頁〕

こうしたハタスガシーの行事では棒術が見られないところもあるが、嘉手納町嘉手納ではエイサーが行われ、またうるま市石川では村旗をアシビナー（遊庭）に立て、エイサー、臼太鼓などを舞ったことが記録されている。〔沖縄県教育委員会、2018 年、88 頁〕

以上のように、地域によってハタスガシーの行事内容に変差はみられるものの、行事の意味合いから棒術や獅子舞がともなっていたりすることには留意すべきであろう。

（２） ヌーバレー

ヌーバレーは沖縄本島南部で行なわれる旧盆直後の行事名である。五穀豊穣を祈るとともに、旧盆のウークイの時に帰りそびれた霊たちをグソー（あの世）に送り出すいわれがあるという。語源については諸説あるが、「ヌー」とはイノー（礁池）の欠け口のことで、ここから文物のほか様々な霊も入って来るので、それらの霊を再びヌーから払うことから「ヌーバレー」というようである。

ヌーバレーは調査票では南城市佐敷字津波古が報告されている。ヌーバレーの行事は、南城市佐敷字新里、字屋比久、字手登根、字外間、さらには南城市知念字知名、字安座真、字久手堅などでも旧暦7月 16 日に行われるか、あるいは行われていた。例えば知名や安座真では旗頭行列（ミルクも加わる）が道ジュネーをする点は中部の「ハタスガシー」の行事と共通している。知名や安座真のヌーバレー行事では道ジュネーのあとに村芝居の舞台芸能が披露されるが、棒術の演武はみられない。したがって、旗頭による道ジュネーが行われ、その下で村芝居を行うという点ではヌーバレーとハタスガシーの行事は由来をひとつにしていると解釈してよいと思われる。

現在、このヌーバレー行事において棒術が披露されるのは南城市佐敷字津波古の行事である。かつては字屋比久でも棒術がヌーバレーの日に行われるムラアシビにおいて披露され、棒マチや、ティンベー（盾・刀と槍）

とカマンティー（鎌と六尺棒）と呼ばれる古武道を取り入れた屋比久独特の演武も行われた。また、手登根でも同様のムラアシビにおいては芝居の幕開け（ザジリ）には場を清めるために、「かぎやで風」の楽曲に合わせたメーカタ（舞方）の一人棒が演じられたというが、現在は中断した状態にある。

津波古のヌーバレー行事はムラアシビの日でもあり、かつてはトゥティークン（土帝君）前の広場にバンクの仮設舞台が作られ各種演目が披露された（現在は公民館にて実施）。この日旗頭が立てられ、道ズネーイにおいて棒の演武が2～3組行われた。その後舞台演目としてメーカタボウ（舞方棒）、棒マチ、組棒の三種類が披露され、合わせて組踊や狂言、踊りなどが演じられ、合わせてシシケーラシ（獅子舞）も行われた。

メーカタ棒は一人で六尺棒をもって歌・三線にのせて祝いや行事の最初に演ずるもので、楽曲は「かぎやで風節」である。なお、津波古には三種類のメーカタ棒があったという。

津波古の棒マチは「ゼーマチ」と呼ばれる。棒マチは巻き方によって、ゼーマチ、グーヤーマチ、ウママチ、ナミマチの四つあるが、津波古はおもにゼーマチが演じられる。ゼーマチは 200 人近くの棒人衆が前棒組（奇数組）と後棒組（偶数組）の二組からなり、入場は飾りをつけた薙刀を持つ組頭の先導で、一列隊列になって、左回りに円陣を作りながら、3回小走りにまわる。3回、まわり終わると、行進をやめ、前棒組と後棒組が一斉に組棒を行う。さらに3回まわって、薙刀が出発地点に戻ると、前棒組はそのまま進んで内円を作り、後棒組は反転して外円を作る。両組ともまわりながら相手の棒にカチカチと合わせる。前棒組と後棒組は二手に分かれて行き、円の中央で組棒体勢に入る。中央でタンカー棒（一対一）を順次全員で行い、一列隊列で退場する。前棒組と後棒組は二手に分かれて行き、円の中央で組棒体勢に入る。中央でタンカー棒を順次全員で行い、一列縦隊で退場する。

組棒は銅鑼鉦の調子に合わせて演ずるもので、①チュイボウ（一人棒）、②タイボウ（二人棒）、③ミッチャイボウ（三人棒）、④ユッタイボウ（四人棒）、⑤グニンボウ（五人棒）、⑥ハジリボウ（はじり棒）などがあった。大抵の組棒に約束ごとがあるのに対し、ハジリ棒は約束ごとがなく、自由に打ち合うケンカ棒である。ミッチャイボウ（三人棒）は津波古独特のものといわれ、大正 12（1923）年頃に創作された。ユッタイボウ（四人棒）は、明治 43（1930）年頃に地元の四人の棒好きの若者が、勝連津堅島の「棒まつり」で四人棒をこっそり盗み見て覚え、津波古に持ち帰って伝承したと伝えられる。〔佐敷町史編集委員会、1984 年、424 ～ 447 頁〕

以上、ヌーバレーの行事では盆に集まった先祖以外の霊をあの世に戻す意味合いがあり、それにともなって棒術や獅子舞などが払いの位置づけとされていることが看取できる。

（3） イタシキバラ

イタシキバラは、八重山において、石垣市宮良では「イタシキバラ」、同大浜では「イタツキバラ」、波照間島では「イタスケバラ」とか「イタシキバラ」などと呼ばれている。語源は「いたつき（痛い）ばら（払）い」の転訛ともいわれる。〔石垣市史編集委員会、2007 年、244 頁〕旧盆直後に行われる祭りで、村落に出没する悪霊払いが目的である。そのために棒や獅子舞が行われるという。このイタシキバラは沖縄本島のハタスガシーやヌーバレーと系統を同じくする行事とされている。〔崎原恒新、1999 年、227 頁〕

今回の調査では棒術を伴うイタシキバラは石垣市大浜の事例が報告されている。ただイタシキバルの行事自体は石垣市宮良、竹富町波照間など他の地域でもみられる。

大浜では旧盆の送り日の翌日（16 日）に棒術が獅子舞と一緒に演じられる。この祭事を「イタツキバル」と呼んでいるが、棒術と獅子舞は夜に行われ、お盆に招かれなかった無縁仏や悪魔払いと、村を清める行事だと伝えられる。獅子棒は、獅子の登場前に二人一組で演舞する。六尺棒を持った二人が会場内を一周し、向かい合って戦う。勝負はつかず、再度会場内を一周し、向かい合って演舞し、その後退場し獅子を会場内に招き入れる。悪魔祓いの行事といわれるので、新築家ではカルイ（吉例）として招待して獅子舞をする慣習もある。宮良では「イタシィキバラ」といい、3日間の祖先供養を終えて休養すべきだが、ショウマキ（精負け）をしないように昼アンガマ踊りを催したという。いくつかの旧家を順に巡り、午後8時頃に獅子舞とアンガマをし

て終了する。宮良では棒術の披露はない。〔石垣市史編集委員会、2007 年、244 ～ 247 頁〕

石垣市伊原間では送り日の翌日 16 日を「イタシキビラ」といい、お盆に招く者がいない無縁仏や悪霊などがムラウチを彷徨って後生へ帰らずにいるので、それを獅子舞によってムラの外へ追い払う行事とされている。当日の朝は字民総出で溝を浚う清掃や藪の伐採作業をして、夕方にムラの出入り口で獅子舞をして魔物を追い払うことをした。一方、白保では盆の翌日は「ミチブシ」と称して農道の補修をして、その後は角力大会や棒術の練習をした。また夜には獅子の家元の宮良家で獅子頭に祈願して、獅子納めの儀式を行ったという。〔石垣市史編集委員会、2007 年、246 ～ 247 頁〕

以上これまで紹介してきた盆行事及び関連行事において、現在でも実施され披露される棒術等をまとめると、次のようになる。

表2－ 2－ 1　盆及び関連行事で棒術等が行われる地域

	北部	中部	南部	宮古	八重山
盆行事	名護市久志	うるま市田場 読谷村宇座・波平 西原町小波津	八重瀬町志多伯 八重瀬町玻名城	なし	石垣市登野城 石垣市真栄里 竹富町波照間
ハタスガシー	なし	北中城村大城・荻道	なし	なし	
ヌーバレー	なし	なし	南城市津波古	なし	
イタシキバラ	なし	なし	なし	なし	石垣市大浜

著：萩尾　俊章

4　その他

（1）　南ヌ島（フェーヌシマ）

沖縄各地には、フェーヌシマ（南ヌ島）と呼ばれる棒を使う独特の芸能が伝わっている。ここではその分布状況と、各地域での特徴を概観してみたい。芸能研究者の大城学は、フェーヌシマの芸能的特徴として以下の7点を列挙している（大城学 1992）。

（1）４人以上の人数で、主に男性が演じる。
（2）仮面を被ったり、仮装したりする。その場合、顔を隠す工夫をする。特異な服装をする。
（3）棒を持つ。棒の先端に金属輪を付けることもある。棒を打ち合う所作がある。
（4）跳躍したり、転がる所作がある。また、手を高くあげたり、足を高くあげる所作もある。上体を後ろに反らす所作などもある。
（5）演技中に、掛け声や奇声を発する。
（6）使用される楽器はドラ、太鼓、ホラ貝、鉦、笛、三振などである。
（7）意味不明な歌詞がうたわれる。

また大城は、フェーヌシマ系の芸能について次のように総括している（大城学 1992）。

フェーヌシマ系の芸能は、かつては県内二十数カ所の地域で演じられていたようだが、現在演じている地域は、ほぼ半数に減っている。

フェーヌシマ系の芸能は、沖縄本島及び周辺離島では、旧暦七月・八月のムラ踊り（豊年祭）で演じる。宮古島の上野村字野原は旧暦八月十五日のマストゥリャー、上野村字新里は旧暦六月の豊年祭で演じ、多良間村は旧暦八月の八月踊りで演じる。八重山諸島では旧暦八月・九月の種子取祭や結願祭、節祭で演じている。その他、不定期に催される民俗芸能大会等に出演して、上演の機会を得ている。

『那覇市文化財調査報告第１集　那覇安里のフェーヌシマ』によると、沖縄県内にはフェーヌシマ及び同系統と思われる芸能が 27 カ所に分布している。この中には、現在は行われなくなっている地域もあるが、ここでは名称別に以下のように分類する。

・フェーヌシマ：
　名護市嘉陽、恩納村字名嘉真、・仲泊、金武町字伊芸、読谷村長浜、北谷町字北谷、
　宜野湾市普天間・野嵩・新城、北中城村字熱田、中城村字津覇、那覇市安里
・ペンシマ：伊江村字西江上
・棒：糸満市字真栄里、玉城村字垣花、与那国町与那国（祖納）
・棒ふり：上野村字野原・新里
・ヨンシー・棒：多良間村字塩川
・ハイヌスマカンター棒：石垣市新川
・ハイヌスマ棒：石垣市大川・登野城・平得・大浜
・サングルロー：竹富町字竹富
・ダートゥーダー：竹富町字小浜
・獅子棒：竹富町字黒島（東筋）
・タイラク：竹富町字黒島（保里）

これらの中から、ここではいくつかの事例を紹介してみよう。

ア　恩納村字名嘉真のフェーヌシマ

はじめに指笛と三線に合わせてトンツン小と称する者２人が登場する。トンツン小は白地の長袖シャツ・長ズボン、打ち掛け、白黒縦縞脚絆に陣笠を被り、拍子木を持っている。トンツン小が舞台中央奥に立つと、麻の繊維のかつらを被った者たちが勢いよく登場して、「ハウ」という掛け声をかけながら、舞台を一巡し、舞台中央で左右二組に分かれる。歌に合わせて踊った後、向かい合って腕を組んで力比べをし、退場する。トンツン小も退場すると、再び、麻の繊維りかつらを被った者たちが、今度は棒を持って登場し、二組に分かれる。棒を打ち合った後、退場して演技は終了する（大城 1992）。

イ　伊江村西江上のペンシマ（国指定重要無形民俗文化財）

伊江村ではペンシマと伝えられ、西江上区に継承されている。県内のフェーヌシマ系の踊りでもペンシマは唯一、鬼面を被り、４場面からの構成となっている。

ペンシマ面は鬼面で、黒色である。鬼は白ズボン、白襦袢に黒の陣羽織を着け、黒脚絆、そして鬼面を被る。はじめに、鬼面を被った者６人が、棒を片手に持って登場し、歌に合わせて踊る。次に、やぶついの比屋（武士）が登場して、「このごろこのムラに鬼が出没して人びとに危害を加えているので退治してやる」と唱える。やぶついの比屋は鬼の住処に行き、鬼退治に来たから勝負せよと迫る。鬼は一匹ずつ出てきて、やぶついの比屋と戦うが負けてしまい、降参して一からげにされて退場する、という鬼退治の内容である（大城 1992）。

ウ　金武町伊芸のフェーヌシマ（南ヌ島）

言い伝えによると、恩納村名嘉真から伝わり、うるま市（旧具志川市）田場にも伝えたと言われている。赤く染めた蔓を被り、打掛け服装で鉄の鎖をつけた六尺棒を持つ４人が、「ハウー」の掛け声とともに登場し、棒の演技を終えて退場する。それに代わって三尺棒を持った４人が入場し、演技を終えて退場する。次に、８名が「ハーイーヤ」の囃子で入場し、演技を終えて退場する時、独特な「サールーゲー」で退場する。これまで途絶えていたこの踊りを復活し、南ヌ島保存部を中心にして継続に努力している。部員によって定

期的に練習が行われている。（2013 年沖縄県文化協会資料）

エ　北谷町北谷のフェーヌシマ

北谷区のフェーヌシマは、12 年に1回（寅年）、旧6/15 に行われる北谷大綱引きの道ジュネー、スネーの演目として演じられる。棒を振り回したり、打ち合う（棒巻）。空手の型の「手」と「タッチムッチー」がある。その由来は不明であるが、宜野湾間切普天間から伝わったという説がある。

昭和 61（1986）年までは、メンダカリ、クシンダカリの二組に分かれ、雄綱、雌綱の側で演じた。平成 10（1998）年の大綱引きでは、1組で雌綱の最後尾から雄綱の最後尾に向かい単独でスネーした。

出演者は、戦前は字北谷出身の青壮年（17、8歳から 30 代前半まで）で、メンダカリ、クシンダカリ各組に鉦打ち1人、12、3人で構成された。

演武としては、棒を振り回し打ち合う「棒巻」と、空手の型のような「手」がある。2人組み合わせで回転する「タッチムッチー」があるが、昭和 30（1950）年以後は演じられていない。

オ　北中城村熱田のフェーヌシマ

熱田のフェーヌシマが演じられるのは、昔は旧盆の七月遊びと称した十四日と十六日であった。現在では 88 歳の長寿を祝う合同祝いの時や字外から招待される時に演じられる。明治 17（1894）年を最後に途絶えていて、大正 14（1925）年、天皇御代典記念行事を機会に復活した。戦争時は中断していた。

演武としては、踊りは手踊りと棒踊りの二種がある。最初に歌三線に合わせて8人で手踊りを演じ、その後4人一組で棒踊りを演じる。前半は南島歌　ハウー、ハウーと奇声を発しながら出てゴーマチ（輪）を作る。歌に合わせてゆっくりした振りで踊り始める。後半は、工三工節に変わると、一の棒、二の棒、三の棒、四の棒の順に連続して棒の打ち合い、跳躍と激しい演技がある。これらを済ませると再びホウ、ホウと奇声を上げながら上手に退場する。

カ　那覇市安里のフェーヌシマ

安里のフェーヌシマには、四尺棒で互いに打ち合う棒術と、瓢箪を持って踊るヒュータン踊りと、トンボ返りを見せるサールゲーイの三つの演技がある。棒術では、銅鑼の合図で演技者が集まると、各自の左側に立つのが相棒である。この一対の相手が二つで、四人が一組になって演技をする。すべて銅鑼の合図で演技を運んで行く。ヒュータン踊りは四人一組で二人が一対となって立つ。銅鑼が鳴ると、「ハーイヤ」の掛け声で両手を腰に当てて出る。再び銅鑼が鳴ると、掛け声で互いに空手の構えで左右に向かい合う。この構えでハッシハッシと応えて、互いに左腕をかけ左に回る。回り終わると腰の右手を伸ばし、左から頭上に回して右になると同時に体を右に向けて右手のこぶしを立て、左手を腰に当てて構える。これを続けて演技が始まる。サールゲーイは一種のトンボ返りのような芸である。二人の組み合わせで、相手の股ぐらに頭を突っ込み、相手の腰を抱え、この形で前後に二人でくるくる回る。

（『那覇安里のフェーヌシマ』を要約）

キ　竹富町字竹富のサングルロー

サングルロは赤く染めた芭蕉の糸で顔を覆い、黒頭巾をかぶり、芭蕉衣にわら縄を締めて踊る。この踊りの最後は、4人の踊り手が転がりながら幕内へと入っていく（『竹富町史　第二巻　竹富島』）。

ク　竹富町字小浜のダートゥーダー

ダートゥーダーの面の形状は、伝承によると、祭りのときに神酒を入れる木製の容器であるパダスを縦に半分に割った形だという。面は黒色で鼻が高く、口や目は大きくて、目尻が細くて長い。額には横皺がある。

（中略）ダートゥーダーの入羽で演じる所作に、二人の両肩にもう一人が乗るのがある。（中略）小浜島のダートゥーダーは、結願祭で南ムラの演目として、最初に演じられるものであった。南ムラのダートゥーダーに対して、北ムラの出し物は「弥勒」である。それからすると、ダートゥーダーは神事芸能としての要素を有していたと考えられる（大城 1992）。

著：久万田　晋

（２） シヌグ・ウンジャミと綱引き行事

ア シヌグ・ウンジャミ

シヌグやウンジャミの中に位置づけられる場合もみられる。第３章に取り上げられた「ビーンクイクイ」という儀礼である。本島最北端の奥集落では旧盆明け亥の日におこなわれる「シヌグ」（３日間）と「ウンジャミ」（２日）が隔年で行なわれる。シヌグ行事は、１日目に「フーヨーサレー」行事、２日目は休みで、３日目に「ビーンクイクイ」とよばれる集落の長老の長寿を祝す行事が行なわれる。その行事の道ジュネーの先導役を務めるのが空手と棒術の演武者である。王国末期首里の士族が奥に定住し、その子孫が首里の御殿・殿内に奉公していた際に習得したとされる。士族の武芸であった「手」や「唐手」が奥区に伝わり、この行事に導入されたと考えられる。

大宜味村謝名城、饒波、大兼久の村落では、戦後のある時期まで豊年祭やシヌグ・ウンジャミの舞台演目の中で空手や棒術が行われていた報告はあるが、現在は途絶えている。饒波では旧盆明け亥の日、ウンガミの際に棒術による型の演武があった。公民館前の広場において、ブラーというほら貝で作った笛を連続的に吹き鳴らしながら駆け足で広場を右回りで一周し、やがて奇数偶数に分かれて外から中心へ、中心から外へのとまわる。先頭の人は薙刀を持ち、後続の人は、六尺棒、三尺棒を持つ。両先頭のなぎなたを持つ人はヒヤーという声を発して身をかわすふりをする。その後に個人個人の棒術が続き、一人棒、二人棒、巻き棒などいろいろな型を披露した。鎌を使用した演舞もあった。大宜味村内では棒術が行われる集落は他になく、なぜ饒波だけだったのか、どのように伝わってきたのかは不明である。 終戦直後は行われていたが、『大宜味大工一代記』の記録からは、昭和 63 年にはすでに中断していることがわかる。復活を望む声もあるが、指導者や記録がなく復活できないていないという。

一方、大宜味村大兼久では旧盆明けの翌日に、無事に納税をすませたことを祝する「ゾーガリー」という行事があり、その中に空手の演武がみられる。「ゾーガリー」がシヌグ・ウンジャミ系統の祭事として位置づけてよいのか検討の必要もあるが、現在でも三線の曲にあわせて、「クーサンクー」と呼ばれる型の演武がある。旧盆明けの翌日であること、また海に向かって祈願したり、演武すること、豊作祈願の目的なども含むことからここの中で扱った。大まかな型の所作は決まっているが、明確な型の決まりはなく、アシビのなかで先輩から後輩へ見よう見まねで受け継がれているものとされる。ナハンゾー（中の門）と呼ばれる集落内の海に向かう道路上で、海に向かって拝み、奉納儀礼として行われる。道沿いに演奏者が座って三線を演奏する。三線と太鼓で開始を告げてから、御願をする。その後３曲演奏し、３曲目でクーサンクーと呼ばれる空手の演武を行う。海の方向へ向かって演武する。大宜味に間切番所があったころ、大兼久の浜辺から出向した上納船の航海安全と来年の豊作祈願、首里への年貢の上納が完了した祝いであると伝わる。大宜味村内の他集落にはまったく伝わっていないため、どのように伝播したのか詳細はわからず、なぜ空手の型が演じられるようになったかまったくわからないという。

北部離島の伊是名村仲田・伊是名・勢理客・諸見では、シヌグ・ウンジャミでは、ウンナジャーレーとも呼称する儀礼がある。グーサン（棒）を杖状に構え、地面や家屋内（拝所含む）を練り歩きながら、床面をドンドンと打ち鳴らしながら、「ウンナジャーレーホイホイ」や「ウナザレホホヒヌネーホホ」などと叫び、庭のある拝所や住宅では、二人一組や三人一組で三尺棒により棒術の型を披露する。 各字とも伊是名城

跡にある御嶽前の庭にて演舞した後、集落の神アサギやムラ火の神、旧家を周り、道中声がかかれば飛び入りにて民家でも行う。 集落内の悪魔払いを軸に実施されるが、併せて村落の繁栄や五穀豊穣、健康祈願なども行われている。棒術の型は青年会で伝承されており、青年会が子どもたちの稽古と指導をしている。

写真2-2-4 ウンジャミのウンナジャーレー〔伊是名村〕

表2- 2- 2 シヌグ・ウンジャミで棒術・空手演武が行われる地域

	北部地区
シヌグ・ウンジャミ	伊是名村仲田・伊是名・勢理客・諸見・国頭村奥、(大宜味村謝名城、饒波)
ゾーガリー	大宜味村大兼久

※（　）はかつて行われたところ

イ 綱引き行事

ムラの棒術はその代表的なものですが、綱引きには棒術の演武や青年達による激しいぶつかり合い、婦人達による対峙した歌合戦など、双方の集団による誇示行為、いわゆるガーエー（示威的行為・競い合い）が知られているところで、綱引き行事には棒術や空手などの武術的身体表現が多く見られる。

少しだけ歴史的記録をひもといておきたい。綱引きに関して一定程度記録が残るものとしては、那覇大綱挽の前身となる「那覇四町綱」や特別な例として国家的慶事で行われた首里の「綾門大綱引」がある。

首里の綾門大綱引（アイジョーウーンナ）は王国時代には国王一代に一度即位祝賀として大綱引が行われた。尚泰王の即位祝賀（1867 年）でも引かれ、日清戦争凱旋祝賀（1898 年・明治 31 年）が最後の実施とされている。五穀・豊饒・豊年を祝う平和を旨とし、2回引いた。村（ムラ）綱では綱を寄せる際には、雌雄共に大力無双の者が一人で頭を支え、双方をかぶせると同時に、空中に跳びはね抜け出る技が必要で、首里にしかない芸当で、この役目はブシ（武士）＝空手の達人でないとできなかったとされる。首里のガーエーは手を握り頭上に上げて交差させ、互いに背を向けあって、押し合い、テームチ（松明持ち）の合図でかけ声勇ましく渦巻きながら踊り回った。

那覇の大綱挽はよく描かれたようで、慎思九（泉川寛英）「親見世綱之図」（1829）をはじめいくつかの絵図が残されている。絵図では大綱とともに、旗持ち、鉦子打ち、太鼓打ち、法螺吹き、紅衣人（娼妓）などが確認でき、中には棒を持った人物もみえる。那覇でもガーエーがあり、両方の集団がウラースン（罵詈雑言）からオーエー（けんか）へと発展することも多かった。そのため「棒突き」と呼ばれる警護がいて、事前の巡回警備をしたり、綱引きの際にはルクシャクボー（六尺棒）を振り、拳やひじでこずいたりして相手をおどしたりしたという。〔島袋全発『那覇変遷記』1978 年、P.152-173〕

さて、本報告書において綱引きに伴うシタク（戸板）上での演武の事例が本島北部の伊平屋村我喜屋の綱引きで報告されている。綱引きの前に東である内村と西である兼久双方が体をぶつけ揉みあい、力比べの「ガーエー」がおこなわれた。女性から始まり、次に男性のぶつかり合い行われ、そこに内村からは亜麻和利、兼久からは護佐丸に扮した2人の若者がハシルーと呼ばれる木板（一般にいうシタク）に担がれ登場し、一騎打ちとなる。こうしたシタクの上での演武が伊平屋島に継承されているのは注目される。歴史上の人物などに見立て武具を持ち構えるという対抗の表現事例で、本島中南部の綱引きでは多く見られるものであるが、型の披露や対面打ち合いなどはないため本項では割愛してある。

綱引きに伴う棒術として糸満市真栄里の事例をあげておく。綱引の道ズネーでは、シタクには人物の扮装、獅子、綱などが行列を組み、会場となるメーミチの広場に到着する。アガリ（東）、イリー（西）の棒旗が二人一組となって、互いににらみ合い、三角状の旗を付けた槍をふったり、突いたりして中央まで進むという具合である。綱引き時に激しく揉み合うガーエーの後に棒の演武がある。東西ともトゥマインクー（一人棒の型）、タンカーボー（二人が向き合って打ち合う）、サンリンボー（六尺棒一人と三尺棒二人の組み合わせ）、トゥンボー（四人棒の型）であるが、それぞれ型が異なるという。真栄里にはヘーシマー（棒踊り）も伝わる。東はトン棒、クンの棒、三人棒、組棒、タンカ棒、チーグ、棒一、なぎなた、西はトン棒、津堅棒、三人棒、泊棍組棒、タンカー棒、チーグ、棒対なぎなたの組み合わせである。

一方、八重山の黒島では旧正月に綱引きがあり、シタクの上では北から鎌を持った演者、南から槍を持った演者が出てきて打ち合いの演武をする。これとは別に型の演武があり、演武構成は仲本の棒（ティンバイ）、一番棒（東筋）、仲本のカッキ棒（鎌と棒）、各部落の棒、保里のエークである。獅子に対峙しての武術である獅子の棒（東筋部落）もある。行事の中での演武の意味は防御の手としての意味があるという。黒島にはもともと棒や空手はないことから、外から「村芝居」（芸能団）が来て、もともとあった黒島の舞踊と混ざったのではと語られる。黒島は東筋、仲本、宮里、保里、伊古の5部落があり、それぞれで行事を担っている。

綱引きのガーエー（示威的行為・競い合い）のなかで棒術が披露される、あるいは披露された地域は、中部では西原町小波津、同棚原、（北谷町桑江）で、南部では浦添市前田、豊見城市高安、同根差部、糸満市真栄里、八重瀬町宜次・志多伯・安里・具志頭などで、八重山では竹富町黒島が唯一の事例である。また、空手の型が披露されたのは中部では中城村新垣、（北谷町桑江・北谷・野里）、南部では豊見城市根差部、糸満市真栄里などである。さらには、綱引きの行事に際して相撲（角力）が行われることもある。宜野座村宜野座、金武町金武、沖縄市大里、沖縄市与儀、宜野湾市真志喜、（西原町幸地・小橋川・内間）では相撲（角力）が行われた。

写真2-2-5　棒マチの演武〔八重瀬町安里〕

写真2-2-6　棒マチで渦を巻く〔八重瀬町安里〕

表2-2-3　綱引き行事で棒術・空手等が行われる地域

	北部	中部	南部	宮古	八重山
棒術	なし	西原町小波津 西原町棚原	浦添市前田、八重瀬町志多伯・宜次・安里・具志頭、豊見城市高安・根差部、糸満市真栄里	なし	竹富町黒島
空手	なし	宜野湾市宜野湾 中城村新垣	豊見城市根差部 糸満市真栄里	なし	なし
相撲（角力）	宜野座村宜野座、金武町金武	なし	南城市津波古	なし	なし

（3） 特別な行事

ア 龕の年季祭

豊見城市高安や饒波、八重瀬町小城・当銘では龕を所有、もしくは共同所有していて、その龕の年季祝いに際して棒術・舞踊の奉納と空手の演武が行われる。棒術と舞踊の奉納は、龕の霊を鎮め慰めるとともに、字内の悪霊を追い払う意味があるという。

高安では旧暦 8 月 9 日・12 年に 1 度の辰年に龕の補修を行い、行列や余興などもある盛大なガンゴーが行われるが、それ以外の年は無病息災を祈る御願のみが行われる。御願の前に公民館前広場で、旗頭や六尺棒やヤイ・ナジナタを掲げ銅鑼鐘を打ち鳴らし気勢を挙げるへーイ棒（1 組、2 組）がある。宜保殿内と波平の両家で奉納棒術としてへーイ棒（1 人）、タンカー棒（2 人）、ヤイ・ナジナタ（2 人）を行う。道ズネー出発前にへーイ棒を行い、旗頭を掲げてガーエーをする。龕屋前では奉納棒術として個人棒（1 人）、タンカー棒（2 人）、へーイ棒（1 組 10 人・2 組 10 人）、ヤイ・ナジナタ（2 人）がある。そして「コーヌユーエー」で、へーイ棒、個人棒、タンカー棒、ヤイ・ナジナタの棒術が披露される。最後に龕を解体して龕屋へ納め供え物をし、ここでも棒術や舞踊を奉納してから、龕屋を閉じて施錠する次第である。これらは高安空手同好会によって行われる。

イ 観音堂祭

南城市玉城の奥武区では観音堂祭で棒術を披露する。観音堂は 1600 年代初めに遭難した中国の船を救助したお礼として奥武島の人々に贈られた金の観音像が祭られてたことに由来する。2020 年 11 月 3 日に「奥武島観音堂 405 年祭」が開催された。観音堂 380 年祭までは、旧暦 9 月 18 日に行ってきたが、385 年祭からは 9 月 28 日以降の日曜日に階催されるようになった。5 年ごとの観音堂祭に演武するので、それに合わせて稽古する。棒術は 1750 年代に奥武島に伝えられた。

棒術は9つの型があり、特に棒術の原型とされている津堅暗闇（チキンクラシミヌボウ）は技が非常に難しく、長いため上級者しかできない型である。一般的な棒術は六尺棒で演武し、四方に向きを変えるが、津堅棒は八方に向きを変える。幕開けで行う舞方（メーカタ）はその場の邪気を祓い清める意味がある。団体演武の潮巻チ（スーマチ）、大槍ぬ手（ウフヤィヌティー：槍が前棒、ナギナタが後棒）、槍小ぬ手（ヤィグァーヌティー：大槍ぬ手の抜粋）、尺小ぬ手（シャクグワーヌティー：六尺棒と三尺棒の組棒）、砂掛ちぬ手（スナカチヌティー）漁師のエークが前棒、釣り人の鉛が後棒、尺小ぬ手（シャクグワーヌティー）、ブイ小ぬ手（ブイグワーヌティー）薪を取る人が、短い 2 本の棒を持ち、農夫が六尺棒、櫂ぬ手（エークヌティー）エークの 1 人棒、津堅暗闇（チキンクラシミヌボウ）の構成である。

津堅暗闇は棒術の原型とされているが技が非常に難しく、しかも演武が長いため上級者しかできない型である。メーカタ棒は、四方に向きを変えるが、津堅棒は八方に向きを変えるという特徴がある。

ウ 集落の移転記念日

久米島町具志川の棒術は字移転記念日に披露される。字具志川移転記念日は明治 28 年字仲村渠古島から現在の字具志川松の口に移転した旧暦の 8 月 19 日を基本として、実行委員会・部落で日程調整し、10 年に一度棒術を行っている。

棒術は3場面で構成される。一の場面は入場「たかまち・グーヤー巻き（現マチ棒）、全員参加でホラ貝、太鼓、ドラの音に合わせ「フイフイ」のかけ声で棒を上下し横歩きで入場し、会場に入ると前を向き棒を上げるときに右足を大きく上げ行進する。その後左巻きの大巻に入る。渦を巻ききったところで渦を解き、敵味方の二組に分かれ小渦をつくり、巻ききったことろで渦を解き対戦の隊形に入る。二の場面は対戦「タンカー棒」で、基本全員が棒術のメインとなる場面で1人対1人、2人対1人の秘術をつくしての攻め守りの激しい打ち合いをする。三の場面は基本型の「ダンヌ棒」で8名で演じる。棒術の締めくくりとして数名の若者によっ

て、棒術の基本を東西南北に向け披露する。ダンヌ棒が終わると隊形を組みなおし大巻き、そして退場となる。

以上、ムラ行事として武術的身体表現をともなう棒術や空手等の演武が行われる行事を取り上げてきた。

これら以外にも様々な機会に棒術等が披露される。粟国村字西では旧正月の「マースヤ行事」の棒踊り（棒術）が行われ、富盛の八月十五夜では棒術が披露されるが、その中の唐人行列では空手の組手が演じられる。その他、敬老会や共進会などでも棒術等が披露されている。本節では行事別の特徴として、行事に分けた上でのそれぞれの棒術等をまとめて照会したが、各々に特徴があるというよりは、むしろ様々なムラの行事に棒術等の演武が取り入れられ、県内に幅広く分布し普及していることが大きな特色であるといえよう。

写真2-2-7　棒術の演武　八重瀬町富盛

写真2-2-8　空手演武　八重瀬町富盛

著：萩尾　俊章

第３節　武術的身体表現を有するムラ行事の総括

１　北部地区

特徴①分布

国頭・大宜味村、東村の北部3村では、今日空手や棒術の演武の事例は確認することができないが、本島最北端の奥（国頭村）のシヌグに含まれる行事に、棒や空手の所作による先導役が確認される。王国末期に首里からの旧士族の移動に伴い空手や棒の伝播の伝承を確認することができたが、元来の行事の中にどの時点で導入されたかの時期は不明である。また、謝名城の豊年祭に演目に中で空手の所作が舞踊化されたものがあったりするが、一般的な二才踊りと思われる。本部半島の今帰仁村では今日でも今泊、仲宗根、湧川の3つのムラでは豊年祭の中で「ボー（棒、棒術）」と呼称されるものが盛んに行われる。湧川では「スーマキ（総巻き）」と呼ばれる集団による棒演武がある。本部町では瀬底と並里の2つのムラでも棒が確認される。特に、並里区では棒術の中に、「ウッチュンボー（一人棒）」、「フタリボー（二人棒）」、「サンニンボー（三人棒）」や「タチンティー（太刀手）」と呼ばれる刀の演武や「ゴーリーティンベー（転びティンベー）」と呼ばれるヤリと盾・刀の組型があり希少な武術的な身体表現があったりする。名護市では旧羽地村の3つのムラ、旧屋我地村で5つのムラでも「ボー」が確認される。東海岸沿いの旧久志村では久志、辺野古の2つムラでは「ボースケ（棒使い）」や「ボージュツ（棒術）」がある。宜野座村、金武町では、「十五夜あすび」や観月会の中でも、「ボースケ（棒使い）」や「ボー（棒）」がある。また、中部地区と近接する金武町では旧暦八月十五日に十五夜ムラアシビや観月会の行事で、「フェーヌシマ（南ヌ島）」と呼ばれる棒踊りがあり、伊江島では「ペンシマ」と呼ばれる。

特徴②名称

北部地域では、棒の集団演武がある村落ではその呼称を「スーマキ」と呼ぶが、その表記の仕方は「総巻き」、「数巻」があったりする。個々の棒術の呼称については、棒術と棒演武者の呼称が混在して、「ボー」、「ボウ」、「ボーカタ」、「ボースケ」、「ボースケ—」と呼ばれ、その表記の仕方は「棒術」、「組棒」「棒組」とするのが多い。

特徴③行事との関係

北部地域では、大きく次の3つに分類される。大半は本部半島一帯から東海岸の地域において旧暦8月 15 日の「豊年祭」や「村ウドゥイ」、「八月あしび」の行事名の中で演じられることが多い。また、旧暦7月 16 日の盆行事の中の「ムラ踊り」（久志）や「シヌグ」または「ウンジャミ」（伊是名村）の中で位置づけられるものもある。

特徴④芸能との組み合わせ

北部地域の棒術は、基本的には豊年祭を始めるにあたり、舞台や場を清める意味を持たせて棒を演じる場合が多い。棒術の数少ない指定文化財である本部町指定無形民俗文化財「満名棒」を有する並里区では、「棒シンカ」によって、豊年祭の開幕前の舞台で「トゥーシ」としてすべての棒術・武術を行った後、豊年祭の舞台の幕開けが行われる。棒術は他の舞踊とともに上演されるが、5年マールで開催される同区の豊年祭全体の演目 14 演目のうち、前半と後半に「棒術・武術」の演目が各1回行われる。その1つのプログラムに6演目の棒術が含まれ、延べ 12 演目が披露される。型や組棒による1演目の演武時間は1～2分だが、演目数は全体の半分を占める。祭祀的には、舞台が始まる1時間ほど前に、棒シンカによって集落の山裾に位置する並里神社の前で奉納演武を行った後、舞台に上がることからも棒シンカが豊年祭を行う上で場を清める役割を果たす一例として考えることができる。同様に今帰仁村湧川でも、ボーカタ（棒方）による3か所（前ヌピャー、

シシヤー（獅子屋）、野外ステージ前）での棒や路次楽、獅子舞の演舞（ママ）後、踊りの部が開始されたりする。豊年祭の舞台芸能は、性差による分類も可能である。男性のみで行われるボーとその他の演舞は、女性を含めた男女混合で行われる演武（舞）に分かれる。

特徴⑤棒術の組織

北部地域では棒を行う組織は、豊年祭の「ウドィカタ（踊方）」や「ウドゥイグミ（踊組）」に対し「ボーカタ（棒方）」や「ボーグミ（棒組）」や「ボースケ」と呼ばれ、中学生以上で構成される青年団や青年会を中心とした組織で行われるが、地域によっては保存会を設置し、技術伝承の基盤形成を積極的に行う団体もある。宜野座村宜野座は、15 ～ 49 歳の青年会・成人会の男性で組織される「ニーセーダン（二才団）」という強固な組織をつくり、集落の伝統行事を牽引する事例もある。

特徴⑥棒術等の編成と内容

北部の棒術の編成は、大きく3種類に分かれる。一人で演武する一人棒（並里では「ウンチュ―ボー」と呼ぶ）は、一人で型の演武を披露する。組棒の場合は、２人１組の場合、さらに3人１組の場合がある。戦前は、並里では5人棒もあったというが現在は確認できない。また、集団演武の場合は先導役と後尾役が衣装や帯や所持するもので判別できるようになっている。その要因としては演武の最中に誰が先導役であるかについて演武者全員が明確にわかる必要がある。単純な呼称、例えば、演武する人員数での呼称があったりする。一人棒（ウンチュンボー）、二人棒（フタリボー）、三人棒（サンニンボー）（並里）や、演目の出る順番で、ハタボー（旗棒）、メーボー（前棒）、ナカボー（中棒）、シーボー（後棒）と、より棒術の難易度の高低を示すものもある（湧川）。棒術の演武形態で大きな違いは、組棒の際に二つの棒の打ち合うことの有無である。並里や湧川は、ひとつの例外（シーボー）以外に打ち合うことはない。打ち合わず力強さと迫力を伝えることが真髄だと考える。一方、数久田では棒が折れることがあるほどに激しく打ち合うことの勇壮さに加え、地名（ボーユンジャ（棒読谷山））や所作【トーヌギャー（飛棒）、カラブイ（空振り）、ヨコウチボー（横打棒）など】、用具と部位【ロクシャクヌウラ（六尺裏）、ヤリと尺（槍と尺）】、動物【マヤボー（猫棒）】、新作【ミーボー（新棒）】と多様な型名で呼称する事例もある。

特徴⑦上演場所

北部地区での棒術を披露する上演場所は、奉納演武の場合は特定の場所（ニーヤー（根屋）前、神アサギ（アシャギ）前、獅子舞がある場合はシシヤー（獅子屋）前、御嶽、集落内の旧家）を経て、公民館前に舞台をつくったり、屋外ステージと呼ばれる集落の行事の舞台が備えられている場合がある。今帰仁村では、公民館とは別に、豊年祭用の「特設ステージ」と呼ばれる鉄筋コンクリートの舞台が公的資金で整備されており、湧川区はその嚆矢だとされる。

特徴⑧棒等の種類

北部で使用される棒の種類は、大半は六尺棒（約 180 ㎝）を使用するのが一般的である。今帰仁村の湧川や本部町並里、名護市数久田、宜野座村宜野座の事例を後章で紹介するが、中には、「タチンティー（太刀手）」と呼ばれる木刀（三尺）や「ゴーリティンベー（転びティンベー）」と呼ばれる短剣と盾と組型があったりする（並里）。

特徴⑨その他

北部に伝わる「クーサンクー」と呼ばれる演武

戦後のある時期まで大宜味村謝名城、饒波、大兼久の集落では、豊年祭やシヌグ・ウンジャミの舞台演目

の中で空手や棒術が行われているという事例の報告があったが、現在は確認ができない。その中で、大宜味村の大兼久区（ハニク）では、旧盆明けの翌日に、無事に納税をすませたことを祝する「ゾーガリー」という行事があり、現在でも「クーサンクー」と呼ばれる三線楽にあわせて、「クーサンクー」と呼ばれる型の演舞があるという。大まかな型の所作は決まっているが明確な型の決まりはなく、アシビの中で先輩から後輩へ見よう見まねで受け継がれている。」とされる。旧羽地村の田井等、親川でも踊り手に、唐手の「九三九」と呼ばれるものがあったり、古我知や我部祖河でも、一番棒、二番棒など 14 種類の棒型名に「クーサンク」と呼ばれる2人1組の型名があったりする。今日に空手界で呼称される「クーサンクー」[2]は首里・泊手の躍動感があり難度が高い型名として知られるが、空手の型名称が地域の伝統行事の中に組み込まれていることは、首里那覇から地方への文化伝播を考える上で興味深い。

シヌグやウンジャミの中に伝わる武術的身体表現

本島最北端に奥集落では旧盆明け亥の日に行なわれるのが、無病息災と五穀豊穣を神々に祈願するウイミ（折目）行事に、「シヌグ」（3日間）と「ウンジャミ」（2日）が隔年で行なわれる。シヌグ行事は、1日目に「フーヨーサレー」行事、2日目は休みで、3日目に「ビーンクイクイ」とよばれる集落の長老の長寿を祝す行事が行なわれる。その行事の道ジュネーの先導役を務めるのが空手と棒術の演武者である。興味深いのは、戦前から行なわれているというが、王国末期首里の士族が奥に定住したことにより、その子孫が首里の御殿、殿内に奉公していた中で、唐手（ママ）を習得し「国頭カニー」と呼ばれるほどに武芸にすぐれたものとなり、「武士ウンメー」として名を馳せた。その人物の存在によって奥の人々に空手や棒術が伝承されシヌグ行事の中のビーンクイクイの先導役として空手や棒術の所作が入ってきたのでないかと推察される。この事例は王国時代首里、那覇の士族の武芸であった「手」や「唐手」が人々の交流によって地方の伝統的な民俗行事の中に組み込まれたことを意味し、空手や棒術の地方伝播を考える上で興味深い事例と思える。

出演順や構成人員等に因んだ棒術名と多様な棒演武

名護市は旧羽地村、旧屋我地村、旧屋部村、旧名護町、旧久志村が合併してできた。羽地ターブク（水稲田）とよばれ復帰前県内有数の米所であった旧羽地村は豊年祭が盛んにおこなわれ、豊年祭の舞台では踊りや棒、獅子舞が行われた。羽地地区の北側に位置する真喜屋・稲嶺（まじゃがねく）では、綱引きが終わった後に棒がある。ボーカタ（「棒方」）人数 22 名。全員による棒「スーマキ」があり、その後で2人一組による棒「組棒」（15 種）があった。仲尾次では、棒はイズミ（伊豆味）、シーク（瀬底）、ワクガワ（湧川）などから移入してきて、少し型を変え交流の歴史が型の近似を意味するとされる。時代の人口の増減によって変化する姿もみられる。大正時代から昭和初期の棒は“三棒”（2人1組）があった。「三棒」とは、2人1組の3組で行う棒のことを意味した。その後、若者が多くなったことで 1960 年（昭和 35）には“六棒”にしたという。さらに若者が増えたので、三尺棒等を増やし、2005 年当時は“十三棒”になったという。サイとヤリはもともとなかったが、その頃に空手家から習ったとの伝承があり、人口の増加に伴い棒演武の披露演目が増加している。アシャギミャーとハンカジョーミャーに道ズネーを行い「かぎやで風」節にのせて棒演武の奉納があった。

集落社会のみならず、地域連携の姿もみれる。戦前までは「ガッコウボー（学校棒）」もあったという。尋常高等小学校（高等科）の先輩から習い、運動会の時に各区（豊年祭のある区）からの棒が出たという。仲尾次からは六棒が出た。六尺棒、三尺棒、サイとヤリで、区の棒組への参加は高等科を卒業した人から 35 歳ごろまでの男性によって行なわれたという。田井等・親川の豊年祭でも同様で棒方、獅子舞の催事が行われる。棒の出演者は、「ボウカタ（棒方）」と呼ばれ、「田井等・親川の獅子舞の由来」の記録では「・・・

2　第3回沖縄空手アカデミー（2023 年 11 月 30 日開催）の筆者による報告。1939 年（昭和 14）年6月 18 日に大日本武会沖縄支部によって創設された沖縄武徳殿での開殿式の空手道型単独演武で、沖縄を代表する空手家 22 人によって、19 種の空手型が披露された。「公相君」（クーサンクー）のつく型名は3種類（北谷屋良ノ公相君、公相君大、松村ノ公相君大）が披露された。

踊る時間は二十分。踊る手は唐手の九三九と称し、今より百七十年前親川孝一氏の振付けで授したもの[3]とある。振慶名、古我知、我部祖河、呉我でも豊年祭で棒が盛んにおこなわれた。古我知や我部祖河では、一番棒、二番棒、三番棒、上払い、チッタッチャ、イサ棒、二段切り、四方切り、マルヌキ、ウラースグイ、クーサンクの呼称の棒術が二人一組で披露された。古我知では、日露戦争の終結後の不況下で中断された棒であったが、ある老人による神のお告げで、「昔のように踊りや棒を盛んにして、神のおもてなしをしないと、我が古我知は繁栄しませんよ。村中の人が心を合せて気張りなさい。これは神のお告げだよ」との話があり、村ではお告げが話題となり、戸主会（ユレー）を開き踊りの再開を満場一致で賛成決議し、戦前、旧羽地村で一番早く棒が復活した」[4]という。先の大戦で中断したが、戦後松川源傑の計らいと全字民の賛同と協力によって復活、その後ハワイ、アメリカ在住の字出身者から踊り衣装類が贈られ、1947 年からは字民総参加で戦前以上の踊りとなった。1957 ～ 1964 年にかけて、パイン造りが盛んになり、パインの収穫と踊りの時期がかちあったため、毎年の実施を中止し、1965 年からは三年に一回、字を挙げて盛大に行われるようになった、とされる。我部祖河では、ミチジュネーの際に、奉納棒を演武する。スーマキーは二組に分かれて一方ずつ巻きに入る。他方は、巻きの外円を取り巻き、固める。その後、巻いた一方がほどきに入っている間、他方は外円を回る。ほどいたところで、他方が巻きに入る。一方は円を回る。同じくほどいた時点で円を描く。その後、再び一列となり、三人棒に入る。（二組のスーマキの流れが外見では複雑に見え、独特の趣がある。また、大勢による三人棒の演武も勇壮で見所がある。イチバンボウ（一番棒）、ニバンボウ（二番棒）、サンバンボウ（三番棒）、ヨンバンボウ（四番棒）、サンジャクボウ（前方三尺棒、後方六尺棒）、ゴバンボウ（五番棒）、ロクバンボウ（六番棒）、ナナバンボウ（七番棒）、シーボウ（終わり棒）が行われた。呉我ではサンジャクボウ、ナカサンジャクボウ、ハマンタ（六尺のヤリと、ハマンタ（一・五尺程度）と一・五尺程度の棒）、長槍とハマンタと短棒をもった二人の組棒で、ヤリの攻撃をハマンタでかわしながら棒で攻めを繰り返す。ハマンタとは、昔のシンメー鍋等の蓋やバショウなどのような植物で編んだ盾のようなものをいう。また、サイと六尺棒の棒で、棒の攻撃を鉄製サイで自由自在にかわし対抗するものもある。棒術以外の武術が伝わっていることは、テインペーとサイは戦後仲井間憲孝[5]が当時稲田小学校教頭をしており、その指導を受けたことによるものだという。

今帰仁村では今泊、仲泊、仲宗根の旧暦八月の豊年祭で、今泊では 30 ～ 40 組の組棒が勢ぞろいして、集落の中央にある大道で、各組の演技を披露し、「スーマチ（総巻）」とブリボーを行った、と紹介される（『今泊誌』）。

仲宗根区でも 40 名程度によるスーマキ（総巻）にくわえ、「チュイボー（一人棒）」、「タイボー（二人棒）」が行われたが、『仲宗根誌』によると、現在は毎年開催される豊年祭では、5年マール（満4年）で行われ、1925 年（大正 14）までは旧暦の「シチガチオドリ（七月踊り）」であったとされるが、1926 年（昭和元）から旧暦の「ハチガチオドリ（八月踊り）」に変更されたという。8月 13 日が「スクミ（仕込み）」、15 日が（ソーニチ（正日）、17 日（ウワイ（終り）の三日間が開催されたという。銅鑼の調子に合わせて演ずる棒術で、「チュイボー（一人棒）」、「タイボー（二人棒）」などの組棒があった。また専門家が一人で演ずる棒や、大勢でにぎやかな演技もあったと記される。衣裳はジュバンを着け、頭にはサージ（手巾）を巻いてウービ（帯）でたすきをかけ、足にはキャハン（脚絆）を巻き、素足で演技する（『仲宗根誌』）。

名護市数久田には、ケンカ棒とされる激しく打ち合う棒があり、総勢 20 名によるスーマキ（総巻）や2人1組による組棒も多彩である。現在でも毎年の旧暦8月の豊年祭の際には披露される。詳細は第3章で述べることにする。

---

3 『名護市史研究資料第 91 集　芸能調査資料5　羽地地区の芸能・1』 359 － 360p.p.

4 松川源傑『古我知手さぐり記』に紹介される。

5 仲井間憲孝（1911 － 1989）は劉衛流の4代目で、幼少の頃から一子相伝の劉衛流の技を厳しくしこまれ 37 歳で免許皆伝。沖縄師範学校在学中には剣道も学び教士7段の腕前であった。60 歳にして一子相伝門外不出の空手・古武道を公開した（「劉衛流の伝承について」『劉衛流空手・古武道龍鳳会　大城羽地龍鳳館』HP）

首里で修行してきた「ムリーウップー」らによって作られた満名棒と「ゴーリティンペー」と呼ばれる演武

本部町の無形民俗文化財として指定される並里の豊年祭で演武される「満名棒」（三人棒）は有名である。その歴史は、「棒術と満名棒」[6]によると、伊野波集落の「ニーヤー（根屋）」である上原家のあだ名が「ムリー」とよばれる武術に優れたものが、若い頃に首里の松山御殿に務めており、務めのかたわら空手や棒術を修行し、帰郷の際に、宿をとった恩納村冨着の娘と恋仲となり、地元の青年たちに二重三重に囲まれたが、「本部サルーメー」のように六尺以上も飛び上り垣根を越えて難を逃れた話しや、伊野波の幸地の高倉の火事に際して、「ムリーウップー」がきて、倉のチニーブ垣を蹴落とし、稲束を取り出して火災を免れたことが評判になり人々の尊敬を集めたといった具合に、ムリーウップーの英雄伝説がある。彼は武術の修行に熱しすぎたため経済的には困窮したが、明治時代に国有林の払い下げで大嵐原や谷田原の約 20 万坪が備瀬や具志堅の人々によって開墾が許され、その一部をムリーウップーも開墾して谷田原に移り住み、そこで門弟を集め武術指導をしたという。その一人が「亀うんちゅ」であり、さらに玉城興隆に棒術が伝承され、その他にも伊野波の渡久地松太郎、戦前の大見謝医師のその門弟であったとされる。昭和8年頃、沖縄県下にその人の右に出る者はないといわれた仲村政吉が大阪から帰郷し、仲村の洗練された棒術と先祖代々継承されてきた手数と棒術を結合、組み合わせてでき技が満名棒の基本型であり、満名棒の魂とされる。現在の満名棒は、昭和 22 年の豊年祭の時に並里甚四郎が組み合わせてできた三人棒が継承されたものとされるが、その時に五人棒もあったとされる。また、終戦直後まで伝承されていた「ゴーヤー巻」とよばれた巻棒もあったとされ、この巻棒の練習は、上のクラチャーに上っておこなったとされる。その場所は、村人が集まる場所でクージ事（公事）になると、村中から何十人もの人夫が出て大嵐山から杉の大木を切り出し、満名川に流し、そこから上のクラチャーに運び、色々な作業を行なった場所とされる。満名棒の特徴は相手の棒が当る手前で止めることである。さらに、棒術の演目の中で趣向が違う演武に「ゴーリティンベー」があるのが特徴。その起源は不明であるが、「ゴーリ」は棒を受けながら、転ぶことを意味し、ティンベーは、直径 37 ㎝、高さ 11 ㎝の若干の円錐形の動物皮を張り黒い漆を塗った盾で、転びながら相手の攻撃を受けることから「転び」ことゴーリティンベーと呼ばれる。右手に剣、左手ティンベーをもち、棒と組む興味深い演武も今日に伝わる。

著：園原　謙

2　中部地区

沖縄本島中部地域における武術的身体動作を含む演武について、（1）綱引きにおける棒術、（2）棒巻、（3）棒術、（4）南の島、（5）その他の武術的芸能に分けて、地域毎の特徴をまとめてみたい。

（1）綱引きと棒術

沖縄本島中部地域では、幅広い範囲で綱引きが行われている。綱引きに伴って棒術が行われているところも多い。ここではいくつかの地域にしぼって紹介したい。

ア　西原町小波津の綱引きと棒

旧六月綱引き（チナヒチ）、旧七月盆踊り、旧八月十五夜「獅子ヌ御願」、「七年まーる村遊び」（卯年、酉年）に棒を行う。棒のことを棒チカヤーという。綱引きの前に「一人棒」、「ハジリ棒」という組棒を演武する。盆踊りや八月十五夜には一人棒や組棒の演武を行う。毎年旧一月二日ハチウクシーと、旧八月十五夜の日に公民館前庭で青年（棒シンカ）により組棒を披露する。

場所については、綱引きは小波津集落中通りの三本ガジュマル前、盆踊り、獅子ヌ御願、七年まーる村遊びは子初集落センター前広場、獅子ヌ御願の御願は獅子屋で行う。

6　満名棒保存会（1984 設立）会長の高良善助が「棒術と満名棒について」と題して、満名棒の歴史について記している『並里公民館落成記念誌』（並里公民館建設期成会編 1987 年）18－20p.p.

綱引きの目的は、五穀豊穣、地域子孫繁栄、防火のための「火返し（ヒーゲーシ）」である。盆踊りは、昭和 37 年頃にエイサーから盆踊りに変わった。踊りの合間に棒、獅子舞の演舞が披露される。八月十五夜「獅子ヌ御願」は、無病息災、ムラの守護神である獅子に祈願する行事である。「七年まーる村遊び」は、豊年を祈願する行事である。昭和 50 年以来諸般の事情で途絶えていたが、平成 14（2002）年に小波津伝統芸能保存会を結成し、平成 17 年（2005）に村遊びを復活させた。

王府時代には、主に士族や役人が演じていたという。小波津の棒の特徴は「ミーヒチャティ、クシイーチ」といわれ、鋭い眼光で重心を低くした迫力ある演武である。

旧六月綱引きに先立って、一人棒、ハジリ棒　が披露される。盆踊りでは踊りの合間に披露される。八月十五夜では厄払いと五穀豊穣、子孫繁栄を祈願して披露される。

小波津伝統芸能保存会（平成 14 年～）は、小波津在住者および小波津出身者で本会の趣旨に賛同するもの。保存会に、組踊部会、獅子舞棒術部会、三線部会を設置している。出演者はかつて八月十五夜においては棒術組として 14 ～ 24 歳の男子で行っていた（小波津誌より）。日本復帰後は、小学生から壮年まで男子が地域行事に出演している。今は小中学生女子も出演している。

稽古は、かつて八月十五夜アシビの2、3ヶ月前から練習した（小波津誌より）。近年は地域行事等の1、2ヶ月前から練習。コロナ禍前は、毎週木曜日に集落センターで小中高生に指導していた。稽古の場所は復帰後は指導者宅等で練習していたが、小波津集落センター落成（昭和 58 年）により、センターのホールになった。盆踊りの前は、櫓の舞台で練習する。

演武の構成は、ヤイ・ナジナタ（槍・長刀）、エークディー（櫂手）、フーガキ、ウシワカ、チュイボー（一人棒）、タイボー（二人棒）、ミッチャイボー（三人棒）、ユッタイボー（四人棒）、トーディー（唐手）、ティンベー（盾・太刀と槍）、サイ、カマディー（鎌手）などがある。ただし現在、ウシワカ、トーディー、サイ、カマディーは継承されていない。楽器は三線（3～4名）と銅鑼1名、古老による指笛からなる。

イ　浦添市前田　　綱引き　棒使い

豊年祭（綱引きと村芝居）綱引きの後で「棒使い」と呼ばれる棒術を行う。旧六月に綱引き（綱引き後に棒使い、昼間）と村芝居（夕方から夜）が隔年で行われたが、近年村芝居は行われない。旧6月 25 日にムラを東村渠（アガリンダカリ）と西村渠（イリンダカリ）に分かれて東が雄綱（ヲンナ）、西が雌綱（ミンナ）を作って引いた。棒は「棒つかい」と呼ばれる。綱を引き終えたら、その後1時間ばかりの間に、ガーエー、旗頭持ち、棒、空手を順に演武した。戦前は旧8月1日から一日越しに踊りと棒を行った。10 日にメーアシビー（前遊び）、13、15、17 日がショウニチ（正日）という本番、18 日にアトアシビー（後遊び）があった。

戦後途絶えたが、1965 年頃に復活した。浦添市てだこ祭り（1978 年）の一環での朱杖運が原動力となった。戦前は「巻き棒」も「配列棒」も集団演武として棒の花形で見せ所だったが、昭和 52 年あたりから多人数での棒つかいはなくなった。

令和4年はコロナ禍で綱引きは3年連続で中止になったが、7月 23 日（旧6月 25 日）に「綱引きウガン」を集落内 16 ヶ所を自治会三役など数名で回って祈願を行った。上演場所はメーシシモー（公民館の前庭）。戦後の現在の公民館（自治会館）建設前は、段差のある木々が茂る広場だった。

目的は、地域の発展、子孫繁栄、豊作祈願。ウカンヌウトゥイムチ（お神の御取り持ち）である。戦前までは棒術は数え 15 ～ 35 歳までの男子全員で行なっていた。当時は棒使いができないものは男にあらずの風潮があった。現在は 30 代の保存会メンバーが小学生（男女）20 人に定期的に公民館前で指導している。

保存会会員は 15 人程度。指導は会長や数名の青年が行なっている。

演武構成は、20 種類あった。一人棒5種（略）、二人棒4種（略）、三人棒1種、巻き棒（マチボー）、ふぇーい棒（集団棒使い）。現在、保存会では一人棒、二人棒しか伝承していない。

衣装・道具については、空手着上下を使用する。頭には紅白2種類の鉢巻を巻く。マチボーや二人棒で

は赤白のはちまきを巻く。衣装の管理は会員個々が保管する。音楽はドラ鐘、フィーフィーという独特の指笛がある。戦前までは太鼓もあった。

（２） 棒巻

北中城村島袋の棒総巻

期日は決まっていない。村遊びの中で行うので、毎年行われることはない。また大きな行事の時に行う。由来は約二百年前、首里西の平の仲村親雲上が伝えたといわれている。昭和 16（1941）年以来途絶えていたが、昭和 39（1963）年に古老の記憶により復活させた。これまで、昭和3（1928）年昭和天皇即位式、昭和 15（1940）年の紀元 2600 年祭、昭和 24（1949）年龕の仕立て祝い、昭和 53（1978）年第1回北中城村文化まつり、平成 21（2009）年・平成 29（2017）年島袋まつりで行われた。

継承組織としては、島袋民俗芸能保存会を中心に青年会、壮年会が協力して継承している。指導は保存会会員が行い、参加人数は 50 名程度である。島袋民俗芸能保存会は「赤木名節」および「棒総巻」を保存し、その普及と後継者育成を目的とする団体である。

演武は、奇数組、偶数組が一列縦隊になり会場内を二手に分かれて周回する。総巻きとハジリ棒と呼ばれる組み手で構成される。中央付近で交差する時、右側縦に構える棒下方を互いに相手側に出して棒を当て合う。楽器はホラ貝約4名、大太鼓1名、ドラ鐘1名、鉦子約3名が連打する。

（３） 棒術　ここでは綱引きと関わらず棒術が行われる地域について概観する。

ア　嘉手納町野里の野里棒

概略は二人一組で行う「組棒」と「一人棒」があり、六尺棒と三尺棒を用いる。元々は旧八月に行われていた村芝居で演じられていた芸能である。現在は一般財団法人嘉手納町野里共進会により団体が主催している行事のほか、町内外で行われる芸能祭などで披露する。約2ヶ月前から練習を始める。

特徴は一人棒の打ち込む気迫や、組棒の二人が打ち合う姿は真剣勝負そのもので圧巻である。野里出身の男性のみで行う。

由来は首里から野里に住み着いたタルガニーヌメーという人が農業の振興を図る上で若者を部落にひきとどめる必要があると考え、「道イリク」と「棒術」を習ってくるよう命じたのが始まりと言われている。

技の継承については、戦後、戦前に演武を経験していた野里出身者に演舞の仕方や演奏、衣装について聞き取り調査を行い復活させた。一般財団法人嘉手納町野里共進会により 49 組のうち 11 組が継承されている。地謡はボラ2名、ドラ1名、太鼓1名、三線3名で構成される。

イ　うるま市田場

豊年祭（十五夜） その他に旧盆行事（ヒチグワチ）、新年会、夏祭りがある。豊年祭（十五夜）の中で型の演武を行う。テインベーの手　ナギナタの手、エークの手、対面での打ち合いをヌンドゥンチ（祝女殿内）神屋にて行う。由来は、いつ伝わったか定かではない。村の繁栄、豊年、厄災ばらいとして獅子舞と一緒にヌンドゥンチへ奉納される。十五夜祭はおよそ 100 年続いている。コロナ禍の影響で2年間は観客なしで奉納のみ行った。出演者は 20 代前半から 50 代までが務める。

演武としては、露払いで棒の手（独演型、棒対棒）、ティンベーの手（ティンベー対槍）、ナギナタの手（ナギナタ対槍）、エークの手（櫂対トゥザー）、獅子舞の順で構成される。トゥザーとは三叉の銛のこと。棒の手（独演型）はクーサンクーのような演武線になっている。

道具は、2022 年、市の補助（約 80 万円）を受けて新調した。武具の刃の部分は町工場に作成させた金属製である。法被なども手縫いで自作した。

楽器としては金鼓隊（大太鼓、締太鼓、ちょうぐ、三線、銅鑼、ボラ）で構成している。楽曲は多幸山（あっちゃめー小）を用いる。

ウ 読谷村の棒術　座喜味、宇座、波平、長浜、喜名等で行われている。旧7月 16 日（ウークイ）、旧8月 15 日、生年合同祝などで行われるのが地域的特徴である。

（ア） 読谷村座喜味の座喜味棒（ザチミボウ）

演者はボウチカヤーと呼ばれ、棒術の前にスーマチ（棒巻）を行う。棒は型の演武、対面の打ち合い等がある。戦前は旧7月 16 日、8月 15 日、9月9日にアシビが開かれた。現在は9月敬老会、12 月総合共進会で演武披露される。戦前のアシビは二才頭（ニーセーガシラ）が区長に掛け合い、開催許可を得る慣わしだった。開催が決まると、ムスビーといって豚を潰して会食し、練習を始めた。ある程度仕上がるとアシビナーでスーダチグワーと称する公開練習を行い、旧9月末の最後のアシビとなる「別れアシビ」を盛大に催した。

座喜味棒の由来については、500 年の歴史を持つといわれるが、何らかの理由で途絶えた。近代の復活は明治 13 年頃　山城平三氏が 15 才の時に津堅島出身の「つぼやのタンメー」と呼ばれる炭焼き老人から習得したといわれる。

戦前の棒チカヤーは青年（15～25 才）が中心だった。現在は、青年を中心に16～65 才までが構成員となっている。

スーマチは演舞者全員によるスネーで、公民館広場で行われる。メーボー（前棒）とクシボー（後棒）に分かれ、スーマチヌユイアシと称する行進を行う。西に親旗頭、東に子旗頭が立ち、それを中心にブルマチと称して渦を巻く。その後、本番のユイアシ（ゆい合わせ）を経て、棒術が演じられる。鳴物はホラ貝、太鼓（大小）、鉦、指笛を打ち鳴らす。

棒の演武の型は 11 種類ある。棒は六尺棒を基本とし、三尺棒も使用する。県内の守礼堂にて入手している。衣装は以前はクルチナー（黒着物）縄帯を締めて裸足で演じた。現在は紺色系統の上下に読谷花織のウッチャキを着用、ミンサー帯を締めている。

（イ） 読谷村宇座の棒

旧7月 16 日のウークイにはエイサーのつなぎに演武する。青年会が中心となる。またジューグヤー（旧八月十五夜）には組踊、舞踊と組み合わせて演武する。伝統芸能保存会が中心となる。型の演武、対面での打ち合いがある。区内拝所、宇座山内楊姓門中、主ヌ前殿地、公民館中庭の順序で演武してゆく。

由来は宇座誌『残波の里・第一巻』によると、西原間切の豪傑ウチャートーマグラーが読谷山按司家（護佐丸）と親しく、マグラーの棒術が宇座棒の元祖ではないかといわれる。戦前は旧7月 16 日盆踊り、旧8月 15 日観月会の2回アシビを行った。その際、組踊、舞踊などと共に棒術も披露した。戦後途絶えていたのを 1960 年頃から徐々に復活した。旧7月 16 日盆行事、旧8月 15 日観月会も復活した。

宇座区伝統芸能保存会、青年会が運営している。中高生、現役青年会（18～25 才）、30 代が演舞者である。練習は行事の3ヶ月前から週末の稽古が公民館敷地内外で始まる。棒の型は　ヒーボウ、ウシワカ、ウドゥイボウ、クシワイの4種類を2組が順に繰り返す。使用楽器は鳴物　ホラ（貝）、ドラ、大太鼓・締め太鼓である。カリー太鼓は青年たちが務める。楽器演奏は演者が行う。

（ウ） 読谷村波平のハンジャ棒

波平盆行事：旧7月 16 日、八月十五夜アシビ（波平観月会）に演じる。

14 種の組棒（組手）が継承されており、ハンジャ棒、エイサーと組み合わせて演武する。上演場所は、波平東門、アシビナーである。令和2・3年度はコロナ禍で中止したが、令和4年度から盆行事、観月会を開催した。

由来については、約 290 年前、津堅アカナーという若者が波平に奉公し、棒術を伝えたとされる。「津堅手」は2人三尺棒である。行事の中での演舞は、ヤイ棒を先頭に列をなして棒チカイ、エイサー共に東門

に向かい、スーマチ（総巻棒）で旗頭、大畑、小旗を走り回り邪気を払う。

波平区伝統芸能保存会により継承されている。子ども棒術クラブもあり、保存会の青年たちが指導にあたる。演武者は小学1年生～ 35 才までの約 70 名。

棒の型は、ハンジャ棒に 14 種ある。２人三尺棒（3種）、2人六尺棒（3種）、2人三尺六尺（8種）がある。鳴物は勝負鉦、太鼓、鉦　ブラ（ホラ貝）である。

（エ） 読谷村長浜の長浜棒

役員歓迎会、敬老会、生年合同祝にて演武を行う。最近では 2019 年1月に亥年生年合同祝が行われた。

由来は、琉球国時代、御殿勤めをしていた山内ウメーが「赤坂棒」、「山内暗夜」を人々に指導した。明治時代には津堅島から津堅繁多小ウスメーが「津堅棒」、「砂カチ棒」、「カジチリ棒」を伝えた。また浦添から浦添カントーが「浦添小湾ディー」を指導した。

継承組織は、長浜伝統芸能保存会（自治会長が会長）棒術部長がまとめている。男性自治会員であれば誰でも出演が可能である。催し物や出演依頼があれば、2ヶ月前から週2回程度練習を行う。

演武構成は、グーヤー巻（集団演技　左巻円陣→右巻に円陣を解く）、長刀2人「先ふい」、その後 13 組の組棒演技、最後にホラ、鉦、スリー太鼓で終了する。

鳴物は、ドラ、鉦、太鼓、ホラ貝で構成される。

エ　北谷町下勢戸の棒術

生年祝いのカジマヤー（一般的には旧9／7）の他、祝賀行事や出演依頼の際に演武される。下勢頭郷友会では、チンク（金鼓）隊と棒術の呼び方がある。２人一組の組み手（組棒）を複数組が順番に行う。六尺棒を使用する。

棒術は 1971 年に下勢頭で初めてカジマヤーを迎えた方の祝賀行事として行われることになり、読谷村波平のハンジャボーを教わった。指導を受けたのは8名である。元の波平ハンジャボーの由来は、約 290 年前、津堅アカナーという若者が波平に奉公し、棒術を伝えたとされる。また一説として津堅島の棒術は、ペークーガマに隠遁していた津堅親方に唐手と棒術を学んだという伝承がある。

伝承の組織は戦後、字下勢頭会から 1955 年に下勢頭部落会となり、下勢頭郷友会が 1976 年に下勢頭芸能保存会を結成した。出演者は、棒は基本的に青壮年が担当する。子供の場合は型を演武する。練習は現在、本番の2・3ヶ月前から行う。

演武の構成は、カジマヤーの祝賀行列ではチンク隊（ボラ法螺、ソーグ鉦、テーク締太鼓・大太鼓）の次に隊列を組んで行進する。七箇所の十字路で披露する。

楽器はボラ（法螺）、ソーグ（鉦）、テーク（締太鼓・大太鼓）を務める。　演奏者数は流動的である。

オ　北中城村大城・荻堂の旗スガシー

旗スガシーは兄弟棒（チョーデーボー）とも言われる。

荻堂自治会と大城自治会代表による約束組棒（兄弟棒：チョーデーボー）である。演武は旧7月 17 日に行われる。令和4（2022）年度は旗スガシーは中止となり、拝所にウガンを実施した。以前は喧嘩棒と呼ばれるほど真剣に対決し、アザができるほどであった。現在では型と約束棒となっている。

練習は 2010 年頃から、地域の空手家から指導を受けて 10 日間練習する。

演武としては一人棒（個人形）、二人棒（約束組棒）がある。

楽器はドラ鐘と指笛がある。

（4） 南の島（フェーヌシマ）

ア 北谷町北谷のフェーヌシマ

北谷のフェーヌシマは、12 年に1回（寅年）、旧6／ 15 に行われる北谷大綱引きの道ジュネー、スネーの演目として演じられる。棒を振り回したり、打ち合う（棒巻）。空手の型の「手」と「タッチムッチー」がある。その由来は不明であるが、宜野湾間切普天間から伝わったという説がある。1938 年には簡素化した祭りの演目と年の大綱引き復活まではが上演なかった。

1950 年の離村村民の帰村祝いでフェーヌシマが北玉小学校で演じられた。1986 年までは、メンダカリ、クシンダカリの二組に分かれ、雄綱、雌綱の側で演じた。1998 年の大綱引きでは、1組で雌綱の最後尾から雄綱の最後尾に向かい単独でスネーした。

出演者は、戦前は字北谷出身の青壮年（17，8から 30 代前半まで）で、メンダカリ、クシンダカリ各組に鉦打ち1人、12、3人で構成された。戦後は北谷大綱引きでは人員確保が難しく、出身地に関係なく2組に分けた。1998 年には 15 ～ 43 歳までの字北谷出身の男性出会った。鉦打ち2人、演技者 22 人。4人1組で構成した。

演武としては、棒を振り回し打ち合う「棒巻」と、空手の型のような「手」がある。2人組み合わせで回転する「タッチムッチー」があるが、1950 年以後は演じられていない。

イ 北中城村熱田のフェーヌシマ

時期は一定していないが、昔は旧盆の七月遊びと称した十四日と十六日であった。現在では 88 歳の長寿を祝う合同祝いの時や字外から招待される時である。

由来は、昔美里村知花から来た籠作りが教えたという伝承がある。津堅島の棒の型を取り入れて作り上げたと伝えられる。

明治 17（1894）年を最後に途絶えていて、大正 14（1925）年、天皇御代典記念行事を機会に復活した。戦争時は中断していた。

出演者は、二十代前半の冷静な若者を選んだ。

演武としては、踊りは手踊りと棒踊りの二種がある。最初に歌三線に合わせて8人で手踊りを演じ、その後4人一組で棒踊りを演じる。前半は南島歌　ハウー、ハウーと奇声を発しながら出てゴーマチ（輪）を作る。歌に合わせてゆっくりした振りで踊り始める。後半は、エ三エ節に変わると、一の棒、二の棒、三の棒、四の棒の順に連続して棒の打ち合い、跳躍と激しい演技がある。特に三の棒のミーヌジ（目貫き）、カマチワイ（頭割り）、四の棒のチンシワイ（膝割り）などは危険な組み手である。これらを済ませると再びホウ、ホウと奇声を上げながら上手に退場する。

道具は、南島棒（直径5cm、長さ 130cm 堅固な木製）を使う。これは上端に直径6cm ほどの特注鉄の輪を付ける。楽器は、三線1～3丁、鉦鼓打ち1人がいる。

（5） その他の武術的芸能

ア 北中城村島袋の「赤木名節」

琉球国時代から伝わる二才踊りで、1番～4番までの振りは空手の異なる受けの型を取り入れている。演武の機会は1月新年会、9月敬老会、10 月島袋まつり、北中城まつりなどである。由来は、比嘉巌（T 12 年生）によると、首里の踊奉行から各地のシティ（上手な人）たちが習ってきた。

伝承としては、戦後しばらく途絶えていたが、1978 年北中城まつりへの出演をきっかけに復活した。2人1組での演舞から世代交代で踊り手が3名から6名の踊り手になった。島袋民俗芸能保存会（会員 15 人）で継承している。楽器は、地方6名が務める。

イ うるま市与那城

旧1月2日に行われる15歳祝い（ジューグスージ）において、空手の方を真似て各自創作の型を演武する。場所はヌンドゥンチ（ノロ殿内）隣接のノロ御殿前（屋外）である。数え15歳の男子が対象となり、成人と看做す通過儀礼として行われる。各自が空手の方を真似たもの（各自のオリジナルをコーサンクーと呼ぶ）を関係者の前で披露する。ただし空手のクーサンクーではない。2011年から少子化の影響で中断している。伝承組織は、昔は宮城自治会だったが現在は各家庭単位である。上原区、池味区や伊計区でも同様の行事があり、桃原区へも伝わった。

著：久万田　晋

3　南部地区

（1）　はじめに

沖縄島南部については、那覇市、豊見城市、糸満市、八重瀬町、南城市、与那原町、南風原町、久米島町、粟国村、座間味村、渡嘉敷村、渡名喜村、北大東村、南大東村が検討の対象となる。各字に調査を依頼して上がってきた調査票と文献資料、現地調査で得た情報をまとめたものが表2－3－1である[1]）。以下、南部地区における“棒術を含む「武術的身体表現」”について論じるが、全体的な傾向については表1に基づいて、各行事の詳細については、調査票と文献資料、ならびに現地調査の情報に基づいて論じる（本文中、引用が明記されているものは文献資料からの、引用が明記されていないものは調査票ならびに現地調査からの情報である）。ただし文献資料からの引用事例に関しては、現在も変わらずおこなわれているかは不明であることを予めお断りしておく。

（2）　分布の特徴

“棒術を含む「武術的身体表現」”は、沖縄島南部地区全体にほぼ粗密無く広く分布している。その中にあって与那原町でのみ存在が認められないという事実は興味深い。南部地区の離島においては、久米島と粟国島と渡名喜島では確認できる一方、渡嘉敷島、座間味島、北大東島、南大東島では確認できなかった。南・北大東村では、沖縄系の移住者が沖縄相撲（北大東村［北大東村誌編集委員会編　1986：387］）やエイサー（南大東村［南大東村誌編集委員会編　1990：751 ～ 753］）を持ち込み、神社例祭や盆祭りで演じられるようになったが、“棒術を含む「武術的身体表現」”は定着しなかったようである。

（3）　名称

文献中（八重瀬町東風平［知念善栄編　1976：910］、南風原町津嘉山［南風原町史編集委員会編　2003：469］）や一部地域（粟国村字西前バル原）において「棒踊り」という名称が用いられているが、広く見られるのは「ボー（棒）」（八重瀬町富盛・当銘・志多伯・具志頭、南城市津波古［沖縄県教育庁文化課編　1994：］）、「ボーチケー（棒使い）」（糸満市真栄平）、「棒チカエー」（南風原町兼城［南風原町史編纂委員会編　2003：270］）などである。宮古地区のような「棒振り」系・「棒合わせ」系の名称は見られない。

（4）　年中行事との関係

年中行事との関係では、沖縄島南部においては綱引き行事と豊年祭の際に、“棒術を含む「武術的身体表現」”が見られることが多い。

南部地区では旧暦六月のウマチー当日（八重瀬町志多伯その他）やその少し後（豊見城市根差部）、あるいは旧暦六月二十五日のカシチー（豊見城市我那覇［豊見城市市史編纂委員会民俗編専門部会編　2008：100］、糸満市座波［沖縄県教育庁文化課編　2006：283 ～ 285］その他）や旧暦六月二十六日の

アミシ御願（南風原町宮平［南風原町史編集委員会編　2003：165］、那覇市上間［沖縄県教育庁文化課編　2006：226 ～ 228］その他）またその両日（南風原町喜屋武［南風原町史編集委員会編　2003：331 ～ 332］）に綱を引く場合が多く、綱を引く前や後に、棒術や空手などが披露される。糸満市真栄里のように旧暦八月（旧暦八月十六日）に綱引きをおこなうところもある［糸満市史編集委員会編　1991：312］。綱引きの際の棒術は、ガーエー（気勢上げ）の一部としても演じられたようである（豊見城市根差部［豊見城市市史編纂委員会民俗編専門部会編　2008：835 ～ 836］）。

豊年祭（「村遊び」と呼ぶところもある）は旧暦八月十五日に開催されることが最も多く、この日に棒術が披露される場合も多い（那覇市天久［那覇市企画部市史編纂室編　1979：543］、糸満市新垣、八重瀬町東風平・志多伯・富盛、佐敷町佐敷［佐敷町史編集委員会編　1984：426 ～ 427］その他）。豊見城市翁長ではかつて八月十五夜のチチウグヮンの際に綱引きもおこなっていた［豊見城市市史編纂委員会民俗編専門部会編　2008：480］。豊年祭については、六年に一度（卯年・酉年）（豊見城市保栄茂・翁長）や、数年に一度（南風原町喜屋武［南風原町史編集委員会編　2003：356］、南風原町神里［南風原町史編集委員会編　2003：567］）、特別に盛大に開催される場合あり、その際に特別に棒の集団演技をおこなう地域もある（豊見城市保栄茂）。八重瀬町志多伯では、村で大切にされている舞獅子の法要年忌（1、3、7、13、25、33 年翌年から1年忌と繰り返す）の年にあたる旧暦 8 月 15 日、16 日に獅子加那志豊年祭（シーシガナシホウネンサイ）を実施し、多彩な棒術を含む「武術的身体表現」を演武している（八重瀬町志多伯）。

他方、南部地区内の離島に目を向けると、村落の移転記念行事（久米島町具志川）や旧正月の三日・七日・十六日（粟国村字西バル原・草戸原、粟国村棚田原［勝連盛豊　2019：124］）、旧正月二日～三日（渡名喜村［渡名喜村編　1983：508］）など、沖縄島南部の村落とは異なる期日や行事において“棒術を含む「武術的身体表現」”が演じられている点に特徴がある。特に粟国村と渡名喜村では旧正月前後の数日間におこなわれる「マースヤ」（粟国村）「マシュヤー」（渡名喜村）という類似した名称の行事において棒術や空手（唐手）が演じられる点が共通している。

沖縄島南部においても、綱引きや豊年祭以外の期日におこなわれる“棒術を含む「武術的身体表現」”がある。例えば、九月九日の安里八幡宮の例祭で披露されるフェーヌシマ（那覇市安里）、旧暦七月十八日のシーサーウークイという行事に披露される棒術（八重瀬町玻名城）、辰年毎に開催されるガンゴー祭で披露される棒術（豊見城市高安）、卯年毎に開催されるコーヌ祝いで披露される棒術（豊見城市饒波）、年忌の年におこなわれる龕甲祭で披露される棒術（八重瀬町小城・当銘）、旧暦七月十七日のヌーバレー行事で披露される棒術（南城市津波古）、五年毎に開催される奥武島観音堂祭で披露される棒術（南城市奥武）などがある。

（5）　芸能との組み合わせ

“棒術を含む「武術的身体表現」”と芸能との組み合わせでは、南部地区においては獅子舞との組み合わせが目立っている。獅子舞の前後に“棒術を含む「武術的身体表現」”がおこなわれる事例としては、那覇市天久（渦棒、組棒、跳棒、目衝棒その他）［那覇市企画部市史編纂室編　1979:543］、那覇市末吉町（空手や棒）［那覇市企画部市史編纂室編　1979：700 ～ 701］、八重瀬町志多伯（巻棒、舞方、武の舞）、八重瀬町玻名城（棒術）、南城市稲嶺（棒術）［沖縄県教育庁文化課編　2006:258 ～ 259］、南風原町宮平（尺の手、六尺）［南風原町史編集委員会編　2003：200 ～ 201］、南風原町本部（舞方棒）［南風原町史編集委員会編　2003：296 ～ 297］、南風原町神里（舞方棒）［南風原町史編集委員会編　2003：358 ～ 359］がある。また、南風原町宮平［南風原町史編集委員会編　2003：200 ～ 201］や神里［南風原町史編集委員会編　2003：569］の獅子舞、玻名城のワクヤー棒のように、棒を持った者が獅子を誘い出すという動きが演じられる事例もある。

上記の“棒術を含む「武術的身体表現」”の中では、獅子舞の前に座清めとしてかぎやで風節の演奏で演舞される舞方棒が多いことがわかる。または、幕開け演舞や行事の締めの演舞として舞方を演ずる地域もある。

南部地域の舞方棒はすべて六尺棒を持ちかぎやで風節で演じられ、地域ならではの舞方用の歌詞を用いる。歌詞は琉歌形式にあてており、地域によっては演舞する場面によって使い分けるところもある。

そのほか、八重瀬町では琉球音楽（主に歌三線、太鼓、鳴り物）による演奏のもと演武されるものもみられる。また、組踊や芝居の中に登場する戦いの場面などに、棒術や槍など武具が登場するところもある。

（6） 組織

“棒術を含む「武術的身体表現」”の継承ならびに実践については、現在では保存会を組織している場合が多い（糸満市新垣、八重瀬町世名城・東風平・小城・宜次・富盛・当銘・志多伯・安里・玻名城・具志頭、南城市津波古・奥武・大城［沖縄県教育庁文化課編 1994：148 ～ 149］・志喜屋［沖縄県教育庁文化課編 2006：270 ～ 273］、南風原町照屋・神里）。あるいは保存会はないが、武術の部分に専門の師匠がいて、未経験者を含む参加者を指導するという地域もある（豊見城市嘉数・高安、糸満市真栄里）。一方で、保存会や師匠などを通じてではなく、住民の中の経験者が後輩を指導するかたちで“棒術を含む「武術的身体表現」”が継承・実践されている場合もある（糸満市真栄平、南風原町兼城）。

（7） 演武の編成

演武の編成は、地域ごとに伝わる技は基本の構えや型、組棒の構成など様々である。一人で演武する一人棒（チュイボウ・ドゥーチュイボウ）では、佐久川の棍という型名であるが地域によって内容がまったく異なる（八重瀬町友寄・当銘・富盛）。またほとんどの地域が右構え、右打ちが多く見られる中で、左利きを対象にしたと思われるヒジャイ棒（八重瀬町当銘）もある。舞方は一人棒として演舞される。また櫂（エーク）や長刀、クワ、ヌンチャク、鎌など古武道具を使用した一人演武もある。組棒の場合は、2 人 1 組の場合、さらに 3 人 1 組の構成が多く見られる。 盾と槍やサイをティンベーと称し、ティンベー 1 人と六尺棒 1 人によるティンベー対棒（八重瀬町安里・東風平・志多伯）、ティンベー 2 人と六尺棒 1 人の三人棒（八重瀬町小城）や三尺棒または四、五尺棒 2 人と六尺棒または七尺棒 1 人による三人棒（八重瀬町東風平、南風原町津嘉山）、六尺棒 4 人による四人棒や五人棒として演武する地域もある（南城市佐敷津波古）。また、演武の皮切りとして演武される組棒、封斬り（フーチリ）や邪切り（ジャジリ）、最後に演武される末棒（シーボウ）など演武順を示す名称がある（八重瀬町東風平・小城・富盛）。目鼻抜き（ミーハナヌチ）や腹斬り（ワタジリ）、六方斬り、四方斬り、砂掛（シナカチ）など動作から型の名称となっている場合もある。古武道具のサイやトゥンファー、エーク、クワと棒との組棒もみられる。また特に型の名称はなく一番棒、二番棒というように演武する順番で呼称する地域もある（南城市玉城仲村渠）。複数で演じる団体演武を所有する地域も多く、その型を基本型として初心者向けに伝授される場合もある。棒巻きまたは巻棒においては、地域住民が同様の衣装で参加し、隊列を成す集団演武であり 200 名規模で演じる地域もある（豊見城市保栄茂・八重瀬町小城）。一人棒や組棒のように型として習得するものとは異なり、同じ衣装で六尺棒を持った参加者が隊列を成し気勢をあげて渦を巻くように行動する。地域によってさまざまな形態で構成されている。

（8） 演武の場所

現在では公民館前の広場などで演武する場合が多い（豊見城市高安、糸満市新垣・真栄里・座波［沖縄県教育庁文化課編 2006：283 ～ 285］、八重瀬町世名城・友寄・宜次・当銘・玻名城・具志頭、南風原町照屋・兼城）。その次に多いのがウマイー（馬場）である（那覇市識名［沖縄県教育庁文化課編 2006：223］・上間［沖縄県教育庁文化課編 2006:226 ～ 228］、豊見城市保栄茂・根差部・翁長、八重瀬町東風平・小城・志多伯、南城市佐敷［佐敷町史編集委員会編 1984：426 ～ 427］、南風原町喜屋武［南風原町史編集委員会編 2003：357 ～ 358］）。

一方、公民館前の広場やウマイーでの演武に前後して、集落内の拝所を巡拝し奉納演武をおこなっている

ところもある（豊見城市保栄茂［豊見城市市史編纂委員会民俗編専門部会編　2008：520］・高安、糸満市新垣・真栄平・真栄里、八重瀬町富盛・志多伯・安里・玻名城・具志頭、南城市津波古）。この際にどういった拝所を巡拝するかという点に、村ごとや行事ごとの特徴が出ていて興味深い。例えば八重瀬町安里では、八月十五日の綱引きの際に、殿武林という武神を祭っている拝所で棒術の奉納をおこなう［沖縄県教育庁文化課編　2006：70 ～ 71］。また糸満市新垣では、ジャナブシバカという新垣の住民に棒術を教えたと伝わる武士の墓［沖縄県糸満市字新垣棒巻き保存会・沖縄県糸満市字新垣　2008：9］が巡拝の経路に含まれている。八重瀬町玻名城では村落民や村落を守護したカモシカ像を、人間同様に取扱い、旧暦七月十三日のお盆の初日に、カモシカ像の精霊（方言ソーロー）を迎える獅子迎え（方言シーサーウンケー）の行事を行ない、旧暦七月十六日（昭和二十年代までは十七日）に、その精霊を送る獅子送り（方言シーサーウークイ）の行事を、村民総出で行なう［具志頭村史編集委員会編　2005：426 ～ 427］。豊見城市保栄茂・高安・饒波や八重瀬町小城・当銘では龕供養の祭が数年おきにおこなわれるが、その際には龕を納めたガンヤー（龕屋）が拝みの対象になり、その前などで棒術が披露される。

（９）　棒の種類

棒の種類については、樫製や黒木製の六尺棒と三尺棒が最も一般的に用いられている。四尺棒を用いるところもある（八重瀬町富盛・安里、南風原町照屋［南風原町史編集委員会編　2003：420］）。その他には、ヤイ（槍）・ナジナタ（薙刀）（豊見城市高安）、楯と刀（佐敷町屋比久［佐敷町史編集委員会編　1984：429 ～ 430］）、サイ（豊見城市保栄茂［勝連盛豊　2019：76］）、トゥンファー・ヌンティー（八重瀬町志多伯）といった古武道具を用いる場合や、エーク（櫂）・トゥジャ（銛）（南城市奥武［勝連盛豊　2019：89］）、鎌（佐敷町屋比久［佐敷町史編集委員会編　1984：429 ～ 430］）、クワ（八重瀬町志多伯）など日常生活で使用する道具を武具として用いる場合もある。これらの道具をどのように組み合わせて演武するかは、地域によって多様である。上記の道具以外に、鉄輪の付いた四尺棒を用いる事例が 1 つだけある（那覇市安里）。

（10）　まとめ

以上、南部地区における“棒術を含む「武術的身体表現」”について項目ごとに整理した。それを踏まえて、南部地区における“棒術を含む「武術的身体表現」”の特徴を、以下にまとめる。

まず①分布について言えば、沖縄島南部地区の行事等においては比較的粗密無く“棒術を含む「武術的身体表現」”が見られるが、与那原町においては管見の限り見られない。その理由は不明であり、今後の課題である。一方、南部地区の離島において“棒術を含む「武術的身体表現」”が見られるのは、久米島と粟国島と渡名喜島に限られている。

次に②名称については、沖縄島南部地区においては文献や一部地域で「棒踊り」という名称が用いられているが、広く見られるのは「ボー（棒）」「ボーチケー（棒使い）」「棒チカエー」などである。宮古地区のような「棒振り」系・「棒合わせ」系の名称は見られなかった。

③年中行事との関係で言えば、沖縄島南部では綱引き行事と豊年祭の中で見られる場合が多い。他方で南部地区の離島では沖縄島南部のムラとは異なる行事において“棒術を含む「武術的身体表現」”がおこなわれる場合が多く、特に旧正月前後におこなわれる点が共通している。

④“棒術を含む「武術的身体表現」”と芸能との組み合わせでは、南部地区においては獅子舞との組み合わせが目立っている。さらに、獅子舞の前に座清めとしてかぎやで風節の演奏で演舞される舞方棒が多い。組踊や芝居の中に登場する戦いの場面などに棒術や槍など武具が登場するところもある。

⑤組織については、現在では“棒術を含む「武術的身体表現」”の継承ならびに実践のために保存会を組織している場合が多い。

⑥演武の場所は、公民館前の広場やかつてのウマイー（馬場）が多い。その他、拝所を巡拝して各所で“棒

術を含む「武術的身体表現」”を演じる場合も多く、その際にどこをなぜ拝むかという点に、村ごとや行事ごとの特徴が色濃く出ている。

最後に⑦棒の種類についてであるが、最も普遍的に用いられているのは樫製や黒木製の六尺棒と三尺棒である。それ以外に古武道具を用いる場合や、日常生活で使用する道具を武具として用いる場合がある。これらの道具をどのように組み合わせて演武するかは、地域によって多様である。

註

1）文献については、市町村史誌レベルまでをサーベイの範囲とし、時間的制約の都合上、字史誌レベルは除外したことを付言しておく。

表2-3-1　南部地区における“棒術を含む「武術的身体表現」”一覧

市町村名	NO.	字名(小字名)	行事名等	“棒術を含む「武術的身体表現」”の内容
那覇市	2	安里	安里八幡宮例祭・安里金満宮例祭	フェーヌシマ
		天久	村遊び	棒術[型]、棒術[組棒]、巻棒
		宇栄原	綱引き	棒術、空手
		上間	綱引き	棒術[組棒]
		末吉町	十五夜の獅子舞	棒術、空手
		識名	綱引き	棒術、空手
豊見城市	3	嘉数	嘉数の棒	棒術[組棒]
	4	保栄茂	豊年祭	棒術[組棒]、巻棒
	5	高安	綱曳き・ガンゴー祭	棒術[型]、棒術[組棒]、空手
	7	根差部	綱曳き	棒術、空手
	8	饒波	コーヌ祝い	棒術、空手
	9	翁長	豊年祭	巻棒
		我那覇	綱引き	シタク上での棒術
糸満市	10	新垣	豊年祭	棒術(型)、棒術[組棒]、巻棒
	11	真栄平	豊年祭	棒術[型]、棒術[組棒]
	12	真栄里	綱曳き	棒術[型]、棒術[組棒]、巻棒、フェーヌシマ
		座波	綱引き	棒術
八重瀬町	14	世名城	豊年祭・綱曳き	棒術[型]、棒術[組棒]、巻棒、舞方棒
	15	東風平	豊年祭	棒術[型]、棒術[組棒]、舞方棒
	16	小城	龕甲祭・綱曳き	棒術[型]、棒術[組棒]、巻棒、舞方棒
	17	友寄	豊年祭	棒術[型]、棒術[組棒]
	18	宜次	綱曳き・敬老会・夏祭り	棒術[型]
	19	富盛	豊年祭・綱曳き	棒術[型]、棒術[組棒]、巻棒
	20	当銘	龕甲祭・綱曳き・夏祭り・初興し	棒術[型]、棒術[組棒]
	21	志多伯	豊年祭・綱曳き・敬老会	棒術[型]、棒術[組棒]、舞方棒
	22	安里	豊年祭・綱曳き・殿武林奉納演武	棒術[型]
	23	玻名城	豊年祭・シーサーウークイ	棒術[型]、獅子に対峙しての棒
	24	具志頭	綱曳き	棒術[組棒]、舞方棒
南城市	25	津波古	盆行事(ヌーバレー)	棒術[組棒]、巻棒、舞方棒
	26	奥武	観音堂祭	棒術[型]、棒術[組棒]、舞方棒
		平良	綱引き	棒術、空手
		目取真	綱引き	棒術、空手
		稲嶺	綱引き	棒術
		古堅	芭蕉競い	棒術[型]、棒術[組棒]
		大城	不定期	棒術[型]、棒術[組棒]
		志喜屋	綱引き	棒術[型]、棒術[組棒]
		手登根	不詳	舞方棒
		佐敷	八月十五日	棒術[型]、棒術[組棒]、巻棒
		伊原	不詳	棒術[型]、棒術[組棒]
		屋比久	八月十五夜、ヌーバレー	棒術[組棒]
		前川	不詳	巻棒
		仲村渠	綱引き	棒術[型]、巻棒

黒字：悉皆調査票からの情報　青字：現地調査による情報　赤字：文献からの情報

市町村名	NO.	字名(小字名)	行事名等	“棒術を含む「武術的身体表現」”の内容
南風原町	27	照屋	豊年祭	舞方棒
	28	兼城	敬老会・新年会	舞方棒
南風原町	29	神里	十五夜遊び(敬老会)	舞方棒
		津嘉山	大遊び、十五夜、村あしび、綱曳き	
		与那覇	綱引き	棒術[組棒]、巻棒
		宮城	不詳	舞方棒
		宮平	綱引き	舞方棒、獅子舞での棒
		本部	大遊び	舞方棒
		喜屋武	綱引き、大遊び	舞方棒、巻棒
久米島町	30	具志川	字移転記念日	棒術[型]、棒術[組棒]、巻棒
粟国村	31	西(前バル原)	旧正月(マースヤ行事)	棒術[型]、棒術[組棒]
	32	西(草戸原)	旧正月(マースヤ行事)	棒術[型]、棒術[組棒]
		端田原	旧正月の三日、七日、十六日	棒術
渡名喜村		西区・東区・南区	旧正月二日～三日のマシュヤー	棒術、唐手

黒字：悉皆調査票からの情報　青字：現地調査による情報　赤字：文献からの情報

著：神谷　智昭 ／ 神谷　武史

4　宮古地区

図2-3-1　宮古諸島における棒術の伝承地（地理院地図 https://maps.gsi.go.jp を加工）

宮古諸島は、沖縄島から南西約 300 kmに位置する宮古島を中心に、伊良部島、下地島、来間島、池間島、大神島、多良間島、水納島などの島々により構成される。地方自治体としては、宮古島市（2005 年に平良市・宮古郡伊良部町・上野村・城辺町・下地町が合併した）と宮古郡多良間村が該当する。このうち今回の調査対象である棒術を伝承する地域は、図2- 3- 1に示すとおり、宮古島に3か所、来間島に1か所、多良間島に2か所の計6か所である。これを行政上の地区あるいは自治会単位でみると、①宮古島市新里（旧上野村新里）、②宮古島市野原（旧上野村野原）、③宮古島市川満（旧下地町川満）、④宮古島市来間（来間島、旧下地町来間）、⑤多良間村仲筋、⑥多良間村塩川の6地区となる。なおここで用いる資料は、新里・野原・来間・仲筋・塩川については本事業の現地調査票による。また川満については、『宮古島市の文化財』[宮古島市教育委員会編、2007、121] による。以下、宮古諸島における棒術の伝承内容をめぐり、特徴と思われるいくつかの項目について述べる。

（1） 分布

宮古諸島における棒術の伝承地は上述のとおり 6 か所であり、沖縄県内の他地域に較べて伝承地の数が少ない。また伝承地の分布については、宮古島の南西部（新里・野原・川満・来間）と多良間島（仲筋・塩川）の2地域に集中しており、分布上は二つのグループが存在するようにみえる。宮古島南西部の伝承地は、隣接する旧上野村（新里・野原）と旧下地村（川満・来間）の一帯に集まっているため、宮古島への棒術の伝来はこの地域のいずれかの地区であったことが推測されるが、各地区における伝播の有無については不明である。また多良間島（仲筋・塩川）の場合も同様で、棒術が何処から伝わったのかについては不明である。

（2） 名称

棒術に対する地域ごとの名称（地方名称）については、新里では「ボーフイ゜」（゜印は中舌母音を表す）、野原では「棒振り」、川満では「ぼう・っふ」[宮古島市教育委員会編、2007、121]、来間では「ボーフイ゜」、また仲筋では「ボーアース」、塩川では「ボーアース」という名称が聞かれた。このうち「ボーフイ゜」は「棒振り」の意味、「ボーアース」は「棒合わせ」の意味であろう。このように宮古諸島では、棒術の地方名称として「棒振り」系と「棒合わせ」系の2種類があり。宮古島南西部（新里・野原・川満・来間）は「棒振り」系、多良間島（仲筋・塩川）は「棒合わせ」系の名称で呼ばれている。

（3） 年中行事との関係

棒術は、新里では旧暦6月（日を撰ぶ）の「豊年祭」、野原では旧暦8月 15 日の「マストゥリャー」、来間では旧暦 9 月（8 月の場合もある）の初辰日から未日までの四日間かけて行われる「ヤーマスィ゜ウガン」の最終日、仲筋では旧暦 8 月 8 日の「豊年祭」、塩川では翌 9 日の「豊年祭」において行われる。いずれも各地区の重要な年中行事であり、行事内容の一部に棒術が組み込まれている。いずれも夏期の 6 月から 9 月頃の間に行われる年中行事であり、このうち新里・仲筋・塩川の事例は地区の「豊年祭」である。また野原の「マストゥリャー」は、王府時代において貢租の完納を祝ったことに由来する行事とされ、内容的に「豊年祭」に類する行事である。

（4） 芸能との組み合わせ

宮古諸島の棒術は、単独で行うよりも、他の芸能と共に行われる場合が多い。新里では、獅子舞い・棒術・女性集団による踊り・男性集団による踊りの順で披露し、最後に男女一緒に円陣をつくりクイチャーを踊る。野原では、男性の棒踊りと女性集団による踊りの順で円陣を形成し、最後に男女一緒にクイチャーを踊る。来間では、神女によるジャービラキ（座開き）の踊りから始まり、女性集団による踊り・棒術の順で行う。これら宮古島西南部の事例は、男性の棒術と女性集団の踊りがセットになっている点、および最後に男女によるクイチャーで終了する点に特徴がみられる。一方多良間島の仲筋・塩川の場合は、それぞれ丸 1 日かけて各種の芸能（狂言や組踊りなど）を上演するが、その最初の演目である「総引」（演者の披露）の締めくくりの部分で棒術を行う。

（5） 組織

棒術は青年男性が担当する。県内の他地域と同様に、地区（村落）単位で組織される例が多い。新里では、新里青年会および新里出身者らが棒術を担当している。多良間島の仲筋・塩川の場合も地区の青年が担当する。これに対し、地区（村落）単位とは異なる事例もある。野原の場合、地区内にマスムトゥ（かつて王府時代に貢租を集めていたとされる屋敷のこと）が 4 か所あり、これを中心としてそれぞれクミ（組）とよばれる地縁組織が形成されている。棒術はこのクミ単位で組織される。また来間の場合は、地区内に 3 つのブナカとよばれる一種の帰属集団（3 つのブナカにはそれぞれ宗家があり、神話上は長男・次男・三男の関係にあるとされる）があり、棒術はブナカ単位で組織される。このように宮古諸島では、地区単位だけでなく、クミ（マスムトゥ）やブナカなどの集団によって棒術が組織される例がみられる点が特徴的である。

（6） 演武の編成

棒術を行う人数は、地区ごとに決まりがある。新里では 10 名編成で行う。このうちナカボー（中棒）役 2 名が含まれる。演武では、10 名揃って同じ動きをする形、5 名（中棒 1 名）・5 名（中棒 1 名）に分かれてそれぞれ打ち合う形、前から 2 名・5 名（中棒 1 名）・3 名（中棒 1 名）に分かれて打ち合う形などに変形しながら進む。野原では、組ごとに 5 名（中棒 1 名）編成で行う。5 名 1 組の形、前 3 名（中棒 1 名）・後ろ 2 名に分かれる形、前 2 名・後ろ 3 名（中棒 1 名）に分かれる形などに変形しながら進む。川満では、かつて 2 人棒・3 人棒 5 人棒・10 人棒があったと伝えられるが、現在は 2 人棒と 5 人棒が継承されている [宮古島市教育委員会編、2007、121]。来間ではブナカごとに 15 名編成で棒術を披露する。これら宮古島南西部の事例は大人数で隊列を組む形が共通している。これに対して多良間島の仲筋・塩川の場合は、2 人 1 組で打ち合う形である。

（7） 演武の場所

棒術を行う場所について、新里は御嶽およびウプジャー（大座の意か）と呼ばれる道路で行った。現在は

御嶽前および公民館前の公園内で行う。野原は各マスムトゥ前の路上（辻）およびブンミャー（現公民館）前の広場で行う。来間は地区内の路上（辻）およびアマグイジャー（雨乞い座）で行う。これら宮古島南西部の事例では路上、特にジャー（座）とよばれる空間で演武をする。これに対して多良間島（仲筋・塩川）の場合は、ともに地区の御嶽内に設営された舞台上で演武をする。

（８） 棒の種類

使用する棒については、その長さに特徴がみられる。県内の棒術では、三尺棒などの短い棒や六尺棒などの長い棒が使用される。新里では短い棒（径3㎝、長さ 57 ㎝）を使用し、特にナカボー役はさらに短いもの（径 3 ㎝、長さ 44 ㎝）を使用する。ナカボー役の場合、顔の前で棒を回す所作があり、怪我を避けるために少し短い棒を使用するという。野原では短い棒（未計測・三尺棒）を使用する。来間では短い棒（径 4 ㎝、長さ 80 ㎝）を使用する。これら宮古島南西部（新里・野原・来間）では三尺棒などの短い棒を使用する点が特徴である。これに対し多良間島（仲筋・塩川）では、共に長い棒（未計測・六尺棒か）を使用して打ち合う。

小括

以上、宮古諸島における棒術の全体的な特徴として、①県内の他地域と較べて伝承地の数が少なく、かつ分布地域に偏りがみられること、②地域名称に「棒振り」系と「棒合わせ」系の2種類があること、③年中行事、特に豊年祭において棒術を行う例が多いこと、④宮古島南西部一帯では棒術と女性の踊りがセットで行われ、最後にクイチャーを踊る例がみられること、⑤棒術の組織にマスムトゥやブナカなど特徴的な事例がみられること、⑥演武の編成において、宮古島南西部では多人数で隊列を組む形、多良間島では2人1組の形をとること、⑦演武の場所については、宮古島南西部では路上や広場、多良間島では御嶽に設営した舞台であること、⑧使用する棒には短い棒と長い棒の2種類があり、特に宮古島南西部一帯では三尺前後の短い棒を使用すること、等があげられる。このように、宮古諸島の棒術には、宮古島南西部一帯（新里・野原・川満・来間）と多良間島（仲筋・塩川）という、内容が異なる2つの系統がみられるが、いずれもその由来や伝播については不明であり、今後の課題といえる。

著：萩原　左人

５　八重山地区

（１）村落行事との関わり

八重山諸島の祭事や民俗芸能は多種多様で、島毎の由来・来歴と歴史的な変遷も加わりながら様々な特徴がみられる地域である。

八重山地区については石垣市、竹富町、与那国町が対象となる市町である。石垣市は字や行政区としては全部で 27 となるが、歴史的に新しく成立したところや新興の市街地もあるため、実質的には登野城、大川、石垣、新川、美崎町、新栄町、名蔵、崎枝、川平、桴海、平得、真栄里、大浜、宮良、白保、桃里、伊原間、平久保、野底などの 19 字である。また、竹富町は竹富、黒島、小浜、新城、上原、南風見、南風見仲、西表、古見、高那、崎山、鳩間、波照間の 13 字で、与那国町は与那国の 1 字となる。ただし、行政区の字と実質的な人々の活動単位となる村落が一致していない場合もある。竹富町は、かつて竹富、黒島、新城、小浜、鳩間、西表、波照間の 7 カ字が行政区であった時代もあるが、現在は 13 カ字である。字西表は小字の村落としては祖納、干立、白浜、船浮を含んでいる。

これらの中において、いわゆるムラ（村落）において、武術的身体表現にかかるような棒術等が披露される行事として調査票があがってきたのは、石垣市は登野城、石垣、平得、新川、真栄里、大浜、宮良、白保、川平の 9 村落、竹富町は竹富、黒島、小浜、西表島の祖納・干立・船浮・古見、鳩間、波照間の 9 村落で、与那国町は行政区の字としては与那国の一字であるが、ムラとしては祖納の東村・西村・嶋仲の 3 小字と比川の 4 村落で、全体は合計 22 村落である。

表２－３－２は、調査票に基づく該当字名（村落）と対象行事名をまとめたものである。同一村落において複数の行事において、棒術等が披露されるケースも多いので、演武の機会は比較的多いといえよう。

この一覧をみてわかるように、八重山地区においては、豊年祭や結願祭、節祭といった祭事において、武術的身体表現をともなう棒術等が多く披露されていることが指摘できる。それらの中にも、豊年祭と結願祭、豊年祭と節祭、豊年祭と十五夜祭など二回演ずる組み合わせや、これらに追加して三回演ずる場合がある一方、豊年祭、結願祭、節祭、盆行事の単独で行われるものもある。

その他に行事自体で注目されるものとして、波照間島のムシャーマ、大浜の盆行事後にあるイタシキバル、十五夜があり、なかには八重山では特異な事例として黒島では旧正月の綱引きで披露されていることが注目される。

とくに波照間島のムシャーマは、旧暦 7 月のソーリン（精霊祭・盆祭）の祖先祭祀行事においてみられるが、このムシャーマはその昔、豊年祈願をするプーリンのエンヌユーニゲー（来年の豊作祈願行事）の仮装行列としてあったものが、プーリンに行われていた綱引きにともなう双方の喧嘩沙汰にともない、綱引きは廃止され、プーリンは御嶽での豊作を祈願する神行事が中心となり、仮装行列はソーリンの行事の中に組み入れられ合併された経緯がある。したがって、ソーリン中のムシャーマは豊作祈願と祖先供養を総合した芸能の祭りとなったものといえよう。

他地域と異なり、十五夜で棒術が披露されるのは白保である。波照間島との歴史的関係性をもつ白保では、豊年祭では仮装行列はおこなわれず、十五夜において行われるという点は、波照間島では上述したように、豊年祭での仮装行列がなく、旧盆にムシャーマとして仮装行列が行われていることとは、祭事の成り立ちに両者の関係性を読みとることができそうである。

表2－3－2　調査票に基づく該当字名（村落）と対象行事名

市町名	NO.	字名（小字名）	行事名等	採録事例	文化財指定
石垣市	1	登野城	豊年祭・結願祭	＊	市指定・南ヌ島カンター棒
	2	新川	豊年祭・不定期の祭事	＊	
	3	石垣	豊年祭・結願祭・牛ヌ願	＊	
	4	大浜	豊年祭・イタシキバル・共進会		
	5	平得	結願祭		
	6	真栄里	盆行事・民俗芸能イベント		
	7	宮良	結願祭・民俗芸能イベント		
	8	白保	十五夜		
	9	川平	結願祭・節祭	＊	
竹富町	10	竹富	種子取祭・十五夜祭	＊	国指定・種子取祭
	11	古見	結願祭		
	12	西表（祖納）	節　祭	＊	国指定・節　祭
	13	西表（干立）	節　祭	＊	国指定・節　祭
	14	西表（船浮）	節祭		
	15	黒島	豊年祭・結願祭・旧正月		
	16	小浜	結願祭		
	17	鳩間	豊年祭		
	18	波照間	ムシャーマ（豊年祭・旧 7 月 14 日）	＊	国指定・ムシャーマ
与那国町	19	与那国（東村）	豊年祭他の祭事	＊	国指定・祭事の芸能
	20	与那国（西村）	豊年祭他の祭事	＊	同上
	21	与那国（嶋仲）	豊年祭他の祭事	＊	同上
	22	与那国（比川）	豊年祭他の祭事	＊	同上

［注］＊印と文字囲は第3章で取り上げた行事。文化財指定については国指定は祭事全体が指定対象となっている。

（2）分布の特徴

八重山地区における棒術等の分布について触れておきたい。石垣市については市の中心である石垣四箇の登野城、新川、石垣、大浜をはじめ、市街地に含まれる平得と真栄里にもみられる。市街地からは離れるが宮良、白保、そして川平の各地域において事例を確認することができる。基本的には石垣島の南側の沿岸部に分布は集中しており、開拓集落が多い島の北側には棒術等の事例を確認することができなかった。

一方、多くの島々からなる竹富町では、竹富島の竹富、黒島、小浜島、西表島の祖納・干立、船浮、古見、鳩間島、波照間島の 8 地区で確認できる。

さらに与那国島では行政区の字としては字与那国で村落としてひとまとまりになるが、小字にあたる集落としては祖納と久部良、比川の 3 つに分かれる。しかしながら、豊年祭などの伝統的祭事では、小字の集落とは関わらず、東棒座（東一組、東二組）・あんか゜いむら（東村）、嶋仲棒座（西五組）・ンマナガ（嶋仲）、比川棒座（比川地域）比川村（ンディムラ）に分かれて、芸能保存会として機能している。そのような意味では、通常の区域割りとは異なる仕組みで、独特な芸能組織を作り上げている。

芸能全体を支える組織は、あんか゜いむら（東村）の東区、イリマイ（西村）の西区、ンマナガ（嶋仲）

の島仲区、ンディムラ（比川村）の比川区に分かれる。また、本稿に関係する棒術については、東村には東棒座があり、東一組と東二組の二つで構成され、西村には西棒座があり、西一組、西二組、西三組の三つで構成され、島仲には嶋仲棒座（西五組）、さらに比川は比川棒座となっており、全体では 4 つの棒座で構成されている。

以上みてきたように、八重山諸島においては、基本的に新城島を除く有人島の各島々にはこうした棒術などが広く分布していることが確認できる。

（3） 棒術等の武術的身体表現の特徴

ここでは棒術等の武術的身体表現の特徴について、名称、由来・伝来、上演の場所、伝承組織、芸能との組み合わせ、武術的身体表現の種類に分けて、概観しておきたい。

ア 名称

名称としては、武術的身体表現にかかるものではやはり「棒術」に関連するものが圧倒的に多い。石垣島の新川・登野城・石垣、川平、竹富島や西表島、波照間島などでも、一般に棒は「ボウ」とか「ボー」と呼称されている。波照間島でも「ボー」と呼ばれ、「棒打ち」とも称されている。与那国島では棒は方言で「ブ」と呼ばれているが、演目プログラムでは「棒踊」として表記されている。いずれにしても、基本的には「棒」を元にした名称が定着しているといえる。

ボー（棒）のことを「棒芸」という名称で記述されることもある。棒芸は八重山各地で豊年祭やお盆などの各種の行事で様々に演じられている。これを大別して棒術として武芸的要素をもつ「マーボー（真棒）」と、石垣市新川にみられるような、武芸として舞踊的要素をもつ「パイヌシマボー（南之島棒）」に分類されるとの見方もある。波照間島の棒は武芸的要素と舞踊的要素を兼ね備えてたもので、与那国島の「マーヌムヌ棒」も両要素を盛っているといわれる。〔波照間民俗芸能保存会：1982 年、P69〕

「棒術」に地域の名称を付して呼ぶ場合もある。登野城の棒は「トウヌスクボウ（登野城棒）」、宮良の棒は「メーラボウ（宮良棒）」と呼称される用法である。また、棒術の演武に特色があるものについては、例えば新川の棒術は「新川南風ぬ島（ハイヌスマ）カンターボウ（棒）」と称されている。なお、竹富町西表島の古見では旧暦八月に行うキチガン（結願祭）で奉納する棒については「棒打」という名称が使用されている。字真栄里では全員が大広場で同時にやる棒を「集団棒つかい」とも呼んでいる。

空手の所作を取り入れたものとして竹富島の種子取祭で演じられる女性たちによる「腕棒」がある。この腕棒は「ウディボー」と呼ばれており、竹富島特有の武芸である。

イ 由来・伝来

次に由来や伝来についての伝承をみておきたい。字新川では、棒術の新川南風ぬ島（ハイヌスマ）カンター棒が伝承されている。由来としては、昔、漂流民から唐眞家に棒踊りが伝わり、南風ぬ島カンター棒として唐眞家の家宝として伝承されていた。1757 年に新川村が創建されたのを機に、新川村の宝として後世に伝えていくこととなったとされる。

波照間島には「シィーシンボー（獅子の舞）」という五尺棒を持って、三組の獅子舞との演舞が行われる演目がある。これの伝来の年来は不明であるが、伝承によると昔、南方諸島からの漂流民が波照間島と新川ムラに伝えたとされ、波照間島では「シィーシンボー（獅子の舞）」、新川ムラでは「ハイヌシマ（南風ぬ島）棒」と称されたという。波照間島のシィーシンボーは新川のそれと共通するところが多かったといわれるが、その演技が複雑で伝授に困難があったので、簡略化されて現在のように踊られているとされる。

字登野城の棒術がいつ始まったかの口碑はないとされるが、明治期以降は名声のある「トゥヌスクボウ（登野城棒）」の名手がいたことがわかっている。棒は当初、六尺棒だけであったとされ、次第に三尺棒（尺棒）

と呼ばれる短い棒、刀、なぎなた、槍、鎌などが加えられ、後さらに沖縄から中国由来のサイ他も入ってきたという。演目の種類によって、例えばナギナタやカタナなどを使用する組手は、他村（字）の棒術演武を参考にその当時の師匠等が創作したと伝わっている。〔牧野、1975 年　p144 ～ 148〕

字川平の棒術は、約 500 年前、川平村に仲間満慶山という人物が生まれ、武術の優れた青年となった。満慶山は毎日棒術、剣術、弓術を考案し、自己流で攻防戦の稽古に余念がなく、村の若者達が指導乞うて始まったと伝えられている。

西表島の古見では旧暦八月に行う結願祭で奉納する「棒打」（一番棒～五番棒）があるが、石垣島の川平地区からの伝承だとされる。また、小浜島・小浜の結願祭では、棒の演武や対面での打ち合い等があるが、ここも石垣島の川平地区からの伝承だとされる。

石垣島の宮良棒は、廃藩置県以降に、沖縄本島から来た空手家によって、隣村の白保村と宮良村に「棒術」が伝授されたことが始まりだという古老の伝承がある。伝授された棒術は、個人の技術、道場所有的なものと位置づけされ、行事の際に師匠が村行事に協力する形で村の若者たちによって演舞集団が構成された。

一方、白保の白保棒は、勝連出身の佐久間某から「カッチン棒」を伝授されたものという。そのため、1999 年には白保棒術保存会が、ゆかりの地である勝連城跡において十通りの組棒を奉納したことがあった。〔勝連：2019 年、p127〕

宮良の伝承にある沖縄本島から来た空手家と、白保に伝わる勝連出身の佐久間某が同一人物なのかはつまびらかではないが、沖縄本島からの伝来で広まったことは確認でき、伝授されたのが廃藩置県以降という時代が特定される点は貴重な伝承である。

黒島では、芝居の中で武術的所作が演じられる、その他獅子に関する表現では、獅子の棒（東筋部落）がある。黒島にもともと空手はないため、島の外部から「村芝居」（芸能団）が来て、もともとあった黒島の舞踊と混ざったのではと語られる。また、鳩間島でも豊年祭のプールで棒術が演じられるが、そのルーツや伝来に関する有力な伝承はなく不明であるという。

与那国島の棒術は、およそ 320 年以上の歴史を持つといわれる。乾隆年間末期の西暦 1700 年頃、首里出身の棒術者、幸地氏が与那国島に漂着し、島の娘と結婚した。8 名の子のうち 7 名の男子は怪童であまりにも激しい気性と怪力の持ち主たちだったため、彼は棒術の伝授の後の危険性を恐れ、ひとり娘にひそかに棒術を伝授した。娘が年頃になり、東迎家の先祖にあたる満名と結婚する際に、棒踊道具一式を持たせてやった。娘はその道具を用いて自分の息子 4 人に棒術を教えたのが始まりとされる。その棒踊道具は、東迎家で老朽するまで永らく伝えられていた。また一説には幸地氏が東迎家の孫に伝授したのが、始まりであるともいわれる。

このように由来・来歴が伝承として明確に伝わっているところもあるが、すべて島々の系統を明らかにできる状況にはない。川平村の伝承にみられる「約 500 年前」の根拠を示すものは確認されていないが、川平湾に停泊したマーラン船の船員から棒を修得したとか、与那国島のアーサという人物が寄留した際に「三人棒」を習った、さらには沖縄本島の佐久川という人物が六尺棒を教えて「佐久川棒」と呼び、同じく沖縄の真境名スーグヮ（小柄の人）が棒を教えたので「真境名棒」と呼んだなど、様々な由来・経緯を持ちながら川平の棒術が形成されたことがうかがえる。〔川平村の歴史編纂委員会：1976 年、p319 ～ 320〕

西表島の古見や小浜島は石垣島の川平から伝わったという伝来ルートが確認できる点は重要である。また、宮良や白保の例のように沖縄本島からの空手家からの伝授とか、与那国島では漂着した首里の人物から棒術が伝わったとされる点は島への伝来のあり方として注目される点である。また、字新川の南風ぬ島カンター棒や波照間島のシィーシンボーのように、南方からの漂流民により伝授されたという棒による演舞もある。一方、石垣島の登野城の棒は明治期以降の棒術の名手は確認できるものの、それ以前についての口碑は残されていないとか、黒島や鳩間島のようにどこからの伝来かなどはっきりしないところもあり、由来伝承に関する今後の課題は多く残されている。

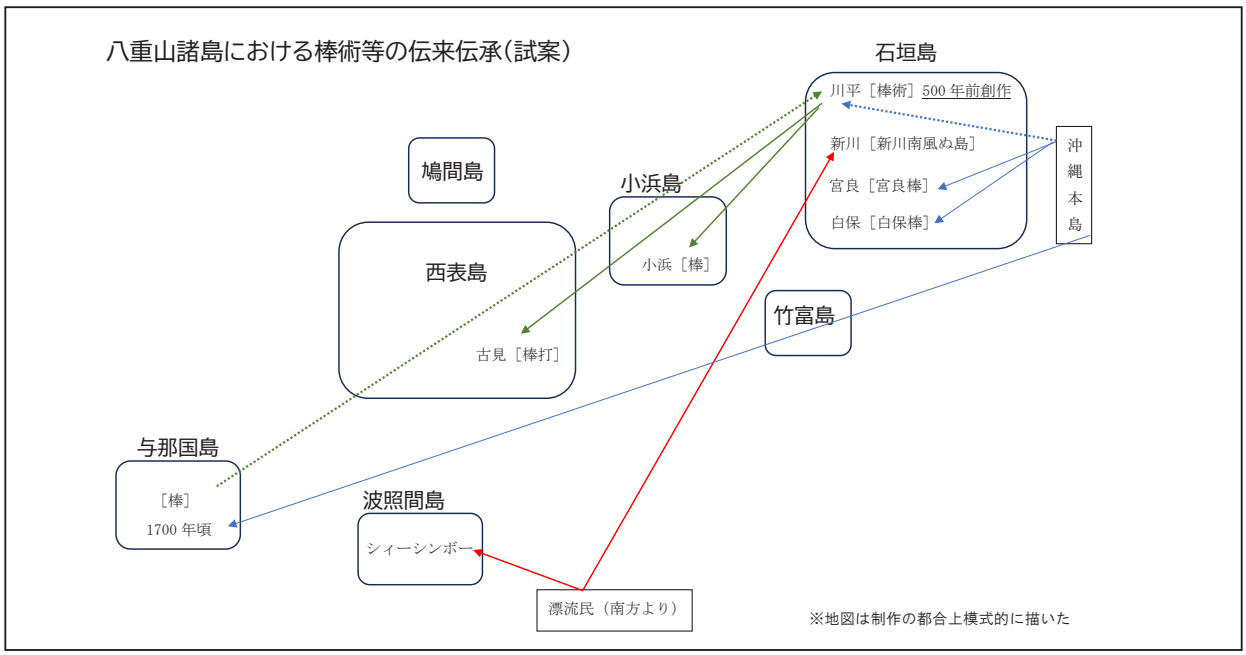


図2-3-2　八重山地区における棒術等の伝承に基づく伝来ルート

ウ　上演の場所

豊年祭や結願祭などでの棒術等の演武は、御嶽のカミ（神）への奉納芸能としての意味合いや祭事の初めの祓い清めがある。したがって、上演の場所はほとんどが御嶽の境内や近くの広場・砂浜などである。

石垣市新川・登野城・石垣では、登野城の開催場所は豊年祭・結願祭とも天川御嶽（アーマーオン）である。天川御嶽境内において奉納演武として棒術演武を行う。字石垣の行事では宮鳥御嶽への豊作の願い

川平では群星御嶽で棒術が奉納される。奉納芸能には「庭の芸能」と「舞台の芸能」がある。「庭の芸能」では狂言、舞踊などを紹介するスーブドゥリ（総踊り）、祓いの意味で太鼓、棒、獅子舞の座見舞、本舞がある。〔沖縄県教育委員会：1979 年、P15〕

竹富島では種子取祭は世持御嶽（ユームチオン）で執り行われ、十五夜祭（ジングヤ）は以前は各集落の指定場所で行われていたが、電線やその他の障害の為、旗頭の移動が困難なため、学校の校庭で行われた。種子取祭では「庭の芸能」で行列と言われる演目があり、最初が棒（ボー）であり、祓い清め意味があり、対面での打ち合いが基本である。その後、各種芸能の他に女性による腕棒の演武行列も奉納される。

西表島の祖納・干立の節祭は、集落前の前泊海岸にある前泊御嶽前にある「フナムトゥ（舟元）の座」という祭場が主な場所である。ウガンの神々、ミリク神を侍らせ、海の彼方から「ユー（世＝幸）」を舟で漕ぎ寄せ、その喜びを数々の芸能を演じて祝うという内容で、その際に「ヤフヌティ（ヤフの手）」と呼ばれる櫂を使った武芸や棒術がその他の芸能とともに演じられる。順番は狂言、棒芸、アンガマ踊り、男のアンガマ踊り、獅子舞いの順である。

与那国島では棒踊は豊年祭のウガンフトゥティにおいて奉納や披露の目的で行われる。午前中の祈願や綱引き（隔年）が終わると、午後からは島内のウガンの本山として合祀されたトヤマウカ゜ンの前で踊られ、チムバタイ〔棒座師匠（チス）の世代交代の行事〕がある場合は新しいチスの家の前で踊られる。ウガンフトゥティ、チムバタイ、どちらも神様への奉納、披露、お祝いする目的で踊られる。

以上のような御嶽のカミへの奉納とは違う事例もある。波照間島のムシャーマでは上演場所が他地域と異なり、島の公民館は「オーセー」と呼ばれる琉球王国時代の番所の跡地で、そこの中庭で棒術他が披露される。旧暦 7 月 14 日に道サネーの行列で演武を披露しながら公民館へ向かい、公民館の中庭では奉納演武を披露する。これはかつて綱引きや旗頭問題により部落間や部落内での揉め事があり、それを采配して治めた島の役人（首里大屋子）への感謝を示すものとして、行事の成り立ちの経緯に由来するものと考え

られる。

石垣市字白保では十五夜に棒術が披露されるが、その上演場所は「オーセ」と呼ばれる琉球王国の時代の番所（役所）の跡地において行われる。これは白保がかつて明和の大津波のため多大な被害を受け、波照間島からの移住により再興されたという歴史的経緯により、行事の場所や形態・組み立てにも影響があったものと推察される。白保では「オーセ」への奉納のための演武であると目的が説明されており、この点は波照間島の演武の目的とも底流で共通しているように思える。なお、字大浜の豊年祭でも崎原道路沿い番所（オーセー）の前で演じられることへの理由は不詳であるが、波照間島や白保のあり方と合わせて解釈していくこともできるかもしれない。

エ 伝承組織

八重山地区において、棒術等を演武する組織は、字会・区が中心となった組織、青年会が基本となるもの、基本棒術等に特化した保存会、そして字の下位組織が主体となるものに分かれるが、全体の傾向としては保存会の名称で組織を設立する動きが顕著である。その傍ら、行政行為により保存会が設立された地域もある。すなわち、与那国島の民俗芸能は「与那国島の祭事と芸能」として国の無形民俗文化財に指定されているため、各々保存会が設立されている。竹富島の「種子取祭」や西表島の「節祭」も同様である。

字会のもとに保存会が設立されたところをみておきたい。石垣市宮良では、行事の際に師匠のもとでムラの若者たちによって演舞集団が構成されていたが、個人で集団を構成し指導することは負担が大きいことから、昭和 20 年代にはすでに保存会を結成し、公民館の傘下団体として位置づけされるようになったという。

登野城字会では武術の部分は専門の師匠がいる。棒術は男性のみで構成され、年齢制限はない。したがって、青年会組織を中心とした若者が演武を担い、経験を積んだ青年会 OB 等が組織運営を行ってきた。最近は現役世代が役職を担うようになってきたことから、副師匠を 2 ～ 3 名、会計も加えた組織に変化してきており、登野城字会が主体となって保存会を設立し、地域内で継承者の育成に努めている。

字新川では新川字会の中に 1989 年に「南風ぬ島カンター棒保存会」が発足しその継承に努めている。保存会のメンバーは新川に在住する 10 代～ 50 代の男性を中心としている。字石垣では運営組織の主体は石垣字会である。武術の部分に特化した組織として「棒・獅子保存会」がある。字大浜では 2000 年に、既存の獅子保存会としてハッサン会に、棒を加えた獅子棒保存会が結成された。字平得でも「平得獅子舞棒術旗頭同好会」が設立されている。さらには、字川平では武術の部分は専門の師匠がいて、毎年公民館から役割が言い渡され、棒・太鼓の責任者を中心に演者を決定してきたが、近年は保存会が中心になって組織、役割を決定しているという。

同じ保存会とはいっても、行政による文化財指定などにともなって、保存会が設立されたところもある。

西表島祖納・干立（星立）の「節祭」は同様に国指定の無形民俗文化財となったことから、両集落を網羅した形で「西表民俗芸能保存会」が組織化されている。実際の組織運営にあたっては、公民館の青年部にて実施し、性別の制限はないが、男性が中心となり運営されている。

字会のもとに保存会が組織化されるが、その保存会が字の下位組織の中で設立されているところもみられる。それらが竹富島と与那国島である。

竹富島では種子取祭に関して「竹富島民俗芸能保存会」が設立されている。その中の組織形態は石垣島や西表島のそれとはまた異なっている。竹富島の字は大きくは玻座間ムラと仲筋ムラに分かれ、玻座間ムラはさらに東と西の集落に分かれている。そのため、奉納芸能の狂言部（男子）は玻座間と仲筋の二つの組織に分かれており、踊り部（女子）は玻座間東（玻座間村の東集落）・玻座間西（玻座間村の西集落）・仲筋の三つの組織である。狂言部（男子）の担当は「庭の芸能」で、その中に棒が含まれる。他には太鼓・馬乗者と「舞台の芸能」のホンジャー・ミルク（弥勒神）・狂言・組踊・芝居を受け持つが、玻座間と仲筋の担当する演目は決まっている。踊り部（女子）は玻座間東（玻座間村の東集落）・玻座間西（玻

座間村の西集落）・仲筋支会に分かれており、それらの演目もほぼ固定している。なお、演目の一つである「腕棒（ウディボー）」は仲筋支会が担当しているという具合である。

一方、与那国島の祭事については全体を総括する組織として与那国民俗芸能保存会がある。かつて与那国では社会組織として各ムラの部落総代制があったが、戦後にムラの公民館制度に移行した。この公民館制度に基づき、嶋仲公民館（嶋仲区）、東公民館（東区）、西公民館（西区）、比川公民館（比川区）の各公民館の毎に、ブデ（踊り）、ブ（棒踊）、クミ（組踊）、キングイ（狂言）、旗の各座に分かれて準備や実演が行われる仕組みである。したがって、実質的な役割は各公民館ごとの芸能保存会が担っている。その芸能保存会には各棒座が置かれていて、保有する棒踊りは、その棒座のみ特化している。東区には東棒座があり、東一組と東二組の二つで構成され、西区の西棒座は西一組、西二組、西三組の三つで構成され、さらに嶋仲区は嶋仲棒座で、西五組となっている。比川区は比川棒座である。なお、西棒座・東棒座・嶋仲棒座・比川棒座ともに男性のみで構成され、年齢の制限は特になく、「チス（師匠）」を経験すると「コモンウヤ（顧問）」の立場にあがる。それぞれの出身地であれば、他の地域に住んでいても、出身地の棒座に所属することができるとされている。

波照間島のムシャーマは「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」、すなわち国選択無形民俗文化財で、すでに「波照間民俗芸能保存会」が組織化されている。波照間島は行政区としては字波照間であるが、字は名石、冨嘉、北、南、前の 5 つの集落（部落）からなり、各集落には集落の会場となる部落会館がある。また全体を総括する中央公民館にあたる公民館は名石に所在する。したがって、ムシャーマの行事では前組（前部落）、西組（名石部落・冨嘉部落）、東組（北部落・南部落）という 3 つの組で組織化される。各部落会館にボーシンカ（棒衆）、テーク（太鼓打ち）、ブドリクマリ（踊り係）、コンギンシカ（狂言衆）、行列各演目係が置かれるという組織である。棒は中学生から青年が主体となっている。

以上みてきたように、石垣島では従来取り組まれてきたような字や自治会、青年会という形式ではなく、保存会としての組織化が多く確認することができる。また、行政行為による文化財指定にともなって、すでに保存会が設立されていて、各地域によって様々な組織形態がみられるものの、その基本ベースは伝統的なムラ区分や公民館制度に基づく地域集団を母胎としながら、棒術等の保存会が設立されていることが指摘できる。

オ　芸能との組み合わせ

ここでは棒術等がどのような芸能との組み合わせで演じられているのかをみておきたい。石垣市四箇の豊年祭は新川、石垣、大川、登野城の四つの字が合同で行なわれる。一日目のオンプールは各々の御嶽で行なわれる。登野城字会は天川御嶽にて、奉納として旗頭入場・奉納（旗頭・太鼓・巻き踊り入場整列）、開式のことば、祈願文奉読、神事・ミシャグパーシィ、イリク太鼓の手奉納、巻き踊り奉納、夜雨節・よーほー節があり、続いて「祝宴の部」として舞台奉納芸能がある。石垣市無形文化財「大胴小胴（ウードウクードウ）」と太鼓の段のもの他、続いて棒術の奉納がある。塩を撒いて境内が清められた後、棒術保存会による棒術の演武が始まる。最後は獅子舞の奉納で、その際もまずは獅子使いが棒術のような踊りを披露してから、獅子二頭が順に登場して獅子舞が行われるという具合である。したがって、登野城では最初に棒術が披露されるのではなく、最後の方に演じられることから清めのような位置づけといえるかもしれないが、全体として祓いと清めの意味合いがある。

同じ四箇の字石垣でも御嶽の境内において伝統芸能が披露されるが、こちらではムラの旗頭・太鼓・ションク（鉦）・銅鑼・棒術・獅子舞・巻踊り・舞踊などが順に奉納される。この点では字登野城と順番が異なり、棒術が最初の祓い的な意味が強調されている。

二日目の「ムラプール」では、新川の真乙姥御嶽（まいつばうたき）に四箇の字が集結し、神事や奉納芸能が行われる。その後、五穀の種子授けの儀礼や女性だけで大綱を結び合わせる「アヒャー綱」が

あり、次に行われる「ツナヌミン」では東西から長刀や鎌を持った武者が現れ、勇壮な戦いが演じられる。これも綱引きにともなう武術的要素をともなう演武で、このツナヌミンのあと、地域住民総出の大綱引きが始まる。

字大浜では棒術が旧盆の送り日の翌日に獅子舞と一緒に演じられる。この祭事を「イタシキバル」と呼んでいるが、棒術と獅子舞はお盆に招かれなかった無縁仏や悪魔払いと、村を清める行事だと伝えられる。

字川平では「庭の芸能」と呼ばれるスーブドゥリ（総踊り）では、座見舞として太鼓、棒、獅子舞、次に本舞としてやはり太鼓、棒、獅子舞が演じられる。次に「舞台の芸能」として五穀豊穣感謝の口上をはじめミルク行列、各種の舞踊や狂言などが演じられる。「庭の芸能」の組み合わせでわかるように、祭祀的側面が強く、祓いの意味で行われる。

竹富島の種子取祭では、庭の芸能での行列の順序は①棒（ボー）、②太鼓、③マミドーマ、④ジツチュ、⑤真栄（マサカイ）、⑥祝種子取、⑦腕棒、⑧馬乗り（ンマヌシヤ）である。最初に棒術が行われるのは、青年らによる「棒術」で場を清めるものとされている。竹富小中学校の「太鼓」、仲筋支会の働く女性を表した「マミドー」、西支会の琉球王に拝謁する喜びを表現する「ジッチュ」、東支会の農耕作業の様子を映す「マサカイ」、石垣竹富郷友会の「祝い種子取」、仲筋支会の女性同士が力勝負する「腕棒（ウディボー）」、玻座真芸能保存会の馬に乗り飛び跳ねるしぐさの「馬乗者（ンーマヌシャ）」が順に奉納される。

西表島の祖納・干立の節祭では、演武構成は奉納演武として棒術、ミリク行列、アンガマ行列、フナムトゥの行事として奉納舞踊（「祖納岳節」「まるまぼんさん」「西表口説」）が披露狂言、獅子舞、ユークイのフナクイ（舟漕ぎ）という紅白の二艘による競漕がある。

写真2-3-1　前泊の浜での二人棒〔西表島祖納〕2014年

波照間島のムシャーマでは、旧 7 月 14 日の午前は「ミチサネ」と称される仮装行列が西組・東組・前組に分かれて行われる。その際に各組のボー・テーク（棒・太鼓）のシンカによる演武がおこなわれる。棒は獅子とともに行列の中では各組ともに最後のとりを務める。例えば、前組の場合、ブーパタ（大旗 9・ナーリ（実り）・弥勒・五穀の籠・弥勒の子ども・弥勒節・かりゆし節・豆どうま節・崎枝節・からちゃん踊り・六調節・山崎ぬアブジャーマ・ブーブザー・魚つり・パピル節・ボー（棒）・テーク・シィーシィ（獅子）の順番である。仮装行列の終了後、公民館の中庭の桟敷前で、西組・東組・前組の三つの組によるテークと棒の演舞が行われ、最後にニンブチャー（念仏踊り）で終わる。

午後は中庭の桟敷に設置された舞台芸能が披露される。「かぎやで風」、「一番コンギ」（西）、「世果報節」、「一番コンギ」（東）、「五月雨節」、「安里屋節」、「崎山ゆんた・みなと一ま」、「かしかき」、「コームッサー」「シーシン棒」、「獅子舞」が披露され、その後再びミチサネとして帰りの仮装行列が行われる。各組はそれぞれの会館もしくは所定の場所に戻るとそこで太鼓と棒が演舞されて、すべての祭事が終了となる。

与那国島の嶋仲区では、最初に棒踊が座ならしとして披露され、その後には舞踊の「ミティ唄」、狂言「ウプンダ」、棒踊の「ミティアギ」・「スナイ」・「六尺なぎ刀」・「六尺イララ」・「六尺二人棒」・「六尺三人棒」、その後は舞踊「旅果報節」・「ティンナ節」、空手の演武、舞踊「亀甲節」ほか 9 演目が続き、そして最後に棒踊の「ティンバイ」・「三尺イララ」・「六尺四人棒」・「三尺二人棒」・「三人棒」・「チチヌ棒」で締められる。こうした最初に棒踊で座ならしがあり、途中に舞踊や狂言、組踊などをはさみ、最後は棒踊でしめるというプログラム構成は、東区・西区・比川区ともに同じである。

以上のように、八重山地区では棒術が単独で披露されるという例はなく、御嶽の前で行われる奉納芸能では、太鼓や獅子舞などとともに祓いや清めの意味で披露されている。波照間島のムシャーマでは祭事の最初に太鼓と棒が演舞され、また各組に分かれての最後の締めにも太鼓と棒が演舞されることから、祓いと

清めの意味合いが強くあわられている。一方、与那国島では棒の最初の演目を「ダーナラシ（座ならし）」といい、開演を告げる意味合いがあるという。棒踊がプログラムに含まれていない時も、すべてに先駆けして演じられるという。棒の演武にはそうした幕開けとしての意味合い付与されていることも留意すべきであろう。

カ　武術的身体表現の種類

武術的身体表現の演武について種類を分けて紹介しておきたい。棒術、南風之島系統の棒と獅子舞、綱引きのツナヌミンにみられる演武、その他の芸能にみられる演武に分類して記述する。

（ア）棒術

a 型の演武と対面形式が主なタイプ

写真2-3-2　登野城字会の結願祭の棒 2010年

字登野城の演武としては型の演武（舞）と対面での打ち合い等がある。六尺棒、三尺棒、ヤリ、ナギナタ、カタナ、カマ（ガギ）、サイ、トンファー、ヌンチャクを二名一組の組手で演武する。ただし、ヌンチャクの演武は 1985 年以降の記録がなく、演じられていない。1973 年の登野城敬老会に披露した記録によると、棒の手としては、前ヌ手、ガギ（鎌）ヌクンス手、ヤリとナギナタ、六尺ヌ手、ベンケイヌ手、六尺ヌクイ手、新六尺、ヤリトゥヤリ、六尺ヌ手、ナギナタ、後ヌ手二人、サンチンヌ手、ガギトゥ鎌などがあった。基本すべてが二人一組による演武である。前ヌ手と後ヌ手二人はいずれも尺棒（三尺棒）による演武。クンス手はくずし手のことで、応用変化の手。六尺ヌ手は六尺棒の手の意味。クイ手は頭上を跳び越える手のこと。サンチンヌ手は棒術の基本型を示した手のこと。〔牧野：1975 年、p144 ～ 149〕

字川平では座見舞にて披露される棒の種類は豊富で、刀棒、六尺棒、三人棒、佐久川棒、眞境名棒、鎌（ガキィ）棒、ティンバイ棒、百姓棒、エーク、カニパー（クワ）がある。三人棒以外は二人一組であり、数組から十数組で構成される。本舞では棒の演技は二回おこなわれ、演技中は銅鑼、大太鼓が打ち続けられる。一組ずつ庭の中央に出て演ずる。基本的には仲間満慶山から伝承された棒術を基本とし、役人と百姓の戦いや三人棒（大男と小人の戦い）等、迫力ある棒術が特徴である。〔沖縄県教育委員会：1979 年、P15〕

竹富島の種子取祭では、庭の芸能で行列と言われる演目があり、最初に一番棒～五番棒まで、二人一組の十人が入場し演技を行う。楽器の銅羅鐘太鼓ホラ貝（ブラ）の音で演技を行うもので、一番棒は二人とも六尺棒での棒合わせ、二番棒は刀と槍、三番棒は槍と刀、四番棒は鎌と薙刀、五番棒は薙刀と刀の組み合わせである。対面での打ち合いが基本で、最初に一番、三番、五番の奇数の者が打ち合い、次に二番、三番の者が打ち合うある流れである。

西表島祖納・干立の節祭では「棒芸」とか「棒踊り」と呼ばれ、鎌と棒（ガヒヤー棒）、二人棒、三人棒、鎌棒、五人棒で構成される。ドラ、太鼓、笛の伴奏とともに、青年、小学生、中学生、郷友会も参加して勇壮に演じられる。

写真2-3-3　ムシャーマのガッキャ棒（長刀と鎌）
〔波照間島〕

波照間島のムシャーマでは棒の演武が行われる。西組・東組・前組のそれぞれのボーシンカが、二人一組の 10 人で順に披露する。西組の一番棒はジンバイ（笠と長刀）、二番棒は刀棒（刀と長刀）、三番棒はガッキャ（鎌）棒（鎌と六尺棒）、四番棒は六尺棒（六尺棒と長刀）、五番棒はマンチョー（六尺棒と六尺棒）という形式である。一番棒から五番棒までの名称や内容は組ごとに少しずつ異なり、東組はでパナ棒（笠

と長刀）、ガッキャ棒（鎌と長刀）、ヤラ棒（長刀と長刀）、ボンタ（五尺棒と長刀）マ、トゥム棒（六尺棒と六尺棒）、前組はジンバイ（長刀と長刀）、ガッキャ棒（鎌と薙刀）、刀棒（刀と長刀）、六尺棒（六尺棒と長刀）、トゥム棒（六尺棒と六尺棒）である。最後に六尺棒の対戦でしめる点は共通している。

与那国島では棒の演武の種類は多くあることが特徴である。四つの組が各々演じるが、西区では 16 種類、東村区では 20 種類、嶋仲区では 15 種類、そして比川区では 16 種類である。そのうち、種類が一番多い東区を例にすると以下のようである。①ミティアギ、②六尺一人手棒、③イララ六尺棒、④ティンバイ、⑤三尺二人棒、⑥六尺二人棒、⑦ペラ棒、⑧イララ三尺棒、⑨サグ棒引きティ二人、⑩サグ棒イララ、⑪ンビフティ棒、⑫三尺三人棒、⑬ハディリ棒、⑭マラウティ棒、⑮六尺四人棒、⑯マーヌムヌ棒（マンナ棒）、⑰五人棒、⑱ブリ棒、⑲チチヌ棒、⑳ンビチ棒というようになる。東区にあって他の区にない演武があったり、逆に東区になく、他の区にみられる演武があったりと異同がみられる。

ウガンフトゥティ、チムバタイ、どちらも、神様への奉納、披露、お祝いの意味あることから、ウガンフトゥティでは、開演を告げる「座ならし」、六尺一人が登場する「ミティアギ」と他全出演者が揃う「スナイ」のあとに 3 演目ほど棒踊りを行う。なお、豊年に・豊穣に関係するイララ（鎌）を使った踊りは定番となっている。

写真2-3-4　棒の演武：六尺薙刀（嶋仲棒座）〔与那国町教育委員会所蔵〕

写真2-3-5　棒の演武：ティンバイナギナタ（西棒座）〔与那国町教育委員会所蔵〕

b　型の演武・対面形式と総巻きのタイプ

字登野城の棒術はかつて十八組まであった。「スーマキ（総巻き）」という集団演技もあって、他ムラにはあまり類例がなく、最も登野城の特徴を示したものであったとされる。他のムラからも型を盗むために密かに見に来たりしたが、複雑でまねをすることができなかったという。〔牧野：1975 年　p144 ～ 149〕

字白保では六尺棒、三尺棒、ヤリ、カマ（ガッケ）、サイ、ナギナタを二名一組の組手で、十組により演武する点は同じであるが、編成の順番が四通りあり、いわゆる「総巻き」のような形式をもつ。

最初は「スネ棒」といい、オーセーの広場に入場する際には二人一組で銅鑼の音に合わせ「ユイ」という掛け声と共に、すり足により境内で列を作って直進して整列し、その後十組の棒術演武が行われる。棒術演武の最後には、ティー棒と呼ばれる型の演武が二名により行われる。

次に「スカシ棒」がある。ブラと銅鑼の合図で二列に並び駆け足で左周りに境内を移動し、境内中央から対角線になるように前と後ろの演武者が向かい合う形に配置する。ブラの合図と共に一番棒から順番に演武していく。演武する際は、ブラの合図でお互いに「ヤー」と掛け声を上げ立ち上がり、銅鑼の音と共にゆっくりとすり足でお互い相手に向かっていく。徐々に早足になり、最後はお互いの肩で勢いよくぶつかり、棒術の演武が始まる。演武終了後は、お互い向かい合ったまま、ゆっくりとすり足で後ろに下がってゆき、最初の位置に戻り「ヤー」の掛け声で睨み合って終了する。十組の演武の後にブラと銅鑼の合図でティー棒の演武が境内正面に向かって行われる。

スカシ棒が終わると「ブラ打ち」といい、ブラと銅鑼の合図で一列に並び駆け足で左周りに境内を移動し、

一つの大きな円になるように配置する。ブラと銅鑼の合図で演武者全員で一斉に棒術の演武を行う。

ブラ打ちが終わると、「スーマチ（渦巻き）」の演武である。ブラと銅鑼の合図で一列に並び駆け足で左回りに境内を移動し、中心に向かって渦巻きを作りながら小さな円になっていく。先頭が中心に来たら、体を反転させ逆回り（右回り）に駆け足を行い、渦巻きを作りながら、大きな円になっていく。最後はそのまま鳥居から駆け足で退場する。

（イ）綱引きのツナヌミンにみられる演武

字新川のツナヌミンでは、型の演武（舞）や対面での打ち合い等がある。演武には、東の大将と西の大将と呼ばれる 2 人の武者が登場する。東の大将はナギナタを持ち、ナギナタで振り払う、切り込む、振り下ろすなどの攻撃をする。一方、西の大将は鎌をもち、相手の攻撃を飛んでかわす、身を入れ替えてかわす、鎌で受け止めるなどをし、終盤に唯一、相手に鎌を足元めがけて足払いの攻撃を行う。また、それぞれの動作の合間には、お互いに見えを切り、威嚇して激しい攻防を繰り返す。

竹富町黒島では、旧正月に綱引きがあり、双方の綱の上には、北から鎌を持った演者、南から槍を持った演者が出てきて打ち合いの演舞をする。

（ウ）南風ぬ島系統の棒と獅子舞

字新川の南風ぬ島カンター棒は、鳴物（笛吹、太鼓打、銅鑼）と、棒舞組（10 ～ 15 組）、獅子 2 頭で構成される。棒舞組は、地謡の音に合わせ、2 列に整列して入場し、ニナイディ（備えの構え）、廻り舞い、舞いティ（一番の舞）、ツキディー（二番の舞）、カミディー（三番の舞手）、ウツディー（4 番の打ち手）、マキティー（巻き手）、カクティーを演舞する。演舞が終わると、雄雌の獅子が登場し、獅子パーシーの声かけの元、獅子舞が演じられ、獅子舞が終わると、全体で退場する。

波照間島には「シィーシンボー（獅子の舞）」という五尺棒を持って、三組の獅子舞との演舞が行われる演目がある。これの伝来の年来は不明であるが、伝承によると昔、南方諸島からの漂流民が波照間島と新川ムラに伝えたとされ、波照間島では「シィーシンボー（獅子の舞）」、新川ムラでは「ハイヌシマ（南風ぬ島）棒」と称されたという。波照間島のシィーシンボーは新川のそれと共通するところが多かったといわれるが、その演技が複雑で伝授に困難があったので、簡略化されて現在のように踊られているとされる。

写真2-3-6 シーシン棒[波照間島・西組]

（エ）その他の民俗芸能にみられる武芸

西表島の祖納・干立の節祭は、集落前の前泊海岸にある前泊御嶽前にある「フナムトゥ（舟元）の座」という祭場が主な場所である。ウガンの神々、ミリク神を侍らせ、海の彼方から「ユー（世＝幸）」を舟で漕ぎ寄せ、その喜びを数々の芸能を演じて祝うという内容で、その際に「ヤフヌティ（ヤフの手）」と呼ばれる櫂を使った武芸が演じられる。また、黒島の豊年祭や結願祭でも同様のエークの演武がみられる。

竹富島の種子取祭では、庭の芸能の行列で女性による「腕棒（ウディボー）」という行列がある。腕棒も銅羅鐘とホラ貝で行う。棒というが棒は用いず、女性が二人一組で、素手により演技するという竹富島特有の女性による演武である。

腕棒は、かつて玻座間村の男子が演じていたが、それほど人気がなく、いつしか演じられなくなった。そ

のようなとき、仲筋村の狂言部の師匠であった仲里長正さんがこの腕棒を女性に演じさせようと考えた。長正さんは奥さんの仲里ハルさんと友人の小底ハルさんを使いにやって、玻座間の師匠に頼んだところ、師匠は「ウリヤ、ウムッサンネンバ、ムチハリ（これは面白くないので、持っていきないさい）」と快く承諾してくれたという。それで腕棒は仲筋の女性が演じる人気演目になった。

竹富島の種子取祭では「鬼取り（鬼狂言）」があり、この中には福仲親雲上という棒術使いの武士、空手を特異とする佐久間里主などが登場する。また、踊りには空手の型がみられる。さらに、黒島の豊年祭や結願祭の舞踊には空手の動きが混じっているものがあるという。

著：萩尾　俊章

第４節　町道場とムラ行事との関わり

本項では、道場とムラ行事との関りについて、いくつかの事例を紹介する。関わり方は様ざまであるが、いずれも道場の在地である地域社会との関わりのなかでムラ行事と関わってきた。

どういったムラ行事に、どういった関わり方をしているのか。最も多い関わりとして挙げられたのはムラ行事内での空手演武であるが、空手演武と一口にいってもその関わり方には幅があった。すなわち、イベント内の余興として演武を行うような関わり方から、綱引きにおける重要な役割として演武を行うような関わり方である。関わる行事は様ざまであり、綱引き、豊年祭、道ジュネー、エイサー、農耕儀礼である「アブシバレー」、行政主体に行われるイベント、自治会まつりや納涼祭、敬老会が挙げられた。また聞取り時には、かつて関わったことがあるものとして、ハーリー（龍舟競漕）における舟上での鼓舞のための演武を行ったことがあるという話もあった。

また民俗行事としての棒術に指導として関わっている道場もあった。指導には二つの場合があり、一つはその地域社会に伝承される棒術に対して、空手や古武術の知識から指導を行うというものである。もう一つは、もうすでに地域社会には棒術の伝承が失われており、代わりに自身が身につけていた空手や古武術を地域社会の人びとへ指導し、ムラ行事の棒術として実践するというものである。

以下では、ムラ行事との関りを持つ町道場の道場主らに聞取りを行い得られた、具体的な関わり方について述べる。その後、筆者が実際にムラ行事や道場での稽古を訪れ観ることが出来た八重瀬町志多伯について、その様子や聞取りで得られたことを述べたい。その上で内地との違いを示し、沖縄空手の道場と地域社会の関わりについて考察を行う。

写真2-4-1　沖縄空手道小林流小林館協会八重瀬道場

写真2-4-2　沖縄小林流空手道協会宮城空手道場

1　ムラ行事における空手道場

沖縄空手道古武道小林流武心館（以下、「武心館」と略す）は、区長からの要請で、南城市玉城船越地区の農耕儀礼である「アブシバレー」における余興として空手演武を行ったという。武心館に限らず、余興による演武は様々な道場が依頼されると聞く。武心館の場合も、地域社会と道場の関係から呼ばれて演武を行うこともあるが、毎年声が掛かるということではないようだ。しかし、後述するように、こうした余興として空手演武が行われること自体は注目すべき点だと考える。

次に挙げる事例は、ムラ行事自体に深く関わる人物が道場にいたために、強いつながりが生まれた事例である。那覇市壺屋にある究道館道場の比嘉康雄氏（以下、「康雄」と略す）は、沖縄で最も知られる綱引きである那覇大綱引きにおいて、西側の旗頭とガーエー演武を担っている。こうした役割が究道館道場に任されている理由は、究道館創始者であり沖縄空手界に広く名が知られている、小林流の比嘉佑直（1910－1994、以下「佑直」と略す）が那覇大綱引きの復活に関わっていたためである。那覇大綱引きは 1935 年に一度途

絶え、その後 1971 年に復活し現在まで続く綱引きであるが、佑直は復活以前の那覇大綱引きにおいて旗頭を務めたこともあり、那覇大綱引きの復活に対して実行委員会理事長として大きく尽力したという。71 年の復活時から佑直の甥であり、彼の死後に究道館を引継いだ比嘉稔氏（以下、「稔」と略す）も参加し、のちに旗頭やガーエーの演武を行う立場を長く務めた。そして、稔の息子である康雄もまた幼少期から綱引きと関わってきた。康雄は「最も誉ある役割」と語る。こうした、ある特定の場において空手演武すること自体が誉として、羨望を向けられるということは、空手演武が沖縄社会において一定の力を示すことの現れに感じる。

一方で、以下の事例は、ムラ行事において実践される棒術との関わりを持つ道場の事例である。八重瀬町の小林流小林館八重瀬支部道場は、道場の在所である八重瀬町小城や隣接する当銘において実践される棒術に対して指導を行ってきたという。当地では、棒術は綱引きや龕甲祭などにおける道ジュネーやエイサー祭り、村あしび等において登場する。その際に、動作に対する武術的な意味を伝えている。例えば、棒の目付けの位置や構えについて、こういう意味があるということを教えているという。ただし、行われている形については絶対にアレンジしないという。というのも、そもそも地域社会に定着している棒術とは、かつては各家でそれぞれに「〇〇家の棒術」といった形で継承してきたものであり、それぞれの家で独自の決まりが存在していたという。そのため、個々の形には何か意味が込められていることもあるため、あくまでも武術的な意味を伝えることにしているという。一方、恩納村山田では獅子舞の棒術に対して、小林流妙武館恩納支部道場の支部長で、山田出身者である比嘉秀康氏（以下、「秀康」と略す）が自らも参加しながら指導を行っているという。こうした棒術の指導は 2016 年に獅子舞の保存会が発足した際に始まった。当時、山田の獅子舞では棒術が失われており、秀康が身につけていた古武道の型から、一人で行う型と組棒の型を創作した。秀康自身も演武を行っているが、どうしても古武道の型をそのまま入れることは出来ず、創作に至ったようだ。その後も秀康自身も演武者として、指導もしながら参加している。

以上の二つの事例は、いずれも道場が土地に存在しており、また道場主もその土地の人間であるため、地域社会の成員としてそもそもムラ行事と関わりがあり、その延長で指導や創作を行っている事例であった。同様に、浦添市にある沖縄小林流空手道協会第四代会長でもある宮城驍氏（以下、「宮城」と略す）の道場である宮城道場の場合は、地域社会の綱引きに道場として積極的に関わってきた。浦添市城間の綱引きは、30 年ほど前まで途絶えていたが復活の声が高まり、1992 年に復活を果たした。その際にガーエーの役が宮城道場に依頼され、宮城道場は門下生の子どもたちを2つに別けガーエーをさせた。その後、ガーエーの際に行う組棒も空手の武器術をもとに考案した。また綱引き前に空手演武を地域内の各所で行うことも始めた。こうした場は、いつからか道場に通う子どもたちの稽古成果を見せる場となっていったようだ。通常であれば、道場生であっても城間出身者でなければなかなか地域の民俗行事に参加できない。しかし、宮城道場では城間外の子どもたちも綱引きに関わる一連の行事へと参加させ、彼らも含めた子どもたちを積極的に地域社会へと紹介する場としていった。例えば、自治体の子ども会での活動を頑張った子を「シクタ」役とし、地域社会の人びとの前で披露した。そうした子どもたちのなかには、非行に走ろうとしているところを宮城らが気づき、宮城道場で空手を学ばせることでそうした方向へと進ませなかったような子どももいたという。ほかにも、例えば行政などから依頼され行う空手演武にも積極的に門下生を参加させることで、彼ら／彼女たちの演武機会と、地域社会の人びとに覚えてもらう場を作ってきた。宮城道場は大学生までの門下生の教授を無料としており、民俗行事との関りに限らず、地域社会の子どもや青年たちに対して開かれた場として存在している。宮城道場の場合、道場が地域社会に存在していたことも大きいが、宮城自身が教師として勤めてきた経歴もあり、子どもたちの育成に対して目を配っていたことも大きいだろう。

以上のように、ムラ行事に対して積極的に関わりを持つ道場の人びとは、いずれもそれぞれの地域社会の成員としての意識から、そうしたムラ行事への空手を通じた関与も生まれているようだ。そして、地域社会の側も空手道場が存在していること自体を認知しており、一定の役割を期待している様子もみられる。

2　八重瀬町志多伯における棒術

本項では、沖縄古武道連盟志多伯支部の活動について、観察と聞取りから示していく。沖縄古武道連盟志多伯支部は古武道の道場でありながら、別の名称も持つ。それは、志多伯獅子舞棒術保存会（以下、「棒術保存会」と略す）という名称である。連盟支部道場でありながら、地域社会の保存会組織でもあるという、二つの立場を持つ。このような二つの面を持つ棒術保存会は全国的にも珍しい。棒術保存会は武術道場として積極的にムラ行事、地域社会と関わっており、さらには「よそ者」もそこに加わり活動を行う組織である。そうした意味では前述した浦添市の宮城道場も同様であるが、棒術保存会の場合は特定のムラ行事に限らない活動を展開しており、その活動範囲は沖縄を越え、海外に出向くこともあったという。本項では、棒術保存会を二つの面を持つ道場として捉え、その上でその活動を示す。なお、棒術保存会については、2018 年の志多伯豊年祭「志多伯獅子加那志」（以下、豊年祭と表記する）を中心に分析した山本〔2023〕において、その誕生や組織のあり方について論じられている。本項では山本〔2023〕による分析を踏まえつつ、2024 年9月 17 日に開催された 13 年忌の志多伯獅子加那志の調査をもとに述べる。

八重瀬町志多伯では綱引きや青年エイサー会、豊年祭などにおいて棒術が登場する。この棒術は棒術保存会により継承されるものであるが、ムラ行事に登場する棒術をルーツとするものではなく、古武道の棒術である。当地にはかつて棒術が伝承されていたようであるが、先述した恩納村山田同様に、その継承は途絶えてしまっていた。そのため、棒術保存会の現会長である神谷政光氏（以下、政光と略す）が、自身の修得していた古武道の棒術を志多伯の人びとに教え、新たな志多伯の棒術として復活させた。山本〔2023〕において「仲間集団」として描かれる棒術保存会であるが、武術の道場として考えた場合、年齢層が圧倒的に低い。中心的に活動するのは 10 代後半～ 20 代であり、10 代以下や 10 代前半の子どもたちが多数を占め、20 ～ 30 代が少なく、40 以上が継続的に稽古する一般的な武術の道場とは様子が違った。また女性の数がかなり多く、その点も少し違っている。こうした様子は、いわゆる「仲間組織」が持つイメージとも違う。確かに参加している人たちのほとんどは志多伯の人びとであり地縁により担われていることは間違いないが、一方で他県から仕事で沖縄に赴任してきて参加している人物や、八重瀬町で生まれ育っているものの志多伯出身ではない人物も参加していた。前者はもともと古武道をやっており、その伝手で棒術保存会へ参加して始めた。彼女は、一般的な道場のあり方とは違うものの、在所から1時間半掛けてでも通いたいと思えるほどに楽しんでいると語る。また後者は、同じく棒術保存会に参加する友人の「かっこいいからやろう」という誘いで参加したという。当初は全く関心もなかったものの、やっているうちに友人の言う「かっこいい」が分かるようになり、楽しんでいると語ってくれた。その友人という人物もまた、もともとは棒術保存会に関りがあったわけではなく、教員として赴任する小学校の運動会において、棒術保存会が関わり小学生たちを指導し行われた出し物に感動し、自らやってみたいと強く思うようになり参加したという。また志多伯在住である、いずれも 10 代後半である三姉妹は父がやっていたことに加えて、長女が進学で沖縄を離れることが決まっているなかで、何か沖縄らしいことをしたいという気持ちから始めたという。こうしてみると、同級生などによって組まれるいわゆる「仲間組織」と違った人びとの加入も、近年になり進んでいるようである。また参加理由も様ざまであるが、祭り組織への参加理由の多くが地縁であるなか、武術道場である側面が、より多様な参加背景をもつ成員を増やしているようだ。

このように、棒術保存会は一般的な武術の道場とは少し雰囲気が違っている。特に「かっこいいからやりたい」という点は、地域社会や人びとに対して演武をみせることの持つ力が関わりそうだ。事実、棒術保存会には「武の舞」と呼ばれる、舞台演武に特化した創作型が存在する[7]。そうした地域社会に対してみせる棒術保存会の姿は、13 年忌の豊年祭において明確にみられた。台風直撃のなか行われた 2024 年の豊年祭ではあったが、演劇や獅子舞と共に行われる棒術保存会の「武の舞」は、ひと際歓声が沸くなかで行われてた。こうした様子に筆者は驚いた。なぜなら、内地の武道や古武道の演武において、歓声が沸くということはほとんど

7　この「武の舞」は本学術連絡会委員であり、政光の息子である神谷武史氏が考案したものである。

無いからである[8]。特に政光による鎖鎌の演武時に起こった大歓声は、まさにデュルケームがいう「沸騰状態」[9]といえるほどであった〔デュルケーム 2014〕。こうした状態は次の演劇に移るまで途切れることなく続いた。この様子からもわかるように、棒術保存会による「武の舞」は、志多伯の人びとや筆者のような外から豊年祭を観に来た者を含めた人びとの間に、演武を通じた情動的つながりを生み出していた。

写真2-4-3 豊年祭における「武の舞」（田邊撮影）

以上の様子からは、棒術保存会がただの武術の道場に留まらない存在であることがわかる。こうしたあり方は空手としてもしかすると認められないのかもしれない。しかし一方では、沖縄の地域社会において空手が今なお失わずにいる力の一端も垣間見られたように感じた。

3 小括

本項では、沖縄空手の道場とムラ行事のかかわりについて、ごく少数の事例からではあるが、どういった関係があるのかを述べてきた。綱引きやハーレー、豊年祭など、その行事における重要な役割として空手演武が位置づけられ、そこでの演武が誉として存在していることは、沖縄の社会における沖縄空手の存在意義が、いまなお失われていないことを現わしているだろう。こうしたあり方は、余興として空手演武が選ばれることからもわかる。例えば、結婚式における余興として空手演武は必ずといって良いくらい行われるという話も多く聞かれたが、結婚式がかつてのような地域社会をあげての行事ではなくなっているものの、人びとの生活に位置付く儀礼であることは変わらない。空手が沖縄の人びとの生活レベルに浸透しているために、そうした場において余興として登場するのではないだろうか。余興というあり方は、近代に誕生した「武道」では禁止されたため、未だに一般的ではない。一方で、空手の場合はそうした場において演武をみせることに意義が認められ、社会的にも定着している。志多伯の棒術保存会が積極的に「武の舞」を創始したことや、宮城道場や妙武館恩納支部道場がムラ行事のために型を考案したことも、こうした余興が持つ意義を積極的に認めているためではないか。

以上を踏まえ、現代社会における地域社会と武術の関係について、沖縄空手と内地の武道のあり方を比較すると何が見えてくるのか。沖縄空手と同様に流派により継承される内地の古武道各流派の道場の多くは、現代では地域社会との関係性が希薄になってきている場合が多い。1章で述べたように、そもそも地縁と関係なく伝承される場合もあるが、現代社会においては人びとの移動が常態化していることもあり、継承した人間が土地を離れることも多々あり継続的な地縁を築きにくい。武道と違い、学校教育の文脈にも位置付かない古武道は、現代社会において非常にマイナーな存在であり、個人の趣味の範疇で実践されてきた。多くは、そうしたシリアスに取組む個人により担われており、そうした背景もあるために地域社会と接続する文脈が希薄である。こうした点は沖縄空手の場合も同様のようであり、本項でみてきた、いずれの道場においても、中高生に

8 近代に誕生した「武道」は、観客の態度に対しても制限を設けてきた。こうした状況は未だに続いており、剣道ではスポーツ観戦時にみられるような歓声は禁止されており、まさに固唾を飲んで見守るかのような状況で観戦をする。詳しくは第 1 章を参照。

9 儀礼にみられる演劇的な側面について、デュルケームは以下のように述べる。「それらの上演は、どんな功利的な目的とも無関係に、人びとに現実の世界を忘れさせ、想像力がくつろぐ別の世界へと彼らを運ぶ。それらは気晴らしをもたらすのであり、娯楽の外観を呈することさえある。参加者たちが公然と笑い、楽しんでいるのが見られるのである。」（デュルケーム , 2014, p.306.）。

なると受験勉強や部活動などが優先され、また就学・就職により空手から離れる者が多いと聞いた。そのため 10 代までは流動的であり、20 ～ 30 代の数もそれほど多くない場合が多かった。しかし、流動的とはいえ常に空手を習いに来る子どもたちが数多く存在する点は、前述した古武道のあり方とは違う。この点において、空手を経験すること自体が意義を持っていると考えられる。

また道場のあり方も関係するだろう。つまり、道場という存在が社会的に見え難くなることが、地域社会との関係性を希薄化させる要因ではないだろうか。今日、内地の古武道流派のほとんどは固有の稽古場を持っておらず、公共の体育施設等の道場を利用して稽古を行っている。そのため、その存在が認知されにくい。そうした点は、剣道や柔道も同様であるが、しかし前述したように存在自体が非常にマイナーであるため、そうした公共施設において稽古が行われていること自体が認知されないのである。一方で沖縄空手の場合、近年では公共施設を道場代わりに利用している空手道場も増えてきているというが、そうとはいえ、沖縄の町々には空手道場が健在である。現在でも多くの道場が看板を掲げ、地域社会のなかにその存在を示している。人びとの目に映る風景の一部として道場が存在していることが、ムラ行事との関わりが保たれている理由ではないかと考えられる。

本項では、道場とムラ行事との関わりから分かることは、様ざまな場において空手演武や棒術が登場すること自体に、沖縄の地域社会では一定の力や意義が見出されるからではないかと考察してきた。志多伯の豊年祭において、演武が行われる場に集まる人びとの間に情動的なつながりをもたらされた様子は、空手やその演武が地域社会の文脈に根付いている一つの形の現れではないだろうか。

引用文献

エミール・デュルケーム 2014『宗教生活の基本形態 下 オーストラリアにおけるトーテム体系』, 筑摩書房 .

山本素世 2023「伝統祭祀行事の継承と地域社会――八重瀬町志多伯を事例として――」, 平井順編『沖縄的共同性の構築と継承：シリーズ沖縄の地域自治組織２〈南部離島編〉』, ナカニシヤ出版.

著：田邊　元